



大学教育再生加速プログラム

文部科学省大学教育再生加速プログラム (AP)
Acceleration Program for University Education Rebuilding

テーマV 卒業時における質保証の取組の強化

事業報告書

(令和元年度)



高知大学
Kochi University

目次

はじめに

第1章 大学教育再生加速プログラム（AP）の概要

1.1 事業概要	1
1.1.1 主な取組	1
1.1.2 事業の実施体制	1
1.1.3 評価体制	3
1.2 令和元年度までの大学全体の教育改革に関する取組状況	3
1.2.1 AP事業までの大学全体の教育改革に関する取組状況と課題	3
1.2.2 AP事業開始以降に得られた成果	3
1.2.3 各取組における目標値一覧	5

第2章 令和元年度大学教育再生加速プログラム（AP）の具体的な取組と実績概要

2.1 I. 教育改革に向けた意識改革	7
2.1.1 目的	7
2.1.2 主な取組内容	7
2.1.3 成果	9
2.1.4 具体的な取組内容	9
2.1.4.1 教員の意識改革に関するアンケートの実施	9
2.1.4.2 令和元年度アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査の実施	13
2.1.4.3 FD・SDウィーク（授業公開週間）の実施	15
2.1.4.4 令和元年度高大接続の視点による授業協議会の実施	17
2.1.4.5 パフォーマンス評価に関わるFDの開催	18
2.1.4.6 リフレクション・セメスター及び学生面談に関わるFDの開催	19
2.1.4.7 外部講師によるFD「ティーチング・ポートフォリオについて」の開催	20
2.2 II. 多面的評価指標を外部と共同開発する	22
2.2.1 目的	22
2.2.2 主な取組内容	22
2.2.3 成果	24
2.2.4 具体的な取組内容	24
2.2.4.1 学修ポートフォリオ（e-ポートフォリオ）の機能の拡充	24
2.2.4.2 ディプロマ・サブリメントの発行	26
2.2.4.3 多面的評価指標開発研究会の開催	27
2.2.4.4 多面的評価指標ルーブリックモデルの実施	28
2.2.4.5 外部アセスメントテストの実施 大学生基礎力レポート	30
2.2.4.6 統合・働きかけのパフォーマンス評価の実施	34
2.3 III. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する	36
2.3.1 目的	36
2.3.2 主な取組内容	36
2.3.3 成果	37

2.3.4	具体的な取組内容	37
2.3.4.1	卒業生調査及び卒業生就職先調査の実施	37
2.3.4.2	リフレクション・セメスターにおけるインターンシップふりかえりセミナーの実施	48
2.3.4.3	大学教育の質保証に関するアンケートの実施	50
2.3.4.4	学修成果と学生生活のデータの分析及び検証	62
2.3.4.5	令和元年度外部評価委員会の開催	69
2.4	AP事業の情報の収集と発信	72
2.4.1	先進モデル校の視察	72
2.4.2	シンポジウムの開催	73
2.4.3	学外の研修等における発表	80
2.4.4	平成30年度AP事業報告書及びその他刊行物の発刊	85
2.4.5	学外の情報誌等への記事掲載	86
2.4.6	AP事業ホームページでの情報発信	87
2.4.7	学生へのインタビュー動画「Mana Video」の作成	87
第3章 まとめ		
3.1	高知大学における教育の質保証－AP事業終了後の取組－	88
第4章 資料集		
4.1	本報告書で使用する用語・略語	90
4.2	令和元年度FD・SDウィーク	91
4.3	セルフ・アセスメント・シート様式	97
4.4	高知大学ディプロマ・サブリメント	99
4.5	シンポジウム資料	101
	・開催案内	101
	・ポスターセッション発表テーマ一覧	102
	・講演資料	103

学長挨拶

高知大学は、地域に根差し、地域と共に発展することで、不断に進化する国立大学 "Super Regional University" を目指しています。このためのエンジンとなるべく、平成27年度以降、全学の組織改革を行い、"Super Regional University" にふさわしい教育・研究体制を整えてきました。

また、高知大学は、地域に根差し、地域とともに発展するための教育の柱として、「総合的教養教育」と「地域協働による教育（地域協働型教育）」を掲げています。前者では『知識・技能を学生の内面で統合し、世に働きかける能力を育成すること』を、後者では『状況に応じて知識・技能を使いこなす「統合・働きかけ能力」すなわち「メタ・コンピテンシー」を活用する能力を育成すること』を主眼としています。

平成28年度の文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」に採択された本学の取組は、「地域協働型教育」の展開と学生の能力を育成することに加えて、①「教育」に対する教職員の意識改革、②「多面的評価指標」の開発、③地域と社会と協働した「学生の成長の検証」を3本柱とし、教育の質保証のための基盤構築を目指したものでした。

本事業は令和元年度に終了年度を迎えましたが、その成果は、「地域活性化の中核拠点」モデルとしての "Super Regional University" に向けた大きな前進となりました。

本報告書は、令和元年度の成果の概要をまとめたものですが、合わせて、高知大学による教育の質保証のための4年間の取組の一部としてお読みいただければ幸いです。

今後とも皆様のご支援、ご協力をお願いし、挨拶の言葉とさせていただきます。

高知大学

学長 櫻井 克年

実施本部長挨拶

本学は平成28年度、大学教育再生加速プログラム（AP）「高大接続改革推進事業」のテーマV「卒業時における質保証の取組の強化」に採択され、令和元年度までの4年間において同事業を実施してきた。そこで得られた成果や今後の課題を明確にして結果を総括し、最終報告書をまとめようとしていたのは年度末頃（令和2年2～3月）であった。このようなときに本邦に新型コロナウイルスが流行しはじめた。そのため、ただちにウイルスの感染拡大防止方策がとられ、令和元年度学位授与式と令和2年度入学式を急遽中止した。まさに青天の霹靂であった。その後、新学期から本学のほとんど全ての授業がオンラインとなった。新型コロナウイルスの蔓延による全世界の社会、経済、交通、医療を含むあらゆる方面における影響は著しく甚大で、文化、教育・研究活動にも大きな変容を押し付けつつある。人そのものが媒体となって病気を感染させるというこのウイルスの特性が人間活動と人的交流を強く抑制する主因となっている。

さて、AP事業を通じての本学の取組とその成果の一部は、教員にとっては所属学部を卒業していく学生の資質・能力の中身と水準を確認し、教育課程の中で自身が担当する授業の有効性に関して自省または再認識する機会をもったことであろう。一方、学生にとっては、漫然とではなく、定期の振り返りによって自らが自律的に成長しているという実感と、今まで気づかなかった自分の潜在力の発見をもたらしたことはないかと思う。目的養成では、国家試験や採用試験の合格率が質保証の直接の指標とみなされることがある。しかし、当該AP事業が目指しているのはそのような指標・数値ではない。大学全体または学部等が掲げる人材育成目標を教職員と学生がともに理解・共有して実現することが基本にある。人材育成目標に掲げる卒業するまでに獲得すべき資質・能力は、教員による客観的な成績評価と学生自身によるアセスメント評価（および卒業生に対する社会からの評判）によって測定され、その達成状況と学修成果を信頼できて目に見えるような形で示し、公開することがこのAP事業における質保証の指標となっていると考える。

一般的に、大学における学生の成長とは、まずキャンパスという場所にあつて、授業で教員あるいは他の学生と活発に意見を交換し合い、多様な学生同士がサークルで活動・交流し、さらにまた、アルバイトやボランティア活動、留学などで社会や地域、外国の人々と深く関わり合いながら、人と人の触れ合いを通じて幅広い知識と豊かな人間性を培うというイメージがある。ところが、これからは新型コロナウイルスと共存するため、本学はオンデマンド型のeラーニングやリアルタイム遠隔授業を取り入れたオンライン教育システムを整備する必要に迫られる。そのとき、学生が卒業までに獲得すべき資質・能力、とりわけ倫理観や統合はたらきかけ、協働実践力などをどのように評価していくのだろうか。早急に研究すべき重要な課題である。

本学で本AP事業を実施するにあたり、多くの機関および関係の方々から多大なご協力をいただいた。文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室、テーマVの幹事大学である日本福祉大学をはじめ本学主催のシンポジウムに参加いただいた数々の大学にお礼申し上げます。また、6回に及ぶ多面的評価指標開発研究会およびAP外部評価委員会のそれぞれの委員の方々には貴重なご意見をいただいた。学内においては、本AP事業の企画申請と前半2年間の実施に関わられた藤田尚文前教育担当理事および大学教育創造センター長（副学長）の小島郷子教授と当センターの教員に、また、教育企画委員会の各学部選出ファシリテーターの教員に対し、事業の策定・実施と全学的な展開に協力をいただいた。最後に、本AP事業の企画の内容や具体的な段取り、予算計画を検討し、実際に当事業を担当して進めてきた学務課職員に感謝申し上げます。

高知大学大学教育再生加速プログラム事業実施本部長
国立大学法人高知大学理事（教育担当）・副学長

奥田 一雄

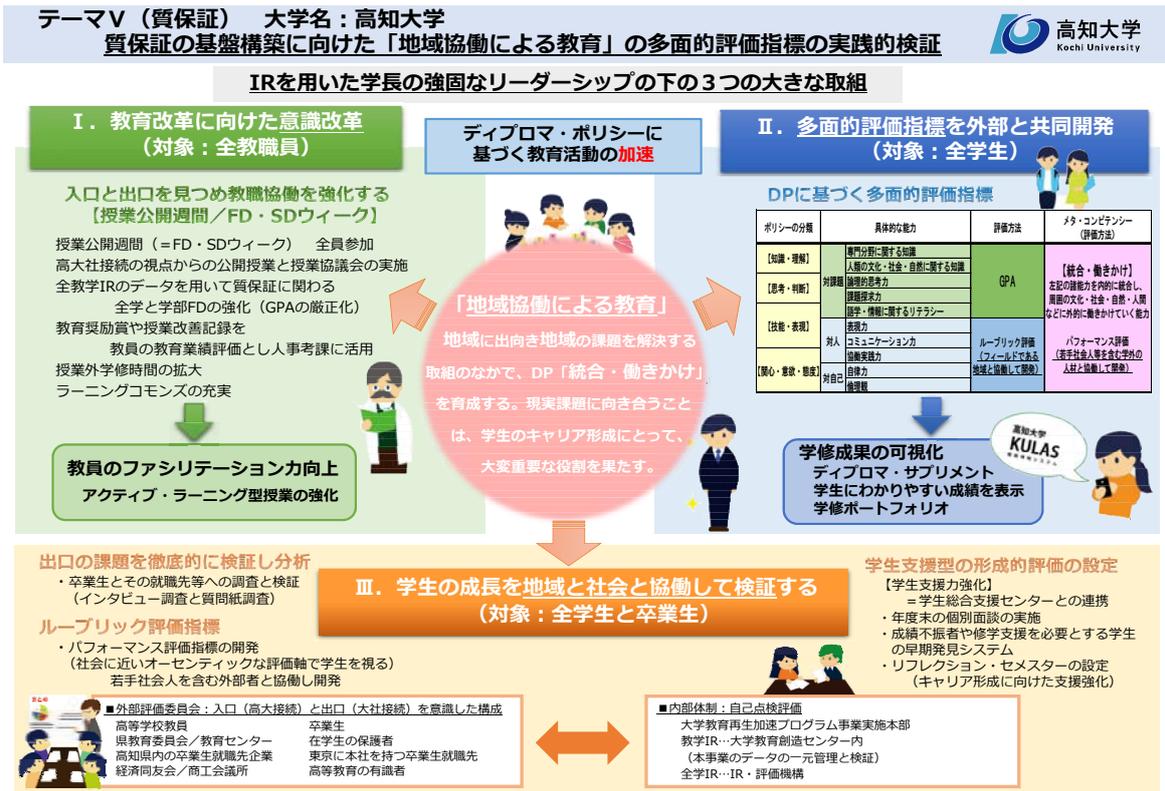
第1章 大学教育再生加速プログラム（AP）の概要

1.1 事業概要

1.1.1 主な取組

平成28年度「大学教育再生加速プログラム」に採択された本学の取組は、「地域協働による教育」の展開と、それによる学生の能力の育成を中心に、「Ⅰ. 教育改革に向けた意識改革」、「Ⅱ. 多面的評価指標を外部と共同開発」、「Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する」の3本の柱で教育の質保証のための仕組みの構築を目指すものである。

これを可能にする取組として、FD・SDウィークの設定による教職員の意識改革、10の具体的能力及びメタ・コンピテンシーを用いたディプロマ・ポリシー（以下「DP」という。）の定義付け、ルーブリック評価やパフォーマンス評価などの多面的評価の実施、高大接続及び社会との接続の観点から社会人と共同した評価指標の開発等を行う。また、学生との面談及びリフレクション・セメスターの設置と形成的評価の導入によりキャリア形成支援を強化し、卒業生の活動状況調査により教育の検証を行う。こうした活動全体をIRデータにまとめ可視化し、卒業時までの教育の質保証のための仕組みの構築を目指す。



1.1.2 事業の実施体制

学長のリーダーシップの下、事業全体及びその成果と課題を可視化できる組織体制を構築するため、中心拠点として、理事（教育担当）兼副学長を本部長とした「大学教育再生加速プログラム事業実施本部」（以下「実施本部」という。）を設置した。実施本部は事業の運営について必要な事項を定めるとともに、本学における本事業の取組を総合的かつ一体的に推進する

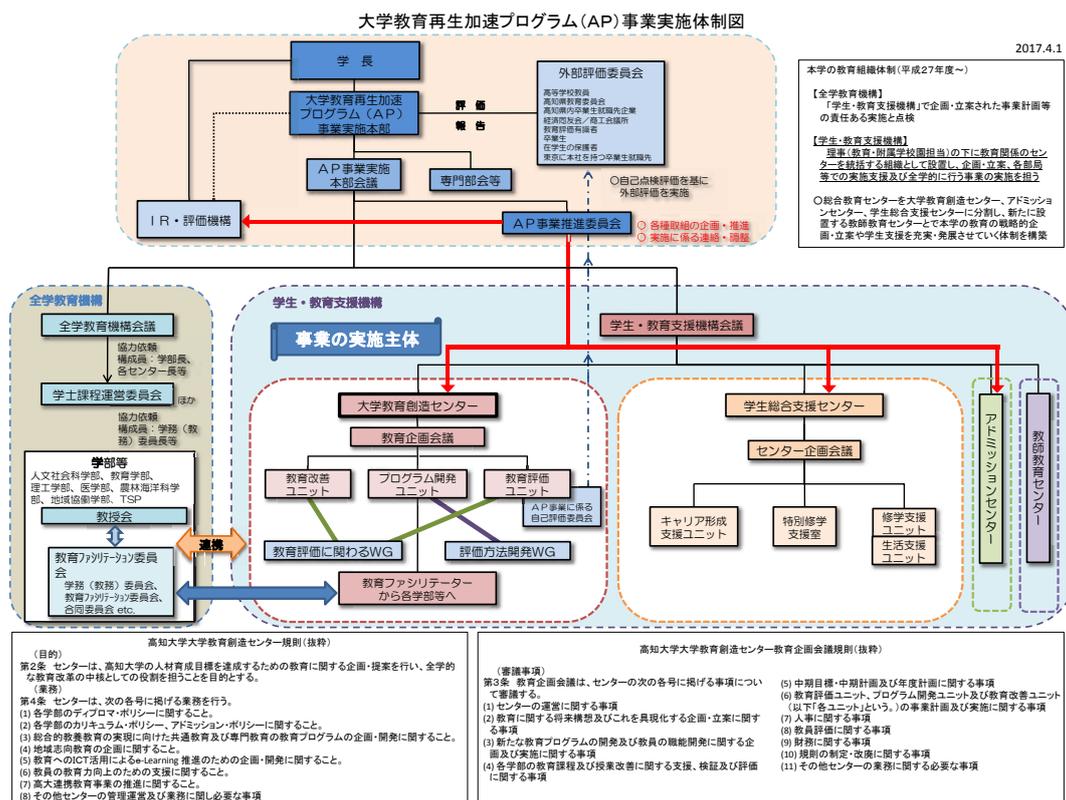
ための役割を持つ。また、その直下にIR・評価機構、大学教育創造センター、学生総合支援センター、アドミッションセンターから選出された教員及び学務部長等で構成された「大学教育再生加速プログラム事業推進委員会」を設置し、学生・教育支援機構が一体となって本事業の各種取組の企画・推進、連絡・調整を行うことができる体制を整えた。

本事業を担当する大学教育創造センターには、学部長の推薦により、教育活動の企画・提案等を遂行するための中核的な役割を担う「教育ファシリテーター」が置かれているが、本事業の採択を受け、各学部の本事業を推進するための委員会「教育ファシリテーション委員会」を新設し、事業の実施主体である、学生・教育支援機構との連携を図りながら、本事業の全学的な展開を円滑に行う体制に拡充した。

本事業は大きく分けて2つのグループにおいて展開を図っており、1つ目は、学生・教育支援機構の大学教育創造センターと学生総合支援センターを中心としたグループである。本グループは、教員のファシリテーション力の向上、アクティブ・ラーニング型授業を実践する教員の教育力の強化、学生支援型の形成的評価システムの設計と運用に向けた取組を行っている。また、多面的評価指標の開発と統合等のために大学教育創造センター内に、本事業に関わる「評価方法開発ワーキンググループ」及び「教育評価に関わるワーキンググループ」を設置した。この2つは、事業実施主体と各学部の連携、学部間の連携・調整並びに各学部の本事業への理解促進に繋がるものと位置付け、大学教育創造センター教員と各学部から選出された教育ファシリテーターで構成した。

2つ目は、全学教育機構を中心とした各学部における教育体制である。従来より全学教育機構は、学生・教育支援機構で企画・立案された事業計画等の実施組織として機能しているが、全学規模での教員の意識改革を図るため、各学部の学務（教務）委員会及び新設された教育ファシリテーション委員会等において、質保証に係るFD事業の推進・強化を行ってきた。

この2つの組織が絶えず連携を図ることにより、これまで以上に緊密に教育に関わる連動を加速させ、本事業を全学体制で実施できた。



1.1.3 評価体制

本事業の取組に対する自己評価については、自己点検・評価体制（学内組織）と外部評価委員会による外部評価体制の2つで構成した。

学内の自己点検・評価体制は、従来から組織している大学教育創造センターの教育評価ユニットを基軸にしており、教育評価ユニットが質保証に関わる検証を行い、月1回定例で開催される大学教育創造センター教育企画会議（以下「教育企画会議」という。）及び高知大学大学教育再生加速プログラム事業実施本部会議（以下「実施本部会議」という。）において報告を行った。上記の教育企画会議及び実施本部会議において、申請時に提出した申請書と計画調書を共有し、常に自己点検・評価を行いながら事業を実施した。

外部評価体制としては、本事業の実施状況や成果に関して適切性や達成状況を客観的・総体的に検証するため、学外の第三者機関として平成28年度から外部評価委員会を設置した。委員は、入口（高大接続）から出口（大社接続）までを意識して、企業等関係者、本学の卒業生及び高等教育機関の有識者で構成した。評価は、本事業の取組毎にA～E（A:十分適切といえる～E:まったく適切といえない）までの5段階評価で行い、評価結果については、教育企画会議及び実施本部会議において報告し、事業の改善に向けた検討を行う体制を整えた。

1.2 令和元年度までの大学全体の教育改革に関する取組状況

1.2.1 AP事業開始までの大学全体の教育改革に関する取組状況と課題

本学は、平成17年度の「高等教育の将来像」答申に従い、第2期中期目標・中期計画期間において総合的教養教育を推進することを掲げた。本学の総合的教養教育とは、さまざまな知識や技能が学生自身の内部で統合され、世の中に働きかける能力を育成する教育と定義し、一般的な教養教育とは一線を画すものである。その第2期に掲げた総合的教養教育を推進するために教育力向上3か年計画を2期にわたって継続し、1年次の課題探求実践セミナー（PBL型授業）を全学必修化とするなど総合的教養教育を展開してきた。

しかしながら、取組は十分とはいえず、平成28年度に実施した3年生を対象とする外部の客観テストにおいて、対人に関わるコンピテンシーが弱いことが明らかになり、また、第2学期の当初においては、現実の社会において必要とされる、修得した知識や技能を状況に応じて使いこなす「統合・働きかけ」（メタ・コンピテンシー＝個々の能力要素（コア・コンピテンシー）を滑油するコンピテンシー）をDPとして掲げておらず、この理念が教員間で十分に共有されていなかった課題も見えてきた。

平成28年度より始まった第3期中期目標・中期計画では、この総合的教養教育を基盤とし、「地域協働による教育」を目標に掲げたが、平成28年度の時点で「地域協働による教育」を全面的に展開しているのは、地域協働学部のみであり、全学的に展開する必要があった。

1.2.2 AP事業開始以降に得られた成果

(1) 3つのポリシーに基づく教育活動の実施

本学では、DPと体系的・組織的な教育の一体性・整合性を整備するため、平成28年度に全学教育機構会議の下に「ポリシー見直しワーキンググループ」を設置し、DP、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーについて見直しを行った。

また、そのポリシー見直しワーキンググループにおいて、「知識・理解」「思考・判断」

「関心・意欲・態度」「技能・表現」の4領域で定義してきたDPを、平成28年3月に本学教育組織改革実施本部「総合的教養教育ワーキング」において示された、全学共通の本学の学生が修得すべき10の能力（専門分野に関する知識、人類の文化・社会・自然に関する知識、論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観）及びその諸能力を統合し他者に働きかける力「統合・働きかけ」（以下「10+1の能力」という。）に結び付け、本学が育成すべきかつ学生が身に付けるべき能力の定義を明確にし、全学で体系的・組織的な教育の整合性を図った。

更に、全ての学部・学科・コースにおいて、DPにおける学生が身に付けるべき能力を明確にした能力指標を作成し、これらの指標を平成29年4月にホームページ上に公表した。

（2）能力評価指標の実施・運用

学生が身に付けるべき能力を社会との接続の視点から捉え直し、大学と社会の大社接続において、企業や学校関係者等の学外の社会人と共同して、上述の「10+1の能力」における10の能力のうち、GPAで評価する能力を除いた8つの能力について評価するための能力評価指標を開発し、平成30年度から開発したルーブリックに基づくセルフ・アセスメントを開始した。

さらに、「統合・働きかけ」については、10+1の能力の「統合」を検証するために、パフォーマンス科目を各学部・学科・コースで選定し、DPに基づいたルーブリック評価指標を用いて、平成30年度から学生による自己評価と教員によるパフォーマンス評価を実施した。

従来の成績評価では、GPAを用いて学生の評価を行ってきたが、「10+1の能力」の明確化と能力開発指標の作成により、GPAに加え、多面的な評価軸を用いて、卒業段階で学生がどれだけの学修成果を身に付けたのかを客観的に評価することが可能となった。

（3）学生のための学修成果の可視化

本事業を契機に、既存の教務情報システムと連動したe-ポートフォリオを、学修成果を可視化し、学生が自己の学修成果を常に捉えることができるように再構築した。e-ポートフォリオには、学業成績に加え、AP事業で開発した評価指標やリテラシーとコンピテンシーを測定する外部客観テストの結果を掲載するとともに、目標や振り返り、課外活動の記録を入力できる仕組みを構築し、学生がいつでも自身の学修成果を一目で確認できるように設計した。

さらに、広く社会にエビデンスを示して学位の質を保証するため、学位記を補完する文書と位置づけた「ディプロマ・サプリメント」について、学外のステークホルダーから項目の選定等についての意見を聴取しつつ開発を行った。その結果、令和元年度卒業生から卒業時の学修成果を客観的に提示する方法として、卒業時に学位記と合わせてディプロマ・サプリメントを発行することが可能となった。

1.2.3 各取組における目標値一覧

本事業で定められている必須指標及び本学の任意指標の達成度は下記のとおりである。

テーマにおける必須指標	H28	H29	H30	R 1	
	実績	実績	実績	目標	実績
学生の成績評価 [GPA 平均]	2.25	2.24	2.15	2.20	2.16
学生の授業外学修時間 [時間数（1週間当たり（時間））]	10.7 時間	14.0 時間	16.9 時間	12.0 時間	15.4 時間
進路決定の割合 [%（（就職決定者数+進学者数） ／卒業者数）]	89.3% (981/1098)	91.0% (970/1066)	92.9% (996/1073)	93.0% (1005/1081)	93.8% (1006/1073)
事業計画に参画する教員の割合 [%（参画教員数／在籍教員 数）]	74.2% (451/608)	75.3% (469/623)	81.7% (501/613)	80.0% (486/608)	83.1% (506/609)
質保証に関する FD・SD の参加 率 [%（参加教職員数／在籍教職 員数）]	60.6% (578/954)	76.1% (730/959)	66.7% (629/943)	70.0% (611/873)	77.4% (731/945)
卒業生追跡調査の実施率 [%（調査回答者数／卒業者 数）]	19.6% (210/1071)	13.8% (152/1098)	37.9% (404/1066)	20.0% (222/1110)	33.6% (360/1073)

各大学等の任意の指標	H28	H29	H30	R 1	
	実績	実績	実績	目標	実績
「大学教育に満足している」学 生の割合	83.7% (1163/1390)	85.4% (1619/1896)	95.5% (1184/1240)	95.0% (2076/2185)	93.9% (1359/1448)
授業満足度アンケートを実施し ている学生の割合	60.3% (2984/4947)	70.6% (3496/4949)	50.9% (2521/4950)	65.0% (2993/4605)	61.1% (3042/4977)
学修ポートフォリオの利用率	34.4% (1702/4947)	48.2% (2384/4949)	73.1% (3619/4950)	80.0% (3684/4605)	80.0% (3984/4977)
GPA の成績評価を基にした個別 面談の実施学部	7 学部等				
学修到達度調査の実施率	100%	100%	100%	100%	100%
リテラシーとコンピテンシーを 測定する外部テストの実施率 （1年次）	95.1% (1056/1110)	92.5% (1055/1140)	94.0% (1066/1133)	90.0% (968/1075)	93.8% (1065/1135)
リテラシーとコンピテンシーを 測定する外部テストの実施率 （3年次）	61.5% (701/1140)	55.0% (638/1160)	59.0% (669/1130)	45.0% (500/1110)	66.6% (777/1167)

セルフ・アセスメント・シートの実施率	100% (1110/1110)	100% (1140/1140)	100% (1133/1133)	100% (1075/1075)	100% (1135/1135)
GPA を含め多面的な成績評価等を基にした形成的評価を導入した個別面談の実施学部	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等
学生との面談を記録する学生支援システムの導入学部	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等
ルーブリック評価を取り入れた実施学部	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等
パフォーマンス評価を取り入れた実施学部	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等
学修成果の指標について共通教育と専門教育における成績分布等を可視化する	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等
卒業生が就職した就職先等への調査	-	67.7% (1069/1578)	87.9% (757/861)	60.0% (585/975)	79.1% (670/847)
学外人材との協働による助言・評価の仕組みを構築している学部	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等	7 学部等
学外人材との協働・共同による評価指標の開発科目数	30 科目	0 科目	0 科目	50 科目	0 科目

学外人材との協働・共同による評価指標の開発科目数については、平成29年度より科目単位ではなく、全学生を対象として学生の能力評価を実施する方法に変更したため、授業科目数としては0となっている。

第2章 令和元年度大学教育再生加速プログラム（AP）の取組と実績概要

2.1 I. 教育改革に向けた意識改革

2.1.1 目的

教育改革に向けた意識改革では、平成19年度から行ってきた教育改革「高知大学の教育力向上計画」を再生し加速させるために、教員のファシリテーション力向上と、教員のアクティブ・ラーニング型授業の強化を目指す。本学では、新しい教育力として、これまで学生の自主性や学ぶ意欲を向上させながら授業を進める「ファシリテーション力」の育成に力を入れてきた。そのことから、アクティブ・ラーニングで求められるファシリテーション力の進化と深化を目標に掲げて、事業に取り組んでおり、令和元年度は下記の取組を行ってきた。

2.1.2 主な取組内容

(1) 教員の意識改革に関するアンケートの実施

「教育改革に向けた意識改革」を実現することを目標に掲げて、事業を展開してきたが、これまで教員を対象とした調査は実施していなかった。令和元年度は、事業の最終年度を迎えることから、教員の意識改革が達成できたかどうかを検証することを目的にアンケートを実施し、64.5%の教員から回答を得られた。教員の意識改革を目的に実施した事業の中で、FD・SDウィーク、面談や外部講師によるFDは5割から6割の教員が教育改善に役に立ったと回答していた。（詳細：p.9）

(2) 令和元年度アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査の実施

全学部を対象に、アクティブ・ラーニングを取り入れている授業科目について調査を行った（平成28年度からの継続実施）。調査対象は、令和元年度に開講したすべての授業科目とし、アクティブ・ラーニング科目の該当の有無と授業形態・手法の分類について確認した。調査結果は、開講3,101科目のうち1,286科目（41.5%）でアクティブ・ラーニングを実施しており、昨年度と比較して科目数、比率両面で増加していることがわかった。

（詳細：p.13）

(3) FD・SDウィーク（授業公開週間）の実施

アクティブ・ラーニング技法の共有と質保証に関わる全学的なFD及びSDとして、FD・SDウィーク（＝授業公開週間）を設け、令和元年度第1学期に40科目（延べ105回）の授業を44日間にわたり公開した（平成28年度からの継続実施）。令和元年度は343名（教員109名〔昨年度67名、一昨年度107名〕、職員239名〔昨年度261名、一昨年度248名〕）がWebシステムから申込を行い、全学から多数の参加があった。職員にとっては、大学の授業を参観できる貴重な機会となっている。また、これまで教員の参加率は減少傾向であったが令和元年度は増加した。これまでは実施期間中の広報は行っていなかったが、令和元年度はポスターを掲示し、取組内容の周知をしたことで、参加率の増加につながったと考えている。（詳細：p.15）

(4) 令和元年度高大接続の視点による授業協議会の実施

高等学校の「総合的な探究の時間」については、新学習指導要領において、探究の見方・考

え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方や生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することとされている。「総合的な探究の時間」における思考力・判断力・表現力等の育成を意識した「探究的な学習」及び「協働的な学習」の学習指導の在り方等について、高等学校関係者と情報共有を行うとともに、新学習指導要領の内容について理解を深めることで、高等学校における「総合的な探究の時間」の一層の充実を図ることを目的として授業協議会を令和2年2月10日（月）に開催した。

参加した高等学校教員は54名であり、高知県教育委員会による新学習指導要領についての説明に続いて、本学教員による「教科の学びを結び付ける総合的な探究の時間へ」をテーマとしたワークショップを実施し、アクティブ・ラーニング等における学習課程の観点から、高等学校における「総合的な探究の時間」の学習活動と学習の評価について、令和2年度の計画をブラッシュアップする取組を行った。

これを通じて、本学が育成しようとしている「10+1の能力」について、「対人」「対自己」「対課題」の категорияによって高等学校教員に伝え、「総合的な探究の時間」の学習活動や評価方法に反映していくことの理解を得た。（詳細：p.17）

（5）パフォーマンス評価に関わるFDの開催

本学では、全学的な取組として、卒業年次とその前年度に、「10+1の能力」の「統合・働きかけ」を検証するため、パフォーマンス評価対象科目を各部局で選定し、学生による自己評価（セルフ・アセスメント）と教員による他者評価（パフォーマンス評価）を実施している。

「10+1の能力」の評価については「10+1の能力に関する到達度評価 実施要領」を策定し実施しているが、卒業時のパフォーマンス評価及び10の能力の評価（セルフ・アセスメント・シート）の実施については、具体的な実施方法が未決定であった。そのため、各部局の事情を把握し、具体的な実施方法を検討することを目的にFDを実施し、両評価の実施体制を明確にした。（詳細：p.18）

（6）リフレクション・セメスター及び学生面談に関わるFDの開催

本学のAP事業では、学生が「10+1の能力」について、入学からの自己を振り返り、卒業、卒業後に向けての捉え直しを行う期間として、3年次の第1学期をリフレクション・セメスターと位置づけ、アドバイザー教員によるリフレクション面談を実施し、学生の「10+1の能力」に対する自己評価と教員評価のズレを検証し、指導・助言を行うこととしている。学生自身が自己評価の再構築を行うにあたり、アドバイザー教員の面談が大きなカギとなるため、面談の効果を向上させることを目的として、1月21日（物部キャンパス）、1月29日（朝倉キャンパス）にFDを実施した。（詳細：p.19）

（7）外部講師によるFD「ティーチング・ポートフォリオについて」の開催

大学教育の質保証のうち、教員の教育力向上を保証するものとして、ティーチング・ポートフォリオ（以下「TP」という。）がある。TPの理論的な背景、教育改善における効果、具体的な内容などについて理解することを目的にFDを実施し、本学の教職員23名が参加した。最初に、平成31年2月に出された「国立大学法人等人事給与マネジメント改革に関するガイドライン」の教員業績評価に関連して、TPが記されたことについて説明があり、次に、TPの理念・目的についての説明に加え、構成について、実際のTPを例に挙げ、具体的に解説がなされた。

また、TPの項目を用いて、参加者が自身の授業内容についてまとめるワークショップも行われ、TPの作成について体験的に学ぶことができた。最後に、TPと教員の業績評価に関して、評価の観点や課題について説明があり、業績評価への応用可能性について考える機会となった。

研修終了後に参加者へアンケートを行った結果、回答者20名の内、「とても参考になった」が15名、「参考になった」が5名と、回答者全員から肯定的な評価が得られた。（詳細：p.20）

2.1.3 成果

教職員の意識改革は、効果的かつ継続的に推進できるよう、「本学の現状把握」、「FD・SDによる教職員の意識改革」、「自己点検ができる体制の整備」の3つの観点で取組を実施した。

本学の現状把握として、本学の授業にどの程度アクティブ・ラーニングが浸透しているかが明らかになるとともに、教員を対象としたアンケート結果から、AP事業の取組が教員の意識改革に効果があったことが検証された。また、教職員の意識改革を目的に取り組んでいる各種FDについては、参加者が増加するとともに、教育改善や業務改善に効果があることが認められた。

また、高大連携の視点からは、高等学校における「総合的な探究の時間」における学習活動を、本学が取り組む「対人」「対自己」「対課題」（「10+1の能力」のうち、10の力についてをカテゴリー化した概念）のカテゴリーから捉え直すことで、高等学校の学習活動との連携の一環とすることができた。

2.1.4 具体的な取組内容

2.1.4.1 教員の意識改革に関するアンケートの実施

（1）趣旨・目的

AP事業では、教員のファシリテーション力向上と、教員のアクティブ・ラーニング型授業の強化を目指すなど、「教育改革に向けた意識改革」を実現することを目標に掲げて、事業を展開してきた。令和元年度は、事業の最終年度を迎えることから、上記目標が達成できたかどうかを検証する必要がある。

そこで、アンケート調査を実施し、効果の検証を行う。検証結果は大学教育創造センター教育企画会議において報告する。

（2）取組内容

- 1) 実施時期 令和元年10月～11月
- 2) 対象 全教員
- 3) 実施方法 10月の各学部の教授会で紙媒体のアンケートを配付した

4) 回答状況

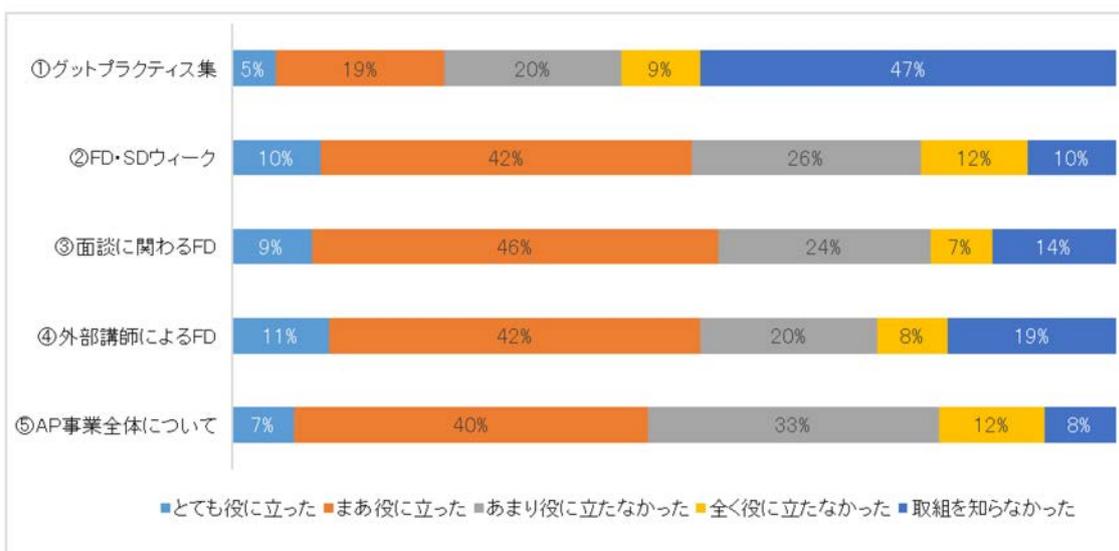
学部等	回答数	アドバイザー教員経験			専任担当者数
		あり	なし	記入なし	
人文社会科学部	39	33	1	5	63
教育学部	26	19	5	2	60
理工学部	62	56	4	2	80
医学部	45	38	3	4	243
農林海洋科学部	34	32	1	1	73
地域協働学部	20	14	4	2	24
土佐さきがけプログラム	3	3	0	0	3
計	229	195	18	16	546

※医学部のアンケート対象者は教授 52 名

(3) 結果

1. 下記の取組は、あなたの教育改善に役立ちましたか。それぞれ当てはまる項目に✓をつけてください。

	とても役に立った	まあ役に立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった	取組を知らなかった	記入なし	計
①グットプラクティス集	11	43	45	20	106	4	229
②FD・SDウィーク	23	93	59	27	22	5	229
③面談に関わるFD	21	103	53	16	31	5	229
④外部講師によるFD	24	94	45	17	43	6	229
⑤AP事業全体について	16	89	75	26	19	4	229



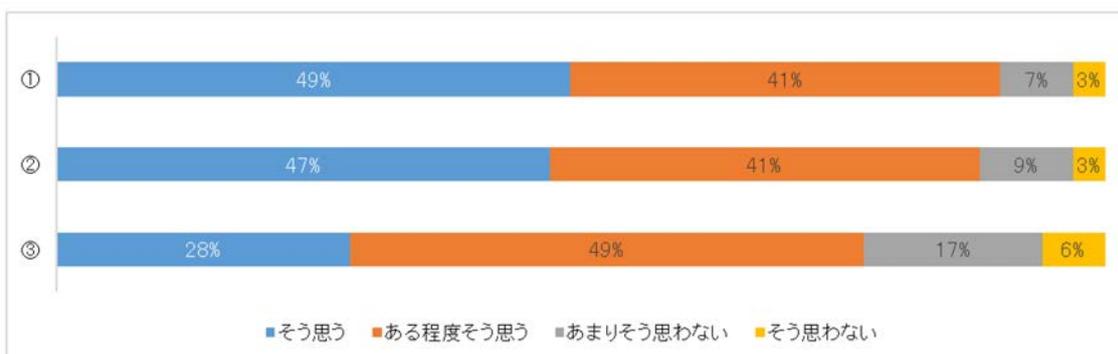
※「記入なし」を除いて集計している

AP事業全体を含めて各種FDの開催は、教育改善に役立ったことがわかる。グッドプラクティス集については、半数の教員がその取組を知らないと回答しており、取組の周知ができていなかったことが反省点である。

2. ゼミや実験・実習、卒論・卒業研究の指導について、それぞれ当てはまる項目に✓をつけてください。

- ① 学生に専門領域の知見を深める機会を与えていて、教育効果が高い。
- ② 学生に一定期間、同じ課題に向き合い試行錯誤を繰り返す機会を与えていて教育効果が高い。
- ③ 教員の負担に見合った教育効果を上げている。

	そう思う	ある程度 そう思う	あまりそ う思わな い	そう思わ ない	ゼミ・卒論・ 実習等を担当 したことがな い	記入なし	計
①	108	92	15	6	6	2	229
②	104	91	19	6	7	2	229
③	61	107	38	14	6	3	229



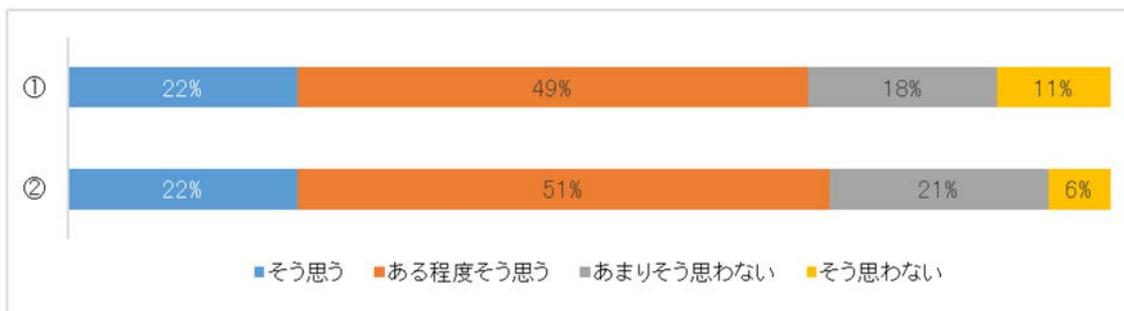
※「記入なし」を除いて集計している

卒業生調査結果から、大学時代のゼミや実験・実習、卒論・卒業研究が印象に残っており教育効果が高いことがわかった。そこで、これらを指導する教員の意識を調べた結果、教員もこれらの授業科目の教育効果について認めていることがわかった。

3. 学生面談等について、当てはまる項目に✓をつけてください。

- ① 学生面談は学生の成長を支援するために有効であると思いますか。
- ② 大学教育の場面で、コミュニケーション力や協働実践力、表現力、統合・働きかけなど、汎用的能力を学生に意識させながら教育を実践していくことは、学生の成長を支援するために有効であると思いますか。

	そう思う	ある程度 そう思う	あまりそ う思わな い	そう思わ ない	記入なし	計
①	49	110	41	24	5	229
②	49	113	47	14	6	229

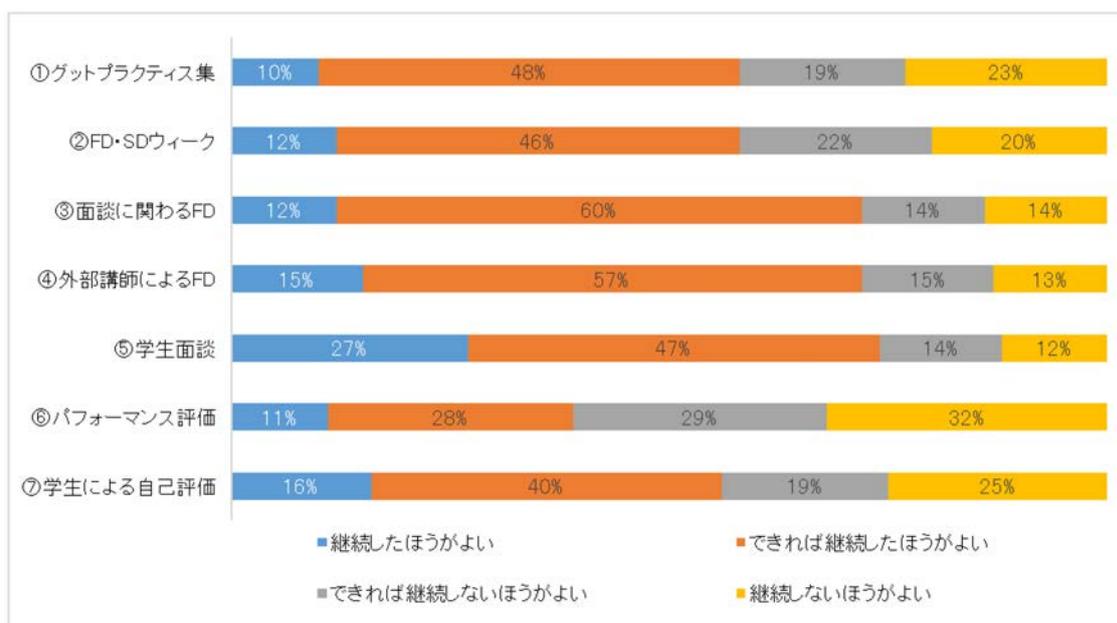


※「記入なし」を除いて集計している

AP事業で取り組んできた面談と汎用的な能力を意識することの教育効果についての質問であるが、いずれも教育効果があると回答した割合が高かった。

4. 高知大学が全学的に取り組んできたAP事業に関してお答えください。

	継続した ほうがよ い	できれば 継続した ほうがよ い	できれば 継続しな いほうが よい	継続しな いほうが よい	取組を 知らない	記入なし	計
①グットプラクティス集	13	64	25	31	86	10	229
②FD・SDウィーク	23	90	43	38	22	13	229
③面談に関わるFD	24	118	28	27	19	13	229
④外部講師によるFD	28	110	29	26	23	13	229
⑤学生面談	57	100	30	26	6	10	229
⑥パフォーマンス評価	22	58	60	66	13	10	229
⑦学生による自己評価	32	84	39	53	11	10	229



※「取組を知らない」、「記入なし」を除いて集計している

①から④の教員の意識改革を目的とした取組と⑤学生面談、⑦学生の自己評価については継続を望む意見が半数を超えている。⑥のパフォーマンス評価については継続を望む意見は少ないが、本学が謳っている卒業までに身につける能力の到達度を測る評価であり、教育の質保証の観点からは継続する必要があると思われる。パフォーマンス評価の意義等についての教員への周知が今後の課題と考える。

2.1.4.2 令和元年度アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査の実施

(1) 趣旨・目的

本学の第3期中期目標・中期計画において、「「地域協働」を核とした教育を実施し学生の能動的学修の促進を図り、その質を保証するため、学修の成果や到達度を客観的に評価するルーブリックを開発し、全学的に実施する。また、能動的学修を支援するため、ラーニング・コモンズやメディア学修環境等の整備を行う」ことを掲げており、これに基づき、各学部等においてアクティブ・ラーニング型授業を実施している。

本調査は、第3期中期目標期間中において毎年度末に実施し、上記計画の達成に向けた指標とするとともに、調査結果をもとに教育の検証、改善につなげることを目的とする。

(2) 取組内容

本学において、どの程度アクティブ・ラーニングが実施されているかについて、全学部を対象に、文部科学省の定義を基に調査を実施した。文部科学省の発信する用語集によると、アクティブ・ラーニングは、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」と定義されている。この定義から想定できる授業形態を9つに分類し、令和元年度開講された3,101科目の実施状況について、調査を実施した。また、本学では、授業のいずれかの回に上記定義に該当する内容を取り入れている場合、授業回数に関わらず、アクティブ・ラーニング科目として扱うこととした。

(3) 結果

1) アクティブ・ラーニング科目の実施科目数

令和元年度開講された3,101科目の内、1,286科目でアクティブ・ラーニングを実施しており、全体の41.5%であった。学部（1教育プログラムを含む）ごとの内訳は下記のとおりである。

学部名	令和元年度			平成30年度		
	開講科目数	アクティブ・ラーニング科目		開講科目数	アクティブ・ラーニング科目	
共通教育	528	262	49.6%	537	245	45.6%
人文社会科学部・人文学部	550	194	35.3%	578	238	41.2%
教育学部	643	197	30.6%	685	141	20.6%
理工学部・理学部	357	107	30.0%	357	129	36.1%

医学部	277	161	58.1%	272	180	66.2%
農林海洋科学部・農学部	547	209	38.2%	519	211	40.7%
地域協働学部	109	103	94.5%	81	78	96.3%
土佐さきがけプログラム	90	53	58.9%	84	28	33.3%
合 計	3,101	1,286	41.5%	3,113	1,250	40.1%

※上表は2) 授業形態・手法の①～⑨のいずれかに該当する科目を集計（受講生0の科目を除く）

2) 授業形態・手法（学部別）

<授業形態・手法の分類>

① 課題解決型授業（PBL）
② 反転授業を取り入れた授業科目
③ グループワーク（ディベート等）を取り入れた授業科目
④ プレゼンテーションを取り入れた授業科目
⑤ ピアティーチング（学生同士の学び合い）を取り入れた授業科目
⑥ 体験学習・フィールドワークを取り入れた授業科目
⑦ フィードバック（振り返り）を実施している授業科目
⑧ ICTを活用した授業科目
⑨ その他

<授業形態・手法別の集計結果>

学部等	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
共通教育	55	91	144	126	84	41	81	109	7
人文社会科学部・人文学部	96	22	128	138	88	35	99	43	0
教育学部	78	36	132	133	72	53	91	49	23
理工学部・理学部	24	11	31	35	21	21	39	43	4
医学部	41	12	107	92	80	72	88	25	4
農林海洋科学部・農学部	56	11	84	133	83	119	53	14	0
地域協働学部	70	18	88	85	20	52	85	14	3
土佐さきがけプログラム	16	1	10	37	0	18	11	5	4
合 計	436	202	724	779	448	411	547	302	45
（参考：平成30年度調査結果）	(482)	(181)	(719)	(774)	(471)	(407)	(507)	(292)	(33)

※複数回答可

2.1.4.3 FD・SDウィーク（授業公開週間）の実施

(1) 趣旨・目的

教育改善に関する教職員の意識改革の一環として、従来の相互授業参観を見直し、各学部等5授業程度を選び、全教職員を対象に公開することにより、授業参観の機会を増やす。これによって、

- ① 授業公開者の授業改善を行う。
- ② 授業参観を通じて参観する側の教員が授業についての内省を通じた教育改善を図る。
- ③ 職員は授業参観を通じて、大学の授業について理解する第一歩とし、業務への反映を図る。ことをめざす。

(2) 取組内容

1) 実施期間と開講科目数

期 間 令和元年6月12日（火）～令和元年7月25日（木）

科目数 40科目（延べ105回開講 ※e-ラーニング科目は1回として集計）

2) 実施方法

昨年までと同様に、公開授業の参加申込の受付から参観後のコメント記入までを一括して専用サイトで行った。

（FD・SDウィーク報告書：資料集p.91）

(3) 参観者数

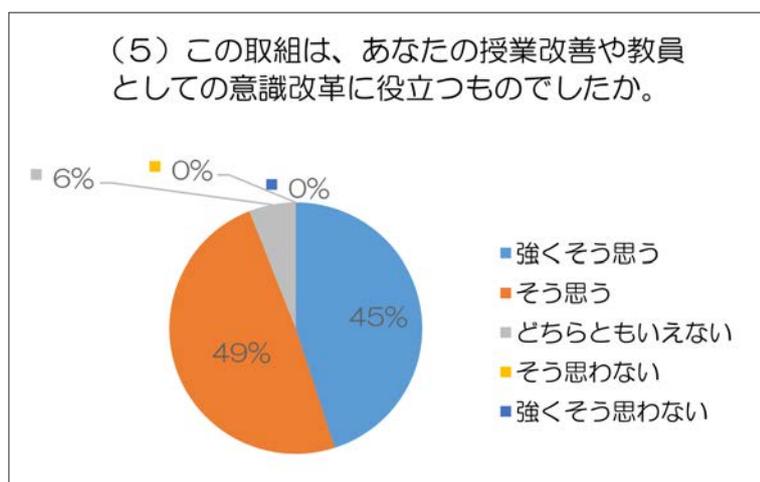
令和元年度のFD・SDウィークの授業参観者を、表にまとめる。（延べ人数）

	令和元年度		平成30年度	
	参観申込者数	コメント登録者数	参観申込者数	コメント登録者数
教員	104	81	67	58
職員	239	192	261	222
全体	343	273	328	280

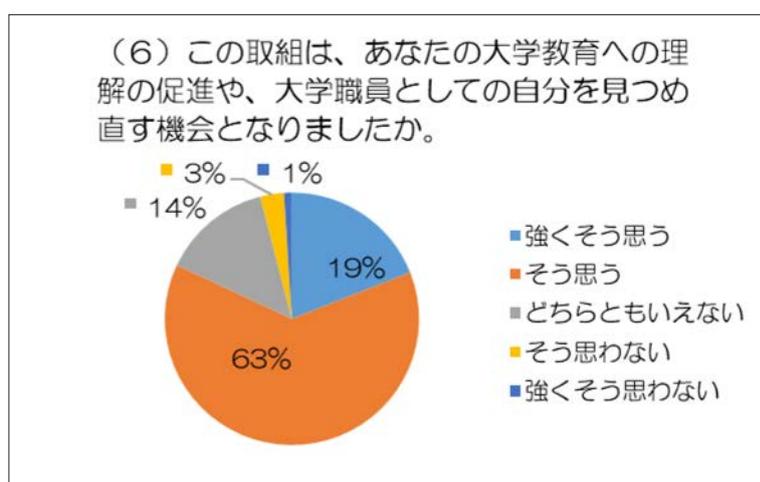
（FD・SDウィーク科目ごとの参観申込者数及び授業参観記録登録者：資料集p.92）

(4) 成果について

参観後のアンケート結果によると、教員向けの「この取組は、あなたの授業改善や教員としての意識改革に役立つものでしたか。（5段階択一式）」の質問項目に対して、94%が肯定的な回答をしていることから、本取組が教員の意識改革に役立つものであったことがうかがえる。



また、職員向けの「この取組はあなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか。（5段階択一式）」の質問項目に対して、82%が肯定的な回答をしており、昨年度の75%を上回る結果となったことから、本取組が、職員の大学教育への理解促進、自己の業務を見つめなおす機会につながっていることが明らかになったといえる。



その他の質問項目への回答については、資料集p.93の「授業参観記録」を参照されたい。

以上の結果から、本企画の趣旨や目標に対する成果として、次のようにまとめられる。

【授業公開教員】

授業公開教員からは、参観者からのネガティブなコメントも含め、次年度以降の授業改善や、自身の成長の糧になるものであったとのコメントが寄せられており、授業改善のためのヒントを得られる機会となったことがうかがえる。

【授業参観教員】

授業参観は意識改革に役立つものであったかという問いに、94%の肯定的な回答が寄せられており、昨年度も95%の肯定的な回答比率であったことから、本取組は一定の効果を得ることができていると考えられる。令和元年度は、授業に関わる具体的な技法・手法に関わるコメン

トが多く寄せられていることから、授業参観を重ねてきたことにより「授業を見る」観察力の向上がうかがえるものであった。また、設問の性質から、自己の授業と比較し授業を見る視点からの内省的なコメントが多く寄せられており、一定の成果があったことがうかがえる。

【職員】

授業や学生に直接かかわらない部署の職員が授業参観を行うことによって、大学の教育活動の一つの要である授業を通して、学生の現状をとらえることができ、本学の教育活動への理解促進につながったと考えられる。

また、本取組の回数を重ね、複数の学部の授業や、様々な授業形態を知り、他の参加者のコメントを相互閲覧することによって、「授業を見る目」が洗練されてきたことがうかがえるコメントも見られた。

2.1.4.4 令和元年度高大接続の視点による授業協議会の実施

(1) 趣旨・目的

高等学校の「総合的な探究の時間」は、新学習指導要領において、探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方や生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成することとされている。「総合的な探究の時間」における思考力・判断力・表現力等の育成を意識した「探究的な学習」及び「協働的な学習」の学習指導の在り方等について、情報共有を行うとともに、新学習指導要領の内容について理解を深めることで、高等学校における「総合的な探究の時間」の一層の充実を図ることを目的に授業協議会を開催する。

(2) 取組内容

- 1) 日 時 令和2年2月10日(月) 10:00~16:00
- 2) 場 所 高知大学朝倉キャンパス 人文社会科学部棟5階 第一会議室
- 3) 参加者 54名(県立高校の「総合的な探究の時間」授業担当者)
- 4) スケジュール

9:30	10:00	10:10	11:45	12:45	15:35	15:50	16:00
受付	開会 行事	「新学習指導要領について」 ・所管説明等	昼食	『探究』とは何か —教科の学びを結びつける総合的な探究の時間へ— ・ミニ講座 ・ワークショップ	振り返り	振り返り	閉会 行事

5) 実施内容

テーマ：教科の学びを結び付ける総合的な探究の時間へ

講師：杉田郁代、高畑貴志、塩崎俊彦（高知大学大学教育創造センター）

内容：「総合的な探究の時間」の授業における学習過程のメカニズムを心理学的な視点から理解し、それに基づいた「学習方法」と「学習の評価」について、令和元年度の授業を振り返りながら、次年度の授業に反映させるためのワークショップを行った。

(3) 結果

高等学校の「総合的な探究の時間」の担当教員に対するワークショップを実施することで、本学が育成しようとしている「10+1の能力」について、「対人」「対自己」「対課題」のカテゴリーのなかで育成すべき能力を高等学校教員が理解するとともに、それらの能力を育成することを取り入れて、「総合的な探究の時間」の学習活動や評価方法を検討していくことについての理解を得た。

2.1.4.5 パフォーマンス評価に関わるFDの開催

(1) 趣旨・目的

DPに基づいて示された10+1の能力評価指標の到達度を測り、これを用いた学生指導を通じて、本学の教育の質を保証する取組を実施している。10の能力については、セルフ・アセスメント・シートに基づいた学生の自己評価を実施し、「統合・働きかけ」についてはパフォーマンス評価を実施し、ループリックを用いた学生の自己評価と教員による他者評価を実施している。

これらの評価については「10+1の能力に関する到達度評価 実施要領」を策定し実施しているが、卒業時の「統合・働きかけ」評価および10の能力の評価（セルフ・アセスメント・シート）の実施については、具体的な実施方法が未決定であった。

そこで、卒業時における両評価の実施にあたり、各部局の事情を把握し、具体的な実施方法を検討することを目的にFDを実施した。

(2) 取組内容

- 1) 日時 令和元年5月22日（水）15：30～16：00
- 2) 場所 高知大学朝倉キャンパス 共通教育棟1号館2階127番教室
- 3) 対象 教育ファシリテーター

(3) 結果

本学が実施する診断的評価・形成的評価・総括的評価について、①学生による自己評価と教員による他者評価、②10の能力のうちGPAで評価する2つの能力を除いた8つの能力（論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観）を評価するセルフ・アセスメント、③+1の能力を評価するパフォーマンス評価、および④外部テストについて各学部でのファシリテーターと確認・共有することで、各学部における各評価および面談が確実に実施できる体制を整えた。

特に、卒業時における評価は、令和元年度が初めての実施となることから、各部局の事情を確認するとともに、各部局で最も実施しやすい方法について確認できたことは成果といえる。

2.1.4.6 リフレクション・セメスター及び学生面談に関わるFDの開催

(1) 趣旨・目的

本学のAP事業では3年次の第1学期をリフレクション・セメスターと位置づけている。リフレクション・セメスターは、学生が「10+1の能力」について、入学からの自己を振り返り、卒業、卒業後に向けての捉え直しを行う期間として設定している。その期間に、アドバイザー教員によるリフレクション面談を実施し、学生の「10+1の能力」に対する自己評価と教員評価のズレを検証し、指導・助言を行う。この面談は、形成的評価に位置付き、卒業、卒業後を見据えた、学生自身の自己評価の再構築を目的としていることから、学生の成長にとって大きなカギとなる。そこで、面談の効果を向上させることを目的に大学教育創造センターと学生総合支援センターとの合同開催によりFDを実施した。

(2) 取組内容

1) 日時・スケジュール

令和2年1月21日（火）（物部キャンパス 参加者62名）

13：30～14：00 「リフレクション・セメスター及びリフレクション面談」

講師：大学教育創造センター 准教授 杉田郁代

令和2年1月29日（水）（朝倉キャンパス 参加者12名：教員8名、職員4名）

15：00～15：30 「アドバイザー教員の業務・学生対応の留意点」

－アドバイザー教員へのアンケート調査結果から見える現状と課題－

講師：学生総合支援センター 講師 坂本智香

15：30～16：00 「リフレクション・セメスター及びリフレクション面談」

講師：大学教育創造センター 准教授 杉田郁代

2) 場 所 高知大学 物部キャンパス 農林海洋科学部1号館2階 大会議室

朝倉キャンパス 共通教育棟1号館2階 127教室

3) 対 象 アドバイザー教員

教育ファシリテーター

各部署ファシリテーション委員会委員

(3) 結果

「アドバイザー教員の業務・学生対応の留意点」のFDでは、学生総合支援センターが昨年度に実施した学生面談に関わる調査結果と分析内容をフィードバックした。また、「リフレクション・セメスター及びリフレクション面談」のFDでは、カウンセリング手法を使った面談方法の提案を行うとともに、教員が実施してみて感じた課題等について、その解決方法等の提案を行った。

1月29日に実施した参加者（8名）へのアンケートを基に本研修の成果を述べる。本研修内容については、「わかりやすい順序で進められた」、「学習意欲を高めた」、「自分に必要な知識やスキルを身につけることができた」など、参加した教員からは高い評価が得られた。特に良かった点としては、「アドバイザーの役割・現場が認識できた。振り返りについての目的

が理解できた」、「面接の背景にある知識を学ぶことができた」など、これからの面談にすぐに役立つ知識が身についたことが挙げられていた。さらに、本研修後に実践してみたいこと（アクションプラン）では、「振り返りをさせる際のスケーリング」、「リフレクション面談の技法」、「面談等の学生のコメントを引き出す心得とテクニック」、「傾聴・復唱」などが挙げられており、本研修で得た知識やスキルを面談に活かそうとする意欲や態度がみられた。一方で、「面談はやればやるほど難しく感じる」との意見もあり、より充実した面談を目指すために悩む教員の姿もみられた。

1月21日は農林海洋科学部の協力を得て、教授会の開催時間に合わせて本研修を実施したことで、多くの教員に参加してもらうことが出来た。教員対象のFDは、情報提供の時期も重要であるが、一人でも多くの教員に参加してもらうためには、教員が参加しやすい日時を設定することが重要であると改めて感じた。

2.1.4.7 外部講師によるFD「ティーチング・ポートフォリオについて」の開催

(1) 趣旨・目的

大学教育の質保証のうち、教員の教育力向上を保証するものとして、近年注目されてきたティーチング・ポートフォリオ（TP）について、理論的な背景、教育改善における効果、具体的な内容などについて理解することを目的に実施する。

(2) 取組内容

- 1) 日 時 令和元年9月14日（木）13：00～15：00
- 2) 場 所 高知大学朝倉キャンパス 共通教育棟1号館127教室
- 3) 対 象 高知大学教職員
- 4) 講 師 小林 直人氏
(愛媛大学学長特別補佐、教育・学生支援機構副機構長/教育企画室長)

5) 内 容

- ・「国立大学人事給与マネジメント改革に関するガイドライン」にティーチング・ポートフォリオが記された背景
- ・ティーチング・ポートフォリオについて
- ・今後の方向性について

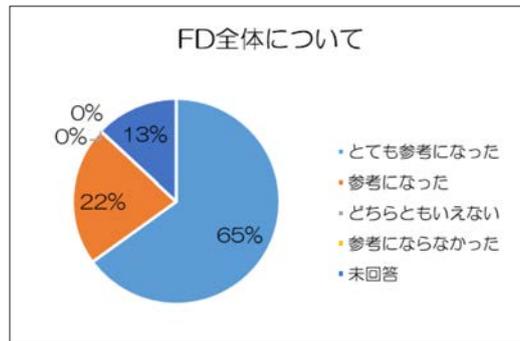
6) スケジュール

- | | |
|-------------|---|
| 13：00～13：05 | 開会挨拶 |
| 13：05～14：35 | 基調講演 小林 直人氏
テーマ：「ティーチング・ポートフォリオについて」 |
| 14：35～15：55 | 意見交換・質疑応答 |
| 15：55～16：00 | 閉会挨拶 |

(3) 結果

本FDへは本学教職員23名が参加した。

研修終了後に参加者へアンケートを行った結果、回答者20名の内、「とても参考になった」が15名、「参考になった」が5名と、回答者全員から肯定的な評価が得られた。



自由記述においても、「TPのことがよく理解できた」「TPの概要を知ることができた」などの意見が多くみられ、本FDによって、参加者のTPに対する理解が深まったと捉えることができる。

<ワークショップの様子>



2.2 II. 多面的評価指標を外部と共同開発する

2.2.1 目的

本学は達成すべき教育目標として、第3期中期目標・中期計画に「総合的教養教育の実現により、各学部・学科等のDPに従いそれぞれの専門性を身につけるとともに、分野を横断した幅広い知識・考え方等が学生自身の内部で統合され、世の中に働きかける汎用的な能力にできる人材の育成」を掲げている。AP事業では、本学が掲げるDPに沿った人材育成ができてきているかについて検証するため、①卒業段階でどれだけの力を身に付けたのかを、多面的に評価する仕組みの構築、②学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示するための手法の開発、を行うこととしている。

令和元年度は、①においては開発した指標を用いて、パフォーマンス評価や面談を通じて、どのような評価（形成的評価）を行うべきかについて検討し、②においては再構築した学修ポートフォリオについて、各学部独自機能を運用し、学修成果の可視化を深化させるとともに、e-ポートフォリオに蓄積された学修成果をまとめるかたちで、令和元年度卒業生よりディプロマ・サプリメントを発行することを目的として、下記の取組を行った。

2.2.2 主な取組内容

(1) 学修ポートフォリオ（e-ポートフォリオ）の機能の拡充

昨年度までに全学共通機能の運用が開始されたことを受けて、e-ポートフォリオの機能のさらなる拡充のため、令和元年度は各学部の独自機能の開発を行い、年度内にすべての学部で運用を開始した。この結果、各学部等での実情に応じたe-ポートフォリオの利用が可能となり、教員や2年生以上の学生のe-ポートフォリオ利用率が昨年比べて格段に向上した。e-ポートフォリオの学生と教員の利用率は、学生：80.0%（平成30年度、60.4%）で、教員54.2%（同40.7%）となった。（詳細：p.24）

(2) ディプロマ・サプリメントの発行

卒業時の学位記、成績証明書を補完する文書であるディプロマ・サプリメントについて、昨年度までに確定した仕様と運用方法に基づいてシステムの開発を行い、令和元年度卒業生にディプロマ・サプリメントを発行した。（詳細：p.26）

(3) 多面的評価指標開発研究会の開催

学生の能力評価指標の開発は昨年度までに終了しており、令和元年度は、「学生の成長を支援するための評価」という観点から、これまでの本研究会の総括を行うとともに、評価指標を用いた学生指導を深化させることを目的に、ゼミ・卒論指導等における形成的評価を含めた教員の指導について、企業・地域関係者の意見を聴取した。

具体的には、学生が客観的な自己評価を行えるようになるために、教職員がどのようにサポートすればよいのかについて、企業における人事評価の実例などを通じて、評価の目的を共有することの重要性が指摘された。

これを受けた議論においては、卒業論文や卒業研究、ゼミナールの教育効果と指導方法などが、取組終了後の課題として特に重要となるということが指摘された。一定期間、継続的に課題に取り組むという経験を学生に積ませることは、学生のキャリア形成に影響を与えるということが本取組の卒業生に対するアンケートからもうかがえ、こうした場面での教員によるパ

パフォーマンス評価や形成的評価などを視野に入れた教育体制の構築が今後の課題となるとの結論を得た。（詳細：p.27）

（４）多面的評価指標ルーブリックモデルの実施

昨年度に引き続きセルフ・アセスメント・シートによる学生の自己評価を、1年生と3年生に対して実施し、その結果を分析した。

実施率は、1年生96.9%（前年度89.9%）、3年生67.5%（同62.3%）で、昨年よりも向上した。令和元年度の3年生は、入学時から本取組におけるアセスメントを経験していることが向上の要因かと考えられる。

令和元年度の3年生の結果と、彼らが1年生の時（平成29年度）に実施した結果を比較してみると、「10+1の能力」のうち、セルフ・アセスメント・シートの調査対象となる論理的思考力、課題探求力、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観、統合・働きかけのすべての能力について、3年次の結果が1年次の結果を上回った。セルフ・アセスメント・シートは学生の自己評価によるものであることから、学生はそれぞれの能力について、以前よりもよくできるようになったと判断していることがわかる。

1年生の結果については、レベル2（3年生の時点で到達してほしいレベル）を越えるものであったが、このことは、これまで自己評価を経験したことがない1年生の自己評価基準の甘さに起因するものと考えられる。本取組の目標は、4年間の学修を通じて、より客観的に自己評価できる学生を育成することであり、ルーブリックによるセルフ・アセスメントが、そうした学生の成長を支援するものとなることを想定している。（詳細：p.28）

（５）外部アセスメントテストの実施 大学生基礎力レポート

昨年度に引き続き、1年生と3年生を対象に大学生基礎力レポート（ベネッセi-キャリア社）を4月に実施し、その結果を分析した。

受検率は、1年生94%（前年度94%）、3年生67%（前年度59%）であった。3年生については、学部等のオリエンテーションでの周知などがあり、昨年度の受検率を上回った。

アセスメントの結果は、1年生については、昨年と同様に「基礎学力（偏差値）」、「進路に対する意識・行動（達成率）」の2つの領域で国公立平均を上回り、「協調的問題解決力・行動評価（達成率）」は下回っていた。3年生のアセスメントについても、「協調的問題解決力・行動評価（達成率）」、「進路に対する意識・行動（達成率）」の領域で国公立平均を上回り、「批判的思考力」は下回った。（詳細：p.30）

（６）統合・働きかけのパフォーマンス評価の実施

平成30年度より「統合・働きかけ」のルーブリックを用いて、原則として各学部で開講される3年生の専門科目（1つ）と4年生の卒業を控えた時点でパフォーマンス評価を実施している。

パフォーマンス評価では、学生の自己評価と教員による他者評価が行われるが、自己評価を実施した学生は令和2年4月1日時点で、全学で48.9%、教員が評価した学生は全学で41.1%と、ともに低調である。

教員はテストやレポートでの成績評価の経験はあるが、学生のパフォーマンスを客観的に評価することには慣れていない。そうした背景が上記の実施率に影響を与えているものと考えられる。

しかしながら、パフォーマンス評価は、大学教育の質保証に関する議論のなかで、今後ますます重要度を高めていくものと予測され、パフォーマンス評価の実施をめぐって、さらに議論をしていかなければならない。（詳細：p.34）

2.2.3 成果

学修ポートフォリオの学部独自機能の開発と運用については、ほぼ予定通り進行し、年度内にすべての学部の独自機能が運用できるようになった。

ディプロマ・サプリメントに必要な情報をe-ポートフォリオから引き出すシステムの開発も、ほぼ予定通りに進行し、令和元年度卒業生にディプロマ・サプリメントを発行することができた。

多面的評価指標開発研究会は、事業最終年度のため1回のみで開催となったが、評価指標の開発からその運用にあたっての形成的評価の方法など、これまでに議論してきたことを総括するとともに、事業終了後、開発した評価指標を用いて学生を育成するために、ゼミ・卒論指導などの授業での展望が示されたことは成果となった。

令和元年度までに、1年生・3年生にセルフ・アセスメントを実施することが定着し、学生個々の1年次と3年次の能力の比較も可能となり、DPに基づいた本学の教育について、学生の自己評価の観点から有用な教育情報を得ることができるようになった。

また、外部アセスメントテストを導入することで、本学が行うセルフ・アセスメントの客観性を担保できることが確認されたことに加えて、セルフ・アセスメントによる評価ではカバーしきれていなかった「批判的思考力」などについて、本学の教育を検証するために有用な情報が得られた。

以上のように、本事業の取組は令和元年度までに着実な成果を挙げてきたが、一方で、本取組の柱の一つである、学生の汎用的能力を育成するための教員によるパフォーマンス評価については、41.1%と実施率は思うように上がらなかった。評価時期や評価方法などについての周知が不十分であったことがその理由として挙げられるが、加えて、試験やレポートによる評価とは異なるパフォーマンス評価については、教員側の戸惑いが背景にある。

ゼミや卒業論文の評価にあたって、教員は無意識のうちにパフォーマンス評価を行っているはずであるが、その過程を外化して客観的なものに近づけることが今後の課題となる。そのためにも、学生と教員が何のためにパフォーマンス評価を行うのかについて、あらためて十分な議論を通じて理解を深めていくことが肝要である。

2.2.4 具体的な取組内容

2.2.4.1 学修ポートフォリオ（e-ポートフォリオ）の機能の拡充

（1）趣旨・目的

学部ごとの希望、特性に応じた独自機能を開発・運用することで、e-ポートフォリオの機能を拡充し、システムの利活用を促進する。

（2）取組内容

各学部の独自機能について、下表の機能の運用が開始された。

学部	独自機能
人文社会科学部	My Portfolio：ゼミなどの専門科目での学修成果を学生が記録し、内容をWeb上で教員と共有できる機能
理工学部	学修成果物を教員とWeb上で共有できる機能
農林海洋科学部	生産環境管理学プログラム（JABEE）の学修成果を記録するための機能
医学部（医学科）	臨床実習の評価機能

また、全学共通機能として「科目ルーブリック」（授業科目ごとにルーブリック評価ができるシステム）の仕様を策定し、システムの開発を行った。

（3）結果

学部独自機能が拡充されたことで、各学部等での実情に応じたe-ポートフォリオの利用が可能となり、教員や2年生以上の学生のe-ポートフォリオ利用率が昨年に比べて格段に向上した。e-ポートフォリオの学生と教員の利用率は以下のとおりである。

【学生の利用率】令和2年3月31日現在

全学：80.0%

人文社会科学部：78.9%

教育学部：98.7%（教員免許状取得に必要な履修カルテ機能を全学生が利用）

理工学部：83.1%

医学部：63.9%

農林海洋科学部：84.2%

地域協働学部：78.7%

土佐さきがけプログラム：87.5%

【教員の利用率】令和2年3月31日現在

全学：54.2%

人文学部+人文社会科学部：89.6%

教育学部：91.8%

理学部+理工学部：93.9%

医学部：16.4%（全教員286名には、主に附属病院での診療業務に従事する教員を含むため）

農学部+農林海洋科学部：93.4%

地域協働学部：87.5%

<学部独自機能イメージ>

評価項目	自己評価	教員評価	4 優秀 (研修レベル)		3 良好 (卒業レベル)		2 改善 (努力を要する)		1 不十分 (再履修を要する)	
			人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
倫理観とプロフェッショナリズム	自己評価	19	6	32%	11	58%	2	11%	0	0%
	教員評価	11	3	27%	4	36%	4	36%	0	0%
コミュニケーション	自己評価	19	2	11%	7	37%	9	47%	1	5%
	教員評価	11	1	9%	6	55%	4	36%	0	0%
医学的な知識と技能	自己評価	19	4	21%	3	16%	9	47%	3	16%
	教員評価	11	2	18%	5	45%	4	36%	0	0%
診療記録	自己評価	17	0	0%	11	65%	4	24%	2	12%
	教員評価	11	1	9%	7	64%	3	27%	0	0%
自己学習と真摯の探究	自己評価	17	0	0%	10	59%	7	41%	0	0%
	教員評価	11	0	0%	6	55%	4	36%	1	9%
総括評価	自己評価	19	2	11%	6	32%	11	58%	0	0%
	教員評価	11	2	18%	5	45%	4	36%	0	0%

※その他の集計・分析の表示は、実際の画面でご確認ください。

イメージ図

2.2.4.2 ディプロマ・サプリメントの発行

(1) 趣旨・目的

学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示するために、卒業時の学修成果を客観的に提示する方法として令和元年度卒業生から、卒業時に学位記と合わせて「ディプロマ・サプリメント」を発行する。

(2) 取組内容

昨年度、ディプロマ・サプリメントの表示項目が下記のように確定したことを受けて、e-ポートフォリオからこれらのデータを収集するためのシステム開発とディプロマ・サプリメントのデザイン等を決定した。

また、ディプロマ・サプリメントの表示項目は資料集p.99の「高知大学ディプロマ・サプリメント」を参照されたい。

(3) 結果

当初の計画の通り、令和元年度卒業生に対してディプロマ・サプリメントを発行する体制が整えられた。学生へは卒業式当日、各学部等において、学位記とともにこれを配付した。

2.2.4.3 多面的評価指標開発研究会の開催

(1) 趣旨・目的

「10+1の能力」を検証するアセスメントについて、地域・社会からのニーズを指標の運用に反映させるために、地域・企業及び高等学校関係者から意見を聴取することを目的に多面的評価指標開発研究会を開催する。

(2) 取組内容

〈第7回多面的評価指標開発研究会〉

- 1) 日 時 令和元年10月21日（月） 16:00～17:30
- 2) 場 所 高知大学朝倉キャンパス 共通教育棟1号館 学務課会議室
- 3) テーマ 「学校から社会へ -社会で求められる力をどのように育てるか」
- 4) 概 要

本研究会では、「大学時代にどのような能力を身につけておけば、卒業後の活躍に繋がるのか」や、「能力を評価する際に、評価する側はどのようなことを意識しなければならないか」などについて、議論を重ねてきた。その成果として、平成30年度入学生から、新しい評価指標で自己評価をする取組を始めている。

第1回目から第6回目までのテーマは下記の表のとおりである。

研究会	開催日	テーマ
第1回	H28.12.16	学生の振る舞いを評価するための評価指標の開発
第2回	H29.3.16	同上
第3回	H29.9.12	パフォーマンス評価をどのように行うか
第4回	H30.2.21	学生のマネージャーとしての教師に求められるものは何か
第5回	H30.9.25	能力の自己評価と他者評価
第6回	H31.2.27	学生の自己評価を教員がどのようにサポートするか

本研究会を通して、多面的な評価指標による学生の育成について一定の方向性が見えてきた。AP事業最終年度となる令和元年度は、本研究会のこれまでの議論の経緯を整理し、学生の能力を引き出すのに重要な役割を果たしているゼミナールや卒業研究に焦点をあて、あらためて社会で求められる力を大学教育のなかでどのように育成していくのかについて、本事業の成果を踏まえて議論を行った。

研究会の冒頭で、リクルートワークス研究所の豊田義博氏より話題提供「あのゼミではなぜ学生が育つのか」があり、その内容を基に、能力評価とそれをもとにした学生指導について議論が行われた。

(3) 結果

多面的評価指標開発研究会では、高知大学のDP見直しに連動した「10+1の能力」の評価指標、特にルーブリック評価指標の開発にあたって、ステークホルダーの意見を聴取してきた。その成果は、平成30年度入学生から、ルーブリックによる自己評価（セルフ・アセスメント・シート）を開始したこと、また、ルーブリックによるパフォーマンス評価の体制を整えたことにつながった。

また、学生が客観的な自己評価を行えるようになるために、教職員がどのようにサポートすればよいのかについても、企業、地域関係者の立場からの意見を聴取し、今後、学生面談、学生のキャリア形成の場面で活かすことのできる有用な見解を得た。

この点については、第4回から第6回の研究会において議論が深まったが、卒業論文や卒業研究、ゼミナールにおいて、一定期間、継続的に課題に取り組むという経験は、学生の卒業後のキャリア形成に大きな影響を与えるものであるという結論に至った。

このような本研究会での議論は、本学の教育の質を保証するために重要なものであり、今後の教育改善も、こうした観点からの教員の教育力向上に力を注いでいかなければならない。

2.2.4.4 多面的評価指標ルーブリックモデルの実施

(1) 趣旨・目的

学生が身に付けるべき能力を社会との接続の視点から捉え直し、本学のDPに基づいた「10+1の能力」における10の能力のうちGPAで評価する2つの能力を除いた8つの能力（論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観）について、ルーブリックによる評価を平成30年度入学生から実施する。また、3・4年生の受講科目から各学部が設定したパフォーマンス科目において、+1の能力の「統合・働きかけ」のルーブリックに基づいて教員がパフォーマンス評価を実施し、リフレクション面談等で形成的評価を行う。

(2) 取組内容

全学の1年生と3年生を対象に、セルフ・アセスメント・シートを用いて学生の自己評価を実施した。1年生のアセスメントは、論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観（情報の受容・発信に関わる）の領域から22項目を設定し、それぞれについて、レベル1からレベル5まで具体的な行動記述（ルーブリック）を提示して、学生自身に自分がどの段階にあるのかを自己評価させるものである。

3年生のアセスメントは、論理的思考力、課題探求力、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、リテラシー・倫理観、統合・働きかけについて24項目を設定し、それぞれについて、身につけていない⇔身につけているの4件法で自己評価させるものである。

(3) 結果

1) 実施率について

1年生と3年生の実施率は、1年生96.9%（前年度89.9%）、3年生67.5%（同62.3%）であった。

1年生はパソコンまたはスマートフォンを用いてWeb上で行い、3年生は紙媒体で実施した。

学部等	1年生			3年生		
	対象者数	回答数	回答率	対象者数	回答数	回答率
人文社会科学部	286	270	94.4%	286	94	32.9%
教育学部	139	138	99.3%	137	125	91.2%
理工学部	252	245	97.2%	266	206	77.4%
医学部	171	169	98.8%	175	139	79.4%
農林海洋科学部	209	202	96.7%	204	167	81.9%
地域協働学部	62	61	98.4%	55	31	56.4%
土佐さきがけプログラム	10	9	90.0%	14	5	35.7%
計	1129	1094	96.9%	1137	767	67.5%

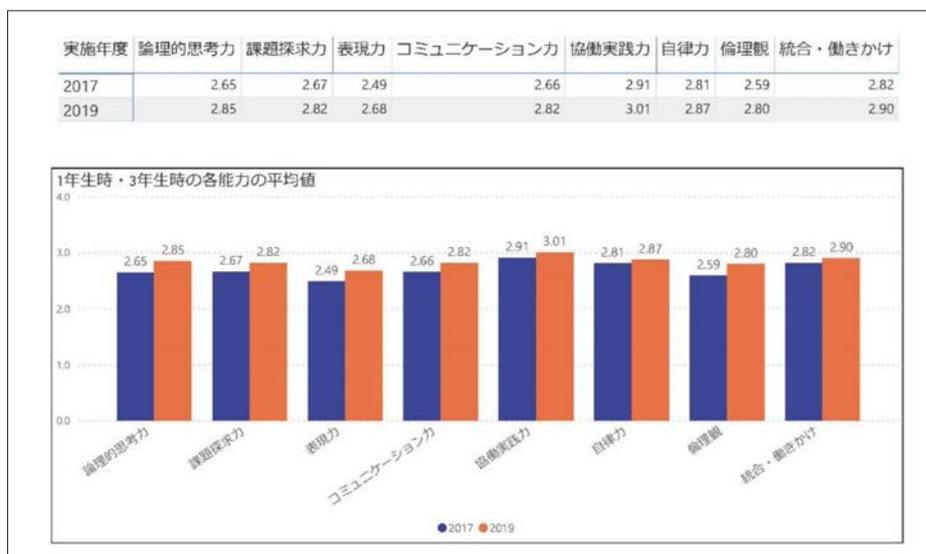
2) アセスメントの結果について

令和元年度の3年生は、1年次に同様のセルフ・アセスメントを実施しているのので、各能力が1年次と3年次でどのように変化しているか、同一母集団による比較ができる。その結果は下記の通りであるが、すべての能力について、1年次の平均値に比べて3年次の平均値のほうが高いスコアを示している。

【各能力の平均値】

実施年度 能力名	2017		2019	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
論理的思考力	2.65	0.55	2.85	0.50
課題探求力	2.67	0.54	2.82	0.51
表現力	2.49	0.59	2.68	0.54
コミュニケーション力	2.66	0.58	2.82	0.54
協働実践力	2.91	0.58	3.01	0.56
自律力	2.81	0.54	2.87	0.54
倫理観	2.59	0.60	2.80	0.59
統合・働きかけ	2.82	0.52	2.90	0.49

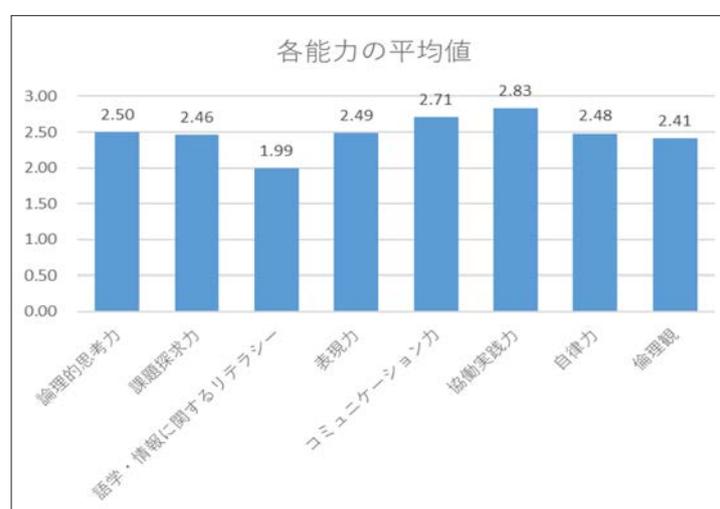
【各能力の1年生時・3年生時の比較】



この調査は、あくまでも学生の自己評価によるものであるが、3年次、学生は1年次の自分のスコアを確認することなくアセスメントを行っている。したがって、平均値の比較とはいえ、3年生の学生は、1年生の時よりも各能力について向上したという実感を持っていると考えられる。

1年生については、昨年度よりルーブリック評価指標を用いてアセスメントを行っている。ルーブリックは、レベル2を3年生のパフォーマンス評価の時点での達成レベル、レベル3を卒業時の達成レベルと想定して作成されているが、1年生の自己評価は昨年と同様にレベル2を上回るものであった。

このことは、ルーブリックのレベル設定の問題であるとともに、はじめてセルフ・アセスメントを行う1年生の自己評価の基準の甘さに起因するものであるとも考えられる。本取組では、大学での学修を通じて、学生がより客観的に自己評価できるようになることをめざしており、この点を考慮して、今後のアセスメントの分析を行っていかなければならない。



2.2.4.5 外部アセスメントテストの実施 大学生基礎力レポート

(1) 趣旨・目的

本学で実施する学生の自己評価のためのアセスメントの信頼度について客観的に評価するために、全学の1年生、3年生を対象に外部客観テスト「大学生基礎力レポート」（ベネッセiキャリア社）を実施する。

併せて、結果についての解説会を実施する。大学生基礎力レポートを受検し、その結果について解説会において説明を受けることで、学生がその時点における自身の強み、弱みを理解し、卒業時の目標やそれに向けた各学期の目標を立て、期末に目標の達成について振り返るPDCAサイクルを体得することも目標としている。

(2) 取組内容

全学の1年生、3年生を対象に、下記の日程で大学生基礎力レポートの試験と解説会を実施した。

【大学生基礎力レポート】

- ・ 4月4日（木）、4月5日（金）、4月8日（月）、4月17日（水）、4月24日（水）、5月15日（水）

【解説会】

解説会は、下記の日程で、ベネッセiキャリア社から派遣された講師によって実施された。

・ 4月26日（金）、5月14日（火）、5月15日（水）、5月22日（水）、5月29日（水）

（3）結果

1）受検率について

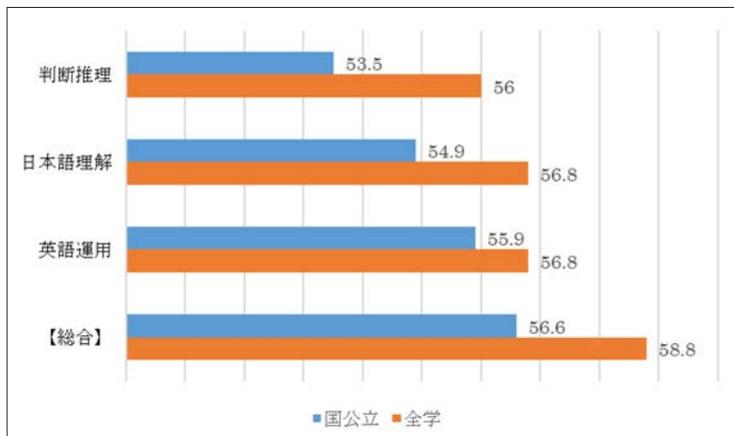
1年生は、全学の94%（前年度94%）が受検し、受検者のうち90%が解説会に参加した。3年生は、全学の67%（前年度59%）が受検し、受検者のうち46%が解説会へ参加しており、昨年の受検率を上回った。

2）調査結果について

1年生と3年生とでは調査内容が異なっている。1年生の調査内容は、「基礎学力（偏差値）」、「協調的問題解決力・行動評価（達成率）」、「進路に対する意識・行動（達成率）」、3年生は「批判的思考力（正答率）」、「協調的問題解決力・行動評価（達成率）」、「進路に対する意識・行動（達成率）」である。

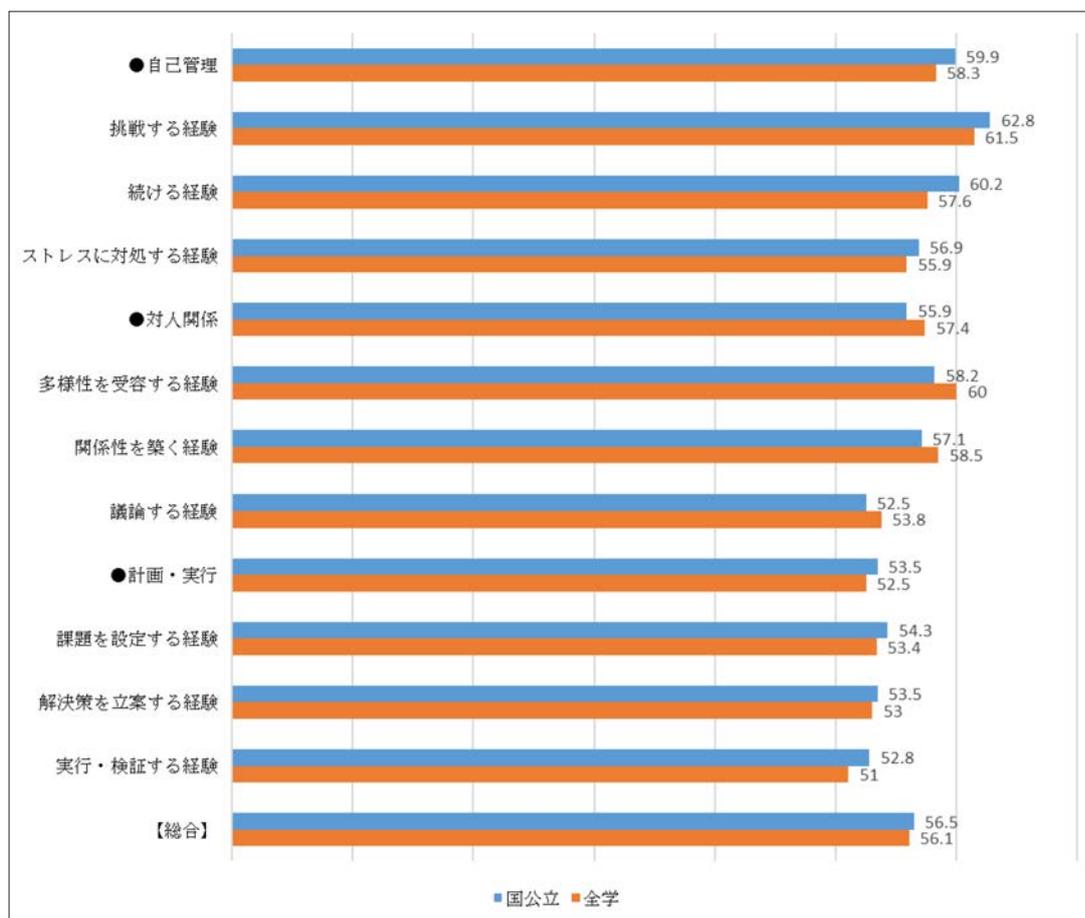
また、グラフの「国公立」（青色）は「大学生基礎力レポート」を受検した他の国公立大学（1年生9校、3年生6校）の平均値、「全学」（赤色）は本学受検者全員の平均値である。

【1年生 基礎学力（偏差値）】



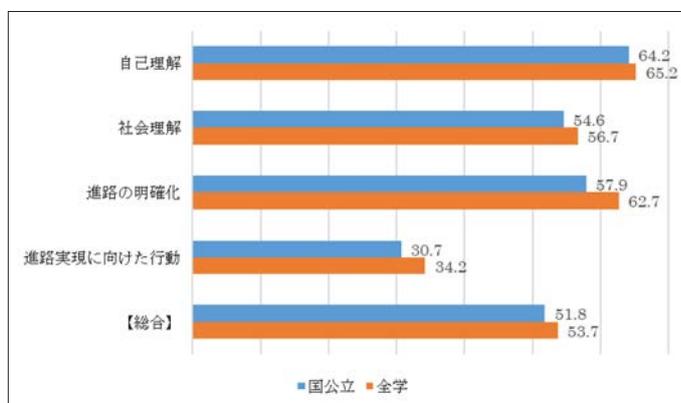
昨年度の結果を上回っており、また、いずれも国公立大学の平均を上回っている。

【1年生 協同的問題解決力・行動評価（達成率）】



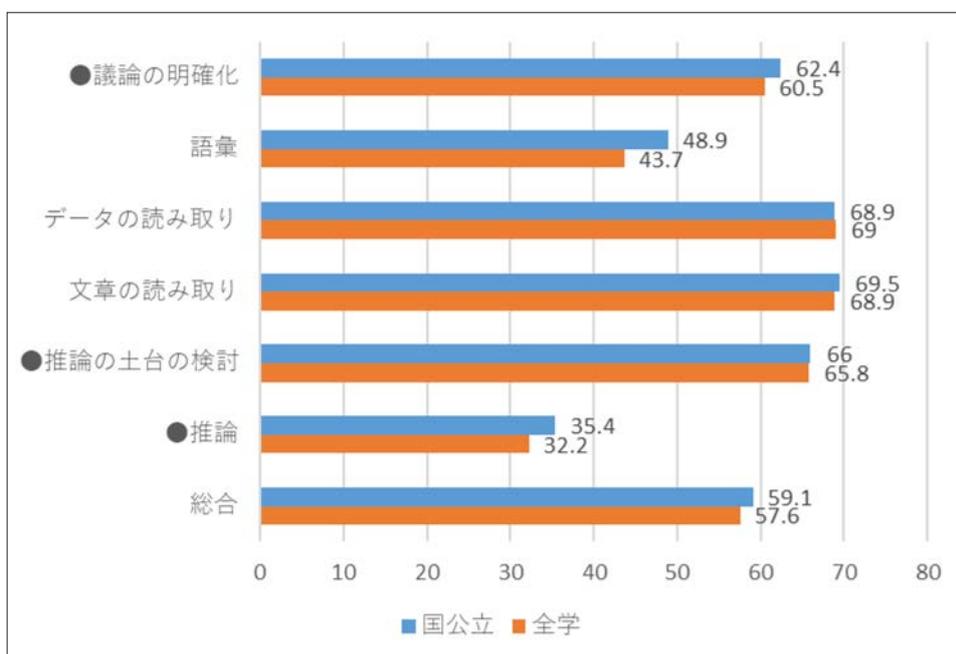
昨年と同様に「自己管理」と「計画・実行」については、国公立大学の平均に比べて低く、「対人関係」は上回っていた。セルフ・アセスメント・シートにおいても、学生の「自己管理」「計画・実行」などについての自己評価は、他に比べて低い傾向にある。

【1年生 進路に対する意識・行動（達成率）】



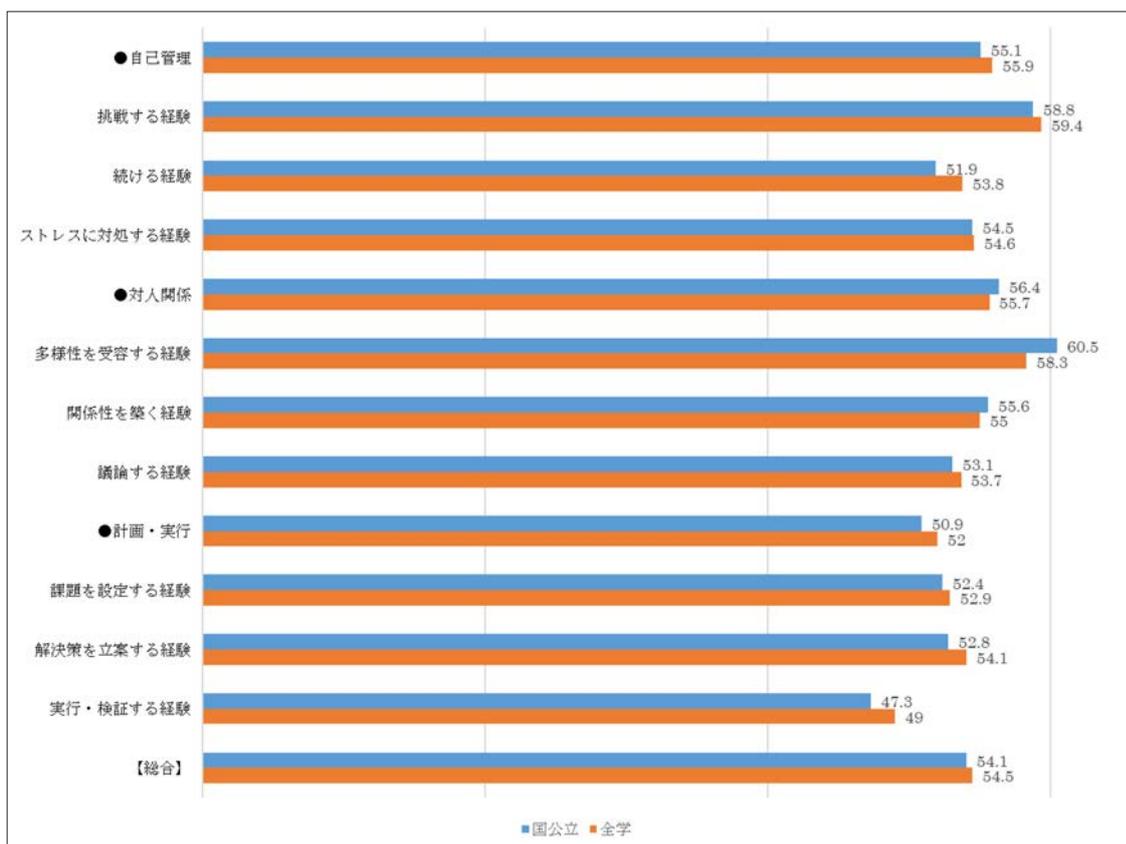
明確な進路を見定めて入学していることが見て取れる。教育学部、医学部のような職業人養成に特化している学部の学生はその傾向が強い。

【3年生 批判的思考力（正答率）】



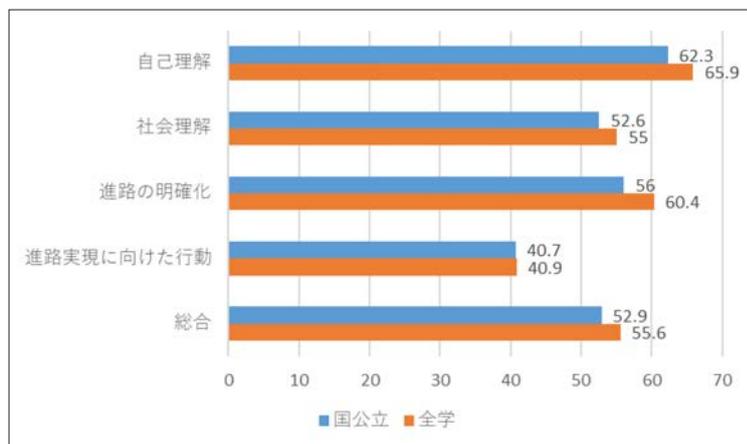
「データの読み取り」以外は国公立大学の平均を下回る。専門科目をすでに学んでいる3年生の結果として満足いくものではない。批判的思考力は、学修を重ねることで身についてくるものであり、初年次科目を含めて、批判的思考力を養うカリキュラムの検討が必要である。

【3年生 協調的問題解決力・行動評価（達成率）】



「自己管理」、「計画・実行」については、国公立大学の平均を上回り、「対人関係」は下回っており、1年生の結果と逆転している。前者については、大学生活のなかで改善されるところがあったが、「対人関係」については、経験を積むことによって、その困難さを理解したことによる結果と推察される。

【3年生 進路に対する意識・行動（達成率）】



昨年は国公立大学の平均を下回っていた「進路実現に向けた行動」が平均をわずかに上回り、すべての項目で国公立大学の平均以上となった。

2.2.4.6 統合・働きかけのパフォーマンス評価の実施

(1) 趣旨・目的

DPに基づいて示された10+1の能力評価指標の到達度を測り、これを用いた学生指導を通じて、本学の教育の質を保証するために、パフォーマンス評価と、セルフ・アセスメント・シートに基づいた学生の自己評価を実施している。10+1の能力評価のうち、+1部分にあたる「統合・働きかけ」の到達度を評価することを目的としてパフォーマンス評価を実施する。

【10+1の能力一覧及びその評価方法】

ディプロマポリシーの分類	具体的な能力		評価方法
【知識・理解】	対課題 (対課題力)	専門分野に関する知識	GPA
【思考・判断】		人類の文化・社会・自然に関する知識	
		論理的思考力	
【技能・表現】	課題探求力	ルーブリックによる 学生の自己評価 (セルフ・アセスメント ・シート)	
	語学・情報に関するリテラシー		
【関心・意欲・態度】	対人 (関係力)		表現力
	対自己 (調整力)		コミュニケーション力
統合・働きかけ		協働実践力	パフォーマンス評価
		自律力	
		倫理観	
統合・働きかけ		上記の諸能力を内的に統合し、周囲の文化・社会・自然・人間などに外的に働きかけていく能力	

(2) 取組内容

DPに基づいて設定したルーブリックを用いて、各学部が設定したパフォーマンス科目において、学生による自己評価と教員によるパフォーマンス評価を行った。

評価の実施時期は、原則として、3年次及び4年次とし、教員は授業中の学生のパフォーマンスに関する所見と学生の自己評価の差異等の観点から指導・助言を行った。パフォーマンス評価は、e-ポートフォリオから入力し、結果を閲覧することができ、学生と教員が結果を共有・フィードバックする仕組みが構築されている。

(3) 結果

各学部等における、令和元年度のパフォーマンス評価の実施率は以下のとおりである。

理工学部（2回目）は改組の学年進行途中であるため、パフォーマンス評価を実施していない。教育学部と地域協働学部は、別途、独自のループリックによってパフォーマンス評価を行っている取組がある。また、医学部医学科の1回目は学部独自機能の運用開始（令和2年2月）に合わせて実施した。

自己評価を実施した学生数は全学で48.9%、教員が評価した学生数は全学で41.1%と、ともに低調であった。この理由として、学生に関しては3年生、4年生の時点で一堂に集まる機会がなく、十分に周知ができていなかったこと、教員による評価に関しても、評価の時期や方法についての周知が不十分であることが考えられる。

令和元年度 e-ポートフォリオ「統合・働きかけパフォーマンス評価」実施状況について

2020年4月1日現在

1. 学生の自己評価 実施状況

学部等	1回目（3年次） ※医学科は5年次 ※農林海洋科学部は4年次			2回目（4年次） ※医学科は6年次			合計		
	評価済学生数	対象学生数	実施率	評価済学生数	対象学生数	実施率	評価済学生数	対象学生数	実施率
人文社会科学部	59	268	22.0%	104	263	39.5%	163	531	30.7%
教育学部	81	136	59.6%	66	130	50.8%	147	266	55.3%
理工学部	120	253	47.4%	—	—	—	120	253	47.4%
医学科	12	124	9.7%	104	104	100.0%	116	228	50.9%
看護学科	58	60	96.7%	70	71	98.6%	128	131	97.7%
農林海洋科学部	102	185	55.1%	117	185	63.2%	219	370	59.2%
地域協働学部	18	60	30.0%	8	49	16.3%	26	109	23.9%
TSP	3	13	23.1%	15	15	100.0%	18	28	64.3%
合計	453	1,099	41.2%	484	817	59.2%	937	1,916	48.9%

(対象学生数は、令和元年度パフォーマンス評価科目履修者数)

2. 教員の評価実施状況（教員が評価を行った学生数）

学部等	1回目（3年次） ※医学科は5年次 ※農林海洋科学部は4年次			2回目（4年次） ※医学科は6年次			合計		
	評価済学生数	対象学生数	実施率	評価済学生数	対象学生数	実施率	評価済学生数	対象学生数	実施率
人文社会科学部	37	268	13.8%	30	263	11.4%	67	531	12.6%
教育学部	10	136	7.4%	10	130	7.7%	20	266	7.5%
理工学部	124	253	49.0%	—	—	—	124	253	49.0%
医学科	19	124	15.3%	104	104	100%	123	228	53.9%
看護学科	58	60	96.7%	70	71	98.6%	128	131	97.7%
農林海洋科学部	136	185	73.5%	141	185	76.2%	277	370	74.9%
地域協働学部	18	60	30.0%	11	49	22.4%	29	109	26.6%
TSP	4	13	30.8%	15	15	100.0%	19	28	67.9%
合計	406	1,099	36.9%	381	817	46.6%	787	1,916	41.1%

(対象学生数は、令和元年度パフォーマンス評価科目履修者数)

【特記事項】

※医学科は学生、教員ともに紙媒体で実施したパフォーマンス評価の結果を反映。

令和2年2月に、e-ポートフォリオ 医学科独自機能を用いて、パフォーマンス評価の実施を開始。

2.3 Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する

2.3.1 目的

AP事業では、本学が掲げるDPに沿った人材育成を行うための教育の質保証の仕組みを構築することを目標に掲げているが、よりよいものへと改善を図るには、効果検証を行う仕組みの構築と継続実施が必須である。よって、AP事業では、入学から卒業、そして社会を見据え、卒業生と在学学生へ大学教育の満足度等を調査し、学生の成長の検証を行うこととした。また、AP事業そのものを学内外から検証する仕組みを構築し、AP事業終了後を見据えて事業の在り方や効果を検証することとした。

2.3.2 主な取組内容

(1) 卒業生調査及び卒業生就職先調査の実施

卒業生調査は、平成30年度の卒業生1,073名を対象に、昨年度から引き続きWebを用いて実施した。その結果、360名から回答があり、回収率は33.6%であった。

卒業生調査の結果、「大学教育の満足度」並びに「大学時代の活動を通じた成長実感」は昨年度と同様に90%を超えており、卒業生の本学の教育に対する満足度は高く、成長実感を得ていることが確認できた。

卒業生就職先調査も昨年度と同様にWebで実施し、卒業生から同意を得た30件に調査依頼を行い、12件の回答を得た。（詳細：p.37）

(2) リフレクション・セメスターにおけるインターンシップふりかえりセミナーの実施

リフレクション・セメスター（これまでの大学生活とそこで得られた学びや今後の大学生活の送り方、目標について振り返り、内省する期間として3年生の第1学期に設定）の一環として、学生の学修成果について自覚を促し、3年生が自分の強みを意識して社会に貢献できる力の集大成に向けた準備ができるよう、振り返りの機会を設け支援した。

セミナーでは、共通教育科目（教養科目・キャリア形成支援分野）「インターンシップ実習」の授業において、インターンシップの事前・事後学習の時間に、大学生活の振り返りとそれに基づいたインターンシップ期間の目標設定、インターンシップの振り返りを行った。

事前指導は、7月20日（土）に実施され、受講者は14名であった。事後指導は、10月5日（土）、10月24日（木）10月30日（水）に実施され、受講者は17名であった。（詳細：p.48）

(3) 大学教育の質保証に関するアンケートの実施

全学部の学生を対象に、令和元年9月25日（水）～令和元年12月15日（日）の期間に、大学教育の質保証に関するアンケート調査を実施した。方法は昨年と同様に、Microsoft Office 365のアンケート機能Formsを使い、Webアンケート方式を採用した。

令和元年度は、新たに「大学教育や学生生活における成長実感」を質問項目に追加して実施した。対象学生4,943名のうち、2,751名から回答を得ることができ、55.7%の回答率であった。

大学教育と大学生活の総合的な満足度については、80%以上が満足していると回答しており、高い結果となった。

また、令和元年度に追加した「大学教育や学生生活における成長実感」に関しては、大学生活のどの場面で成長につながったと感じているかの問いに対して、「専門科目や共通教育科目など講義型の授業」と「ゼミなどの少人数でディスカッションなどがある授業」が回答の上位

となっており、大学での授業が学生の成長実感につながっていることが明らかとなった。（詳細：p.50）

（4）学修成果と学生生活のデータの分析及び検証

学内にある学生の学修成果に関わるデータと学生生活に関わるデータを一元化し、本学の学生の学修成果に関わる分析・検証を行った。高知大学での学生の成長を、通算GPA、セルフ・アセスメント、大学生基礎力レポート、大学教育の質保証に関するアンケート（以下、「質保証アンケート」という）のデータから検証した。また、これらのデータの項目間の関連を分析し、成長に結びつく要因を分析した。（詳細：p.62）

2.3.3 成果

昨年度とほぼ同様の方法で、卒業生調査及び卒業生就職先調査と大学教育の質保証に関するアンケートを実施することができた。調査項目に大きな変更を加える必要がなかったため、在学生と、卒業生の状況を継続的に把握し、学生を入学時から社会に出た後まで追跡して、その成長を確認する体制を構築できたといえる。

満足度は、卒業生による入学時の満足度が回答者の85.3%、卒業後9ヶ月が経過した時点での、大学教育への総合的な満足度が90.3%であった。在学生による大学教育への総合的な満足度は80.8%であることから、全体的に満足度は高く、卒業してからも大学での教育を肯定的に振り返っている状況が推察されるデータを得ることができた。加えて、大学教育の満足度には、「専門分野の勉強」、「幅広い知識や教養を身に付けるための勉強」、「キャンパスの施設・設備」が強い相関を持っていることも明らかにすることができた。

また、大学時代の成長実感も、94.1%の卒業生から、「成長した」との回答を得た。さらに、本学への愛着についても、「卒業生であることを誇らしく感じる（80.0%）」、「卒業大学に愛着を持っている（79.4%）」と回答しており、卒業大学である本学に愛着を持っていることが明らかになった。

一方、本学で定めている能力指標の「10+1の能力」に目を転じると、在学生では、12項目中10項目において、8割以上の学生が「身についた」と回答しており、高い自己評価を示しているが、卒業生調査においては「身についた」の割合が低下する項目が多く、8割以上の項目が12項目中7項目にとどまっている。在学生の「10+1の能力」の調査においては、1年生と2年生の間でも、対人・対自己の能力に関する落ち込みが見られ、求められる能力の尺度を見直す必要を感じている状況が示唆されている。

これらの結果を、学生・教職員にフィードバックしていくとともに、学生が実社会と向き合う契機となる就職活動に関する指導にも役立てていきたい。

2.3.4 具体的な取組内容

2.3.4.1 卒業生調査及び卒業生就職先調査の実施

【卒業生調査】

（1）趣旨・目的

本調査は、本学が卒業生の地域社会での活躍にどれだけ貢献できているかを測定し、教育施策を改善するためのサイクルをつくることを目的として継続実施している。具体的には前年度卒業生とその就職先企業を対象に、本学が掲げる「総合的教養教育」の教育の中で身に付けてほしい「10+1の能力」を中心としたWebアンケート調査を実施し回答を得る。そして、それ

らの回答を、卒業生の在学時の教学に関わるデータ（GPA、修得単位数、セルフ・アセスメント調査結果、大学生基礎力レポート結果）等と紐づけ、大学での学びや経験、学生に身に付いた資質・能力及びそれらに対する評価の関連から、資質・能力を高める上で有効な教育施策を検討するとともに、卒業生の就職先地域での活躍の違いを把握し、本学の教育の質保証に関わる検証を行う。

(2) 取組内容

1) 期 間 令和元年12月2日（月）～令和2年1月20日（月）

2) 対 象 平成30年度卒業生1,073名

3) 調査内容

①入学前の居住地、②現在の居住地、③職業、④職種、⑤業種、⑥配属部門、⑦勤務先規模、⑧大学選択理由、⑨志望度、⑩入学時の満足度、⑪大学時代の経験、⑫大学時代の学びの機会、⑬大学時代の感覚として残る印象、⑭資質・能力の自己評価、⑮卒業後に必要な資質・能力、⑯卒業後に必要な資質・能力（自由記述）、⑰満足度・総合満足度、⑱成長実感、⑲成長エピソード、⑳卒業大学への愛着、㉑高知への愛着、㉒自己効力感、社会感

4) 調査手順

卒業生のアドレスに、アンケートサイトの一斉送信機能を用いて、調査の概要、調査への協力依頼、アンケートサイトのURL、認証用ID・パスワードを記載したメールを送信した。メールが不達の者やアドレスの登録がない者には、在学時の帰省先の住所宛てに郵便でメールの文面と同様の内容を送った。この際、認証用ID・パスワードが卒業生以外に見られないよう配慮した。卒業生へのWebアンケートの末尾で、就職先調査への同意と、就職先の宛先の記入を求めた。

(3) 結果

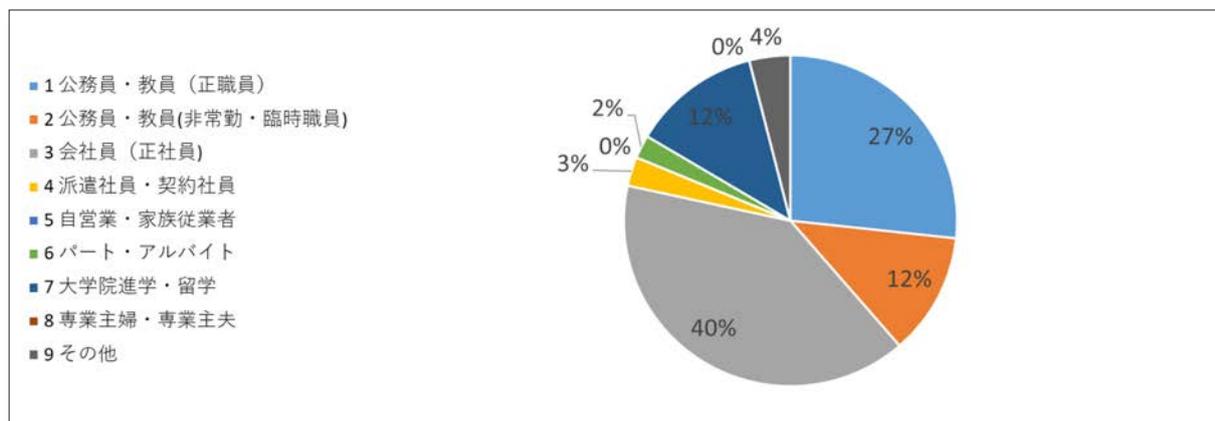
1) 回収率

学部等	卒業生	回答数	回答率
人文学部	266	77	28.9%
教育学部	140	68	48.6%
理学部	256	85	33.2%
医学部	177	52	29.4%
農学部	166	56	33.7%
地域協働学部	54	15	27.8%
土佐さきがけプログラム	14	7	50.0%
総計	1073	360	33.6%

2) 設問集計

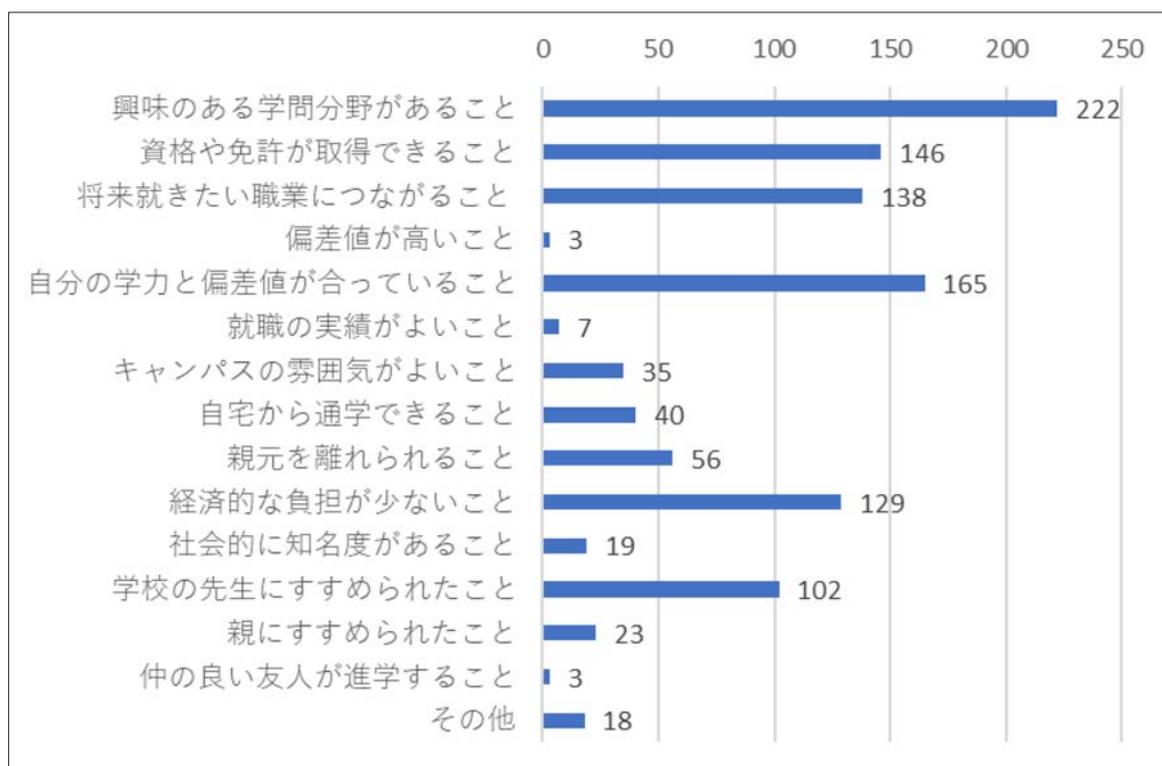
1 基本的属性

設問 現在の職業をお選びください。



2 本学の選択理由

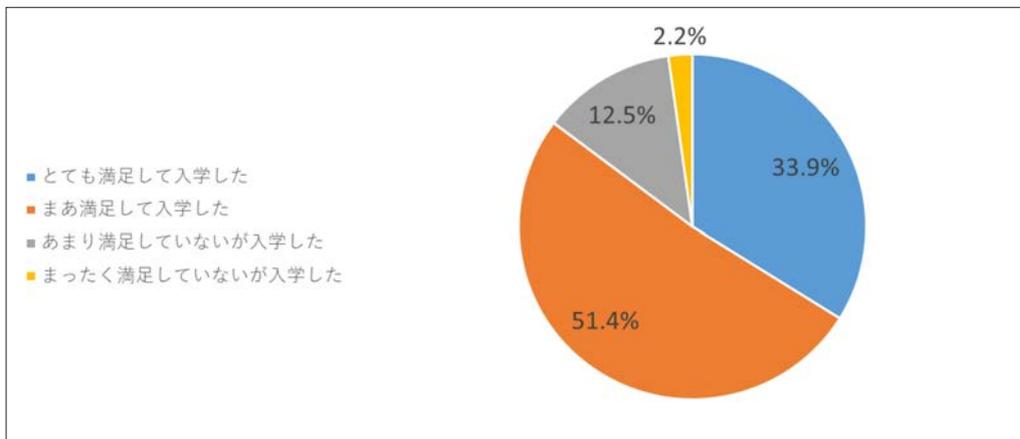
設問 大学に入学を決めた理由であてはまるものをすべてお選びください。（複数回答可）



本学を選択した理由の上位は、「興味のある学問分野があること」、「自分の学力と偏差値が合っていること」、「資格や免許が取得できること」の順に高かった。

3 入学時の満足度

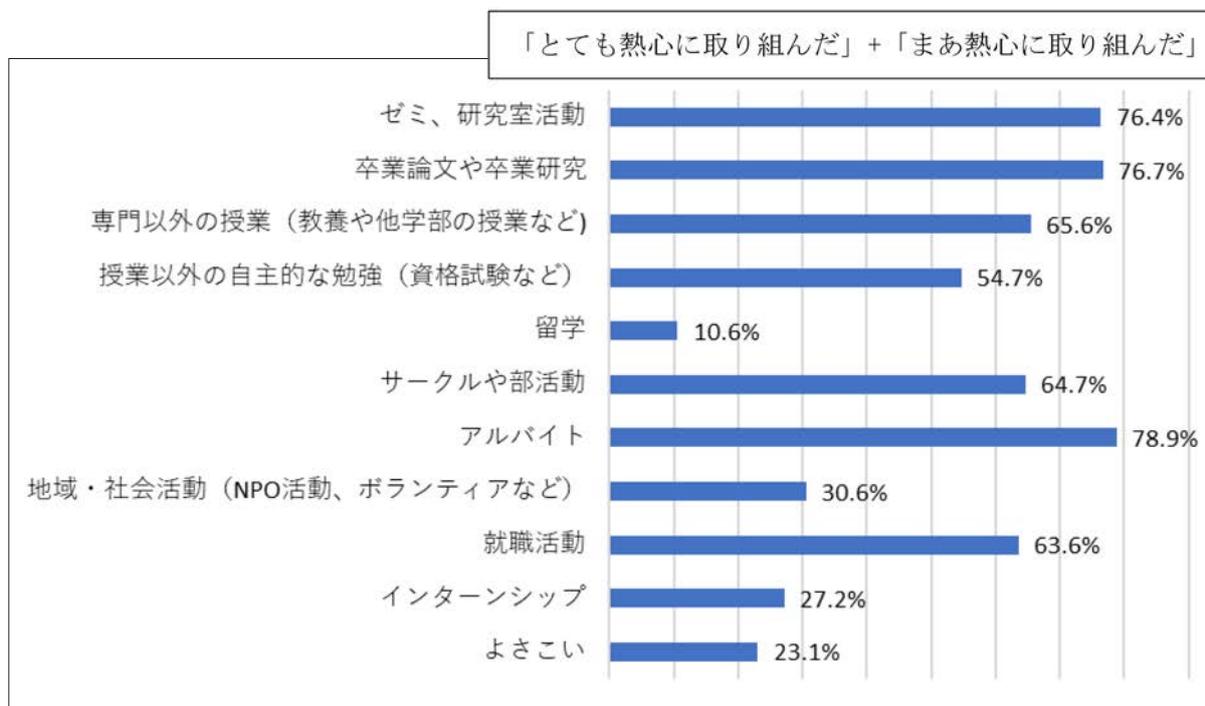
設問 大学入学時の気持ちについて、あてはまるものをひとつお選びください。



入学時の満足度については、85.3%（「とても満足して入学した」+「まあ満足して入学した」）と高く、本学への入学者の8割以上が、満足していたことがわかった。

4 大学時代の経験

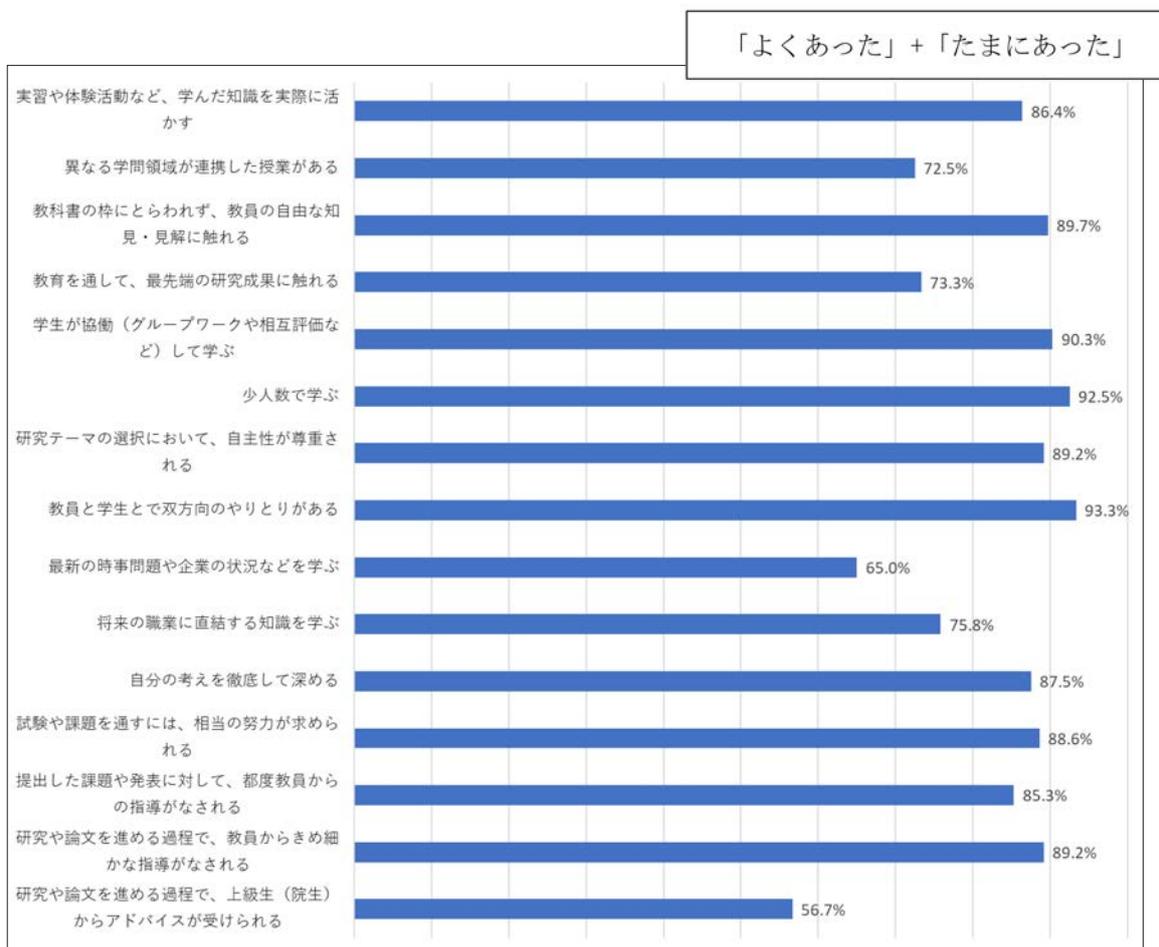
設問 大学時代に、次のような活動にどの程度熱心に取り組みましたか。



大学時代に熱心に取り組んだ第1位は「アルバイト」であった。第2位以下は、「卒業論文や卒業研究」、「ゼミ・研究室活動」での活動と続いている。「専門以外の授業（教養や他学部の授業など）」も熱心であったことがうかがえる。また、留学への取組については、低い数値であった。

5 大学時代の学びの機会

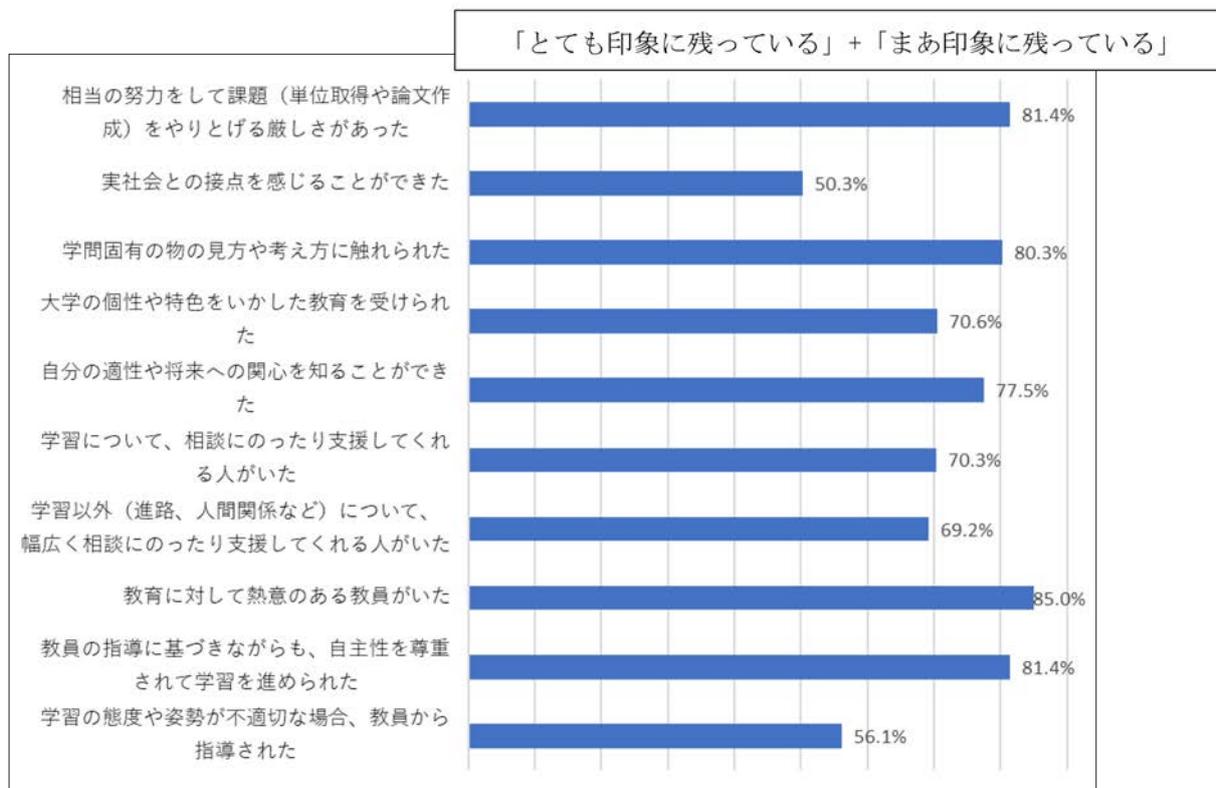
設問 大学教育（授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など）を通して、次のような機会はどれくらいありましたか。



大学教育（授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など）を通しての機会は、「教員と学生とで双方向のやりとりがある」が93.3%、「少人数で学ぶ」92.5%と続く。「学生が協働（グループワークや相互評価など）して学ぶ」90.3%、「教科書の枠にとらわれず、教員の自由な知見・見解に触れる」89.7%であり、教員との関係性が上位に挙げられていた。

6 大学時代の感覚として残る印象

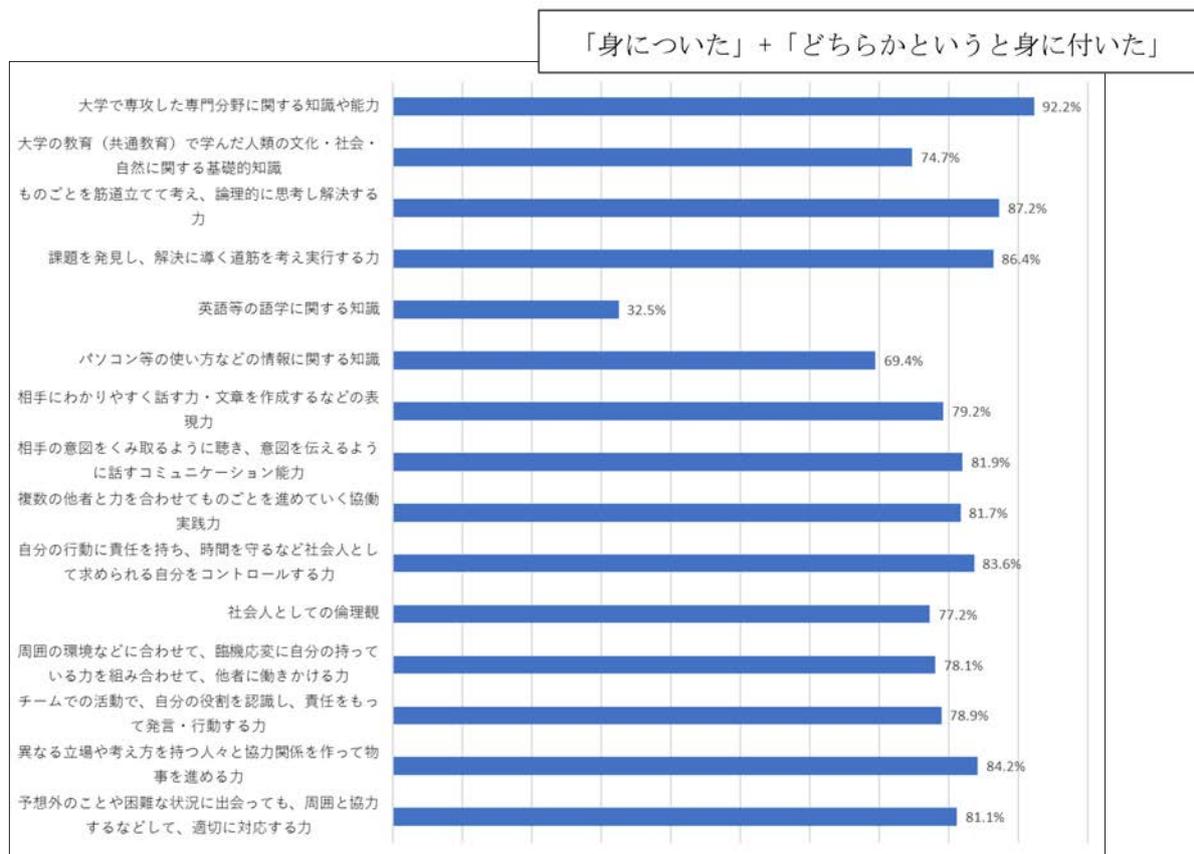
設問 大学教育（授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など）を通して、次のような経験はどれくらい現在も印象に残っていますか。



大学教育（授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など）を通して、印象に残っている経験については、「教育に対して熱意のある教員がいた」85.0%、「教員の指導に基づきながらも、自主性を尊重されて学習を進められた」「相当の努力をして課題（単位取得や論文作成）をやりとげる厳しさがあった」の2つが81.4%と次に続く。これらのことから、卒業研究や卒業論文の指導を通じた教員との関係性について印象に残っている様子がわかる。

7 資質・能力の自己評価

設問 大学で受けた教育により、次のような能力がどの程度身につきましたか。



大学で受けた教育による能力（10+1の能力）の自己評価は、高い順から「大学で専攻した専門分野に関する知識や能力」「ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力」「課題を発見し、解決に導く道筋を考え実行する力」であった。一方、「英語等の語学に関する知識」が身についたと回答する者は、32.5%であり、それ以外の能力に比べると低い数値であった。

また、卒業後の経験に照らし合わせて重要だと考える能力について、上位3つを回答してもらった結果、「相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力」と回答した者が多く、卒業生は卒業後に、コミュニケーション能力が重要であると認識していることが明らかになった。

8 卒業後に必要な資質・能力（自由記述）

設問 卒業して9か月が経過した現在、大学時代にもっと身につけておけばよかったと考える力やスキルはありますか。自由に記入してください。

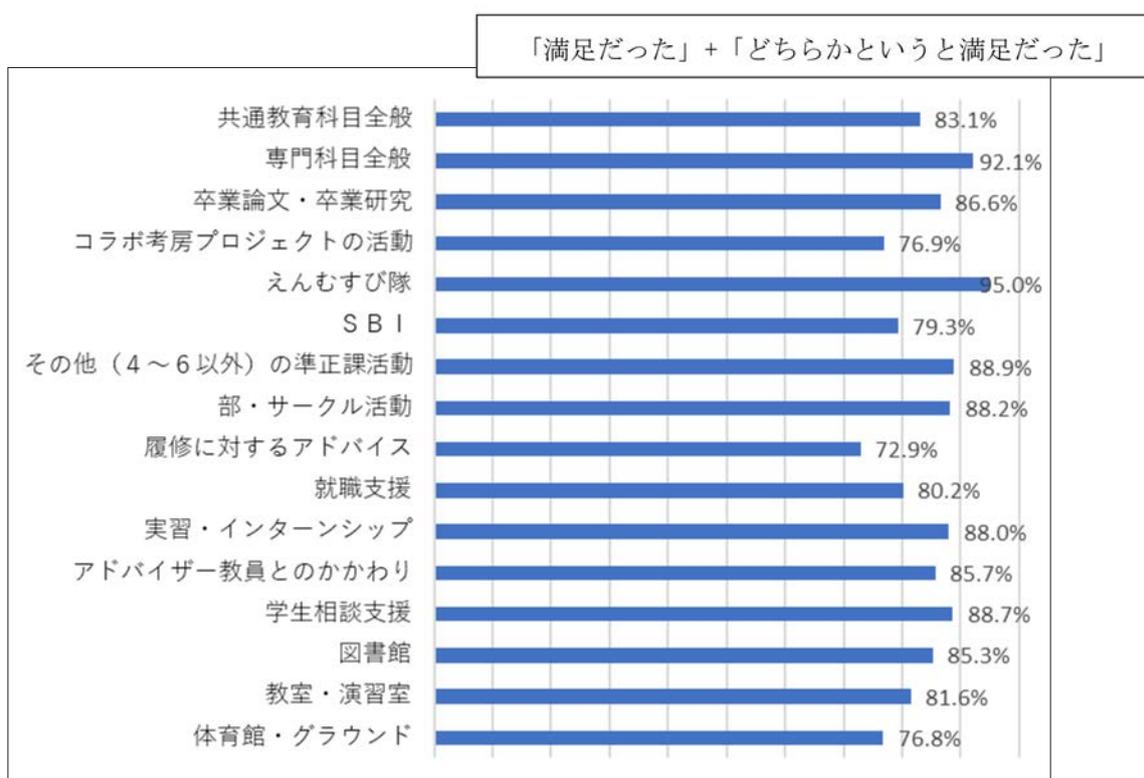
自由記述を検証したところ、上位は、「語学」、「パソコンスキル」、「社会に出てから必要となる知識の習得」、「コミュニケーション能力」であった。卒業後9ヶ月程度、社会人を経験する中で、これらのスキルが必要であると考えられる場面に遭遇し、感じたものと捉えることができる。

大学時代に身についた資質・能力の自己評価では、「相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力」は、81.9%の卒業生が身についたと自己評価

しているが、社会に出てから卒業後に重要と考える資質・能力の1位に、コミュニケーション能力と記しており、大学時代に身に付けておけばよかった資質・能力の自由記述においても、必要であるとの記述が多くみられた。学生が身に付いたと考えるコミュニケーション能力は、社会で求められるコミュニケーション能力と異なるものなのか、乖離している部分が見受けられたため、今後、この点についてさらなる検証が必要であると考ええる。

9 満足度・総合満足度

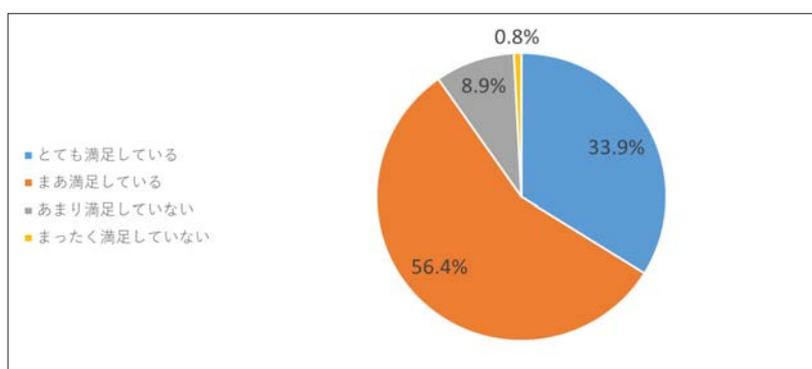
設問 大学で受けた教育や学生生活支援、施設などについて、あなたはどの程度満足していますか。



※回答のうち、「利用していない・わからない」は、分母から除いて算出した。

準正課活動等、「利用していない・わからない」と回答した学生が多い項目もあるが、経験者・利用者限定すれば、全ての項目において70%以上が満足である（「満足だった」+「どちらかという満足だった」）と回答しており、満足度は全体的に高い結果となった。

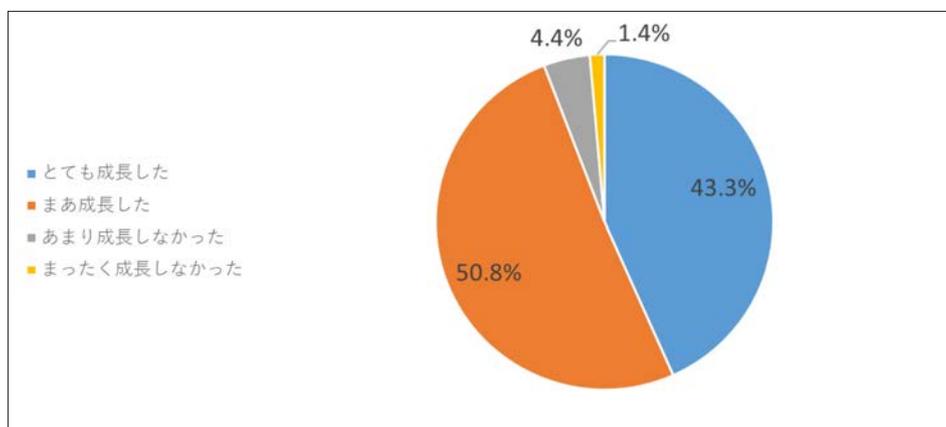
設問 総合的に見て、あなたは高知大学の教育にどの程度満足していますか。



本学への総合的な満足度は、90.3%が満足（「満足だった」+「どちらかというと満足だった」）と回答しており、卒業生の本学に対する満足度は高いといえる。

10 成長実感

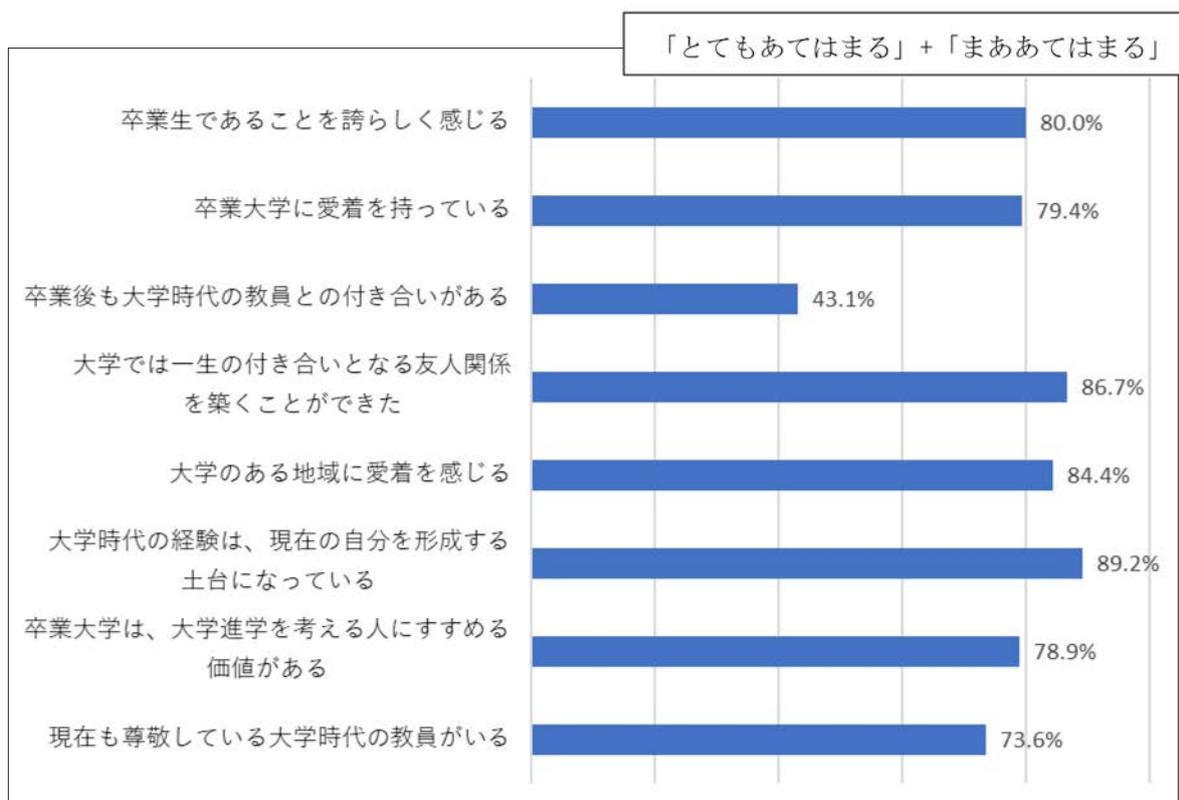
設問 大学時代のさまざまな活動を通じて、あなたはどの程度成長したと感じますか。



大学時代の成長実感は、94.1%が成長した（「とても成長した」+「まあ成長した」）と回答しており、9割以上の卒業生が成長実感を持っていることが確認できた。しかし、5%弱の卒業生は、成長実感を持っていないことから、分析検証の必要性がある。

11 卒業大学への愛着

設問 卒業した大学について、現在のお気持ちや状況にあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。



調査項目のうち、4項目において80%を超えており、これらのことから、卒業生の本学に対する愛着度は高いことが明らかである。

【就職先調査】

(1) 趣旨・目的

卒業生調査と同様に、本学の大学生活を通して、卒業までに身に付けてほしい「10+1の能力」について、卒業生がどのくらい身に付けているか、客観的な視点から検証することを目的として実施した。

(2) 取組内容

- 1) 期間 令和2年2月12日～令和2年3月20日
- 2) 対象 平成30年度学部卒業生の就職先（卒業生本人より調査への同意が得られたもの）
※医学部医学科卒業生の就職先を除く

3) 調査内容

①「ハイ・パーフォーマー」に求める能力・資質（10+1の能力・資質から選択）、②調査対象となる卒業生の10+1の能力・資質の評価、③「大学在学中に身につけてほしいこと」を、文系・理系の別に10+1の能力・資質から上位3つ列挙、④10+1の能力以外に、「大学在学中に身につけてほしいこと」（自由記述）、⑤高知大学の教育に対する意見等

4) 調査手順

就職先調査への同意があった卒業生の就職先へ、調査の概要、調査への協力依頼、アンケートサイトへのURL、認証用ID・パスワードを含む郵便物を送った。会社窓口（人事部門を想定）への依頼文と、アンケートの回答者（卒業生の直属の上司を想定）への依頼文を分け、アンケートサイトの認証用ID・パスワードは回答者以外には見られないよう配慮した。

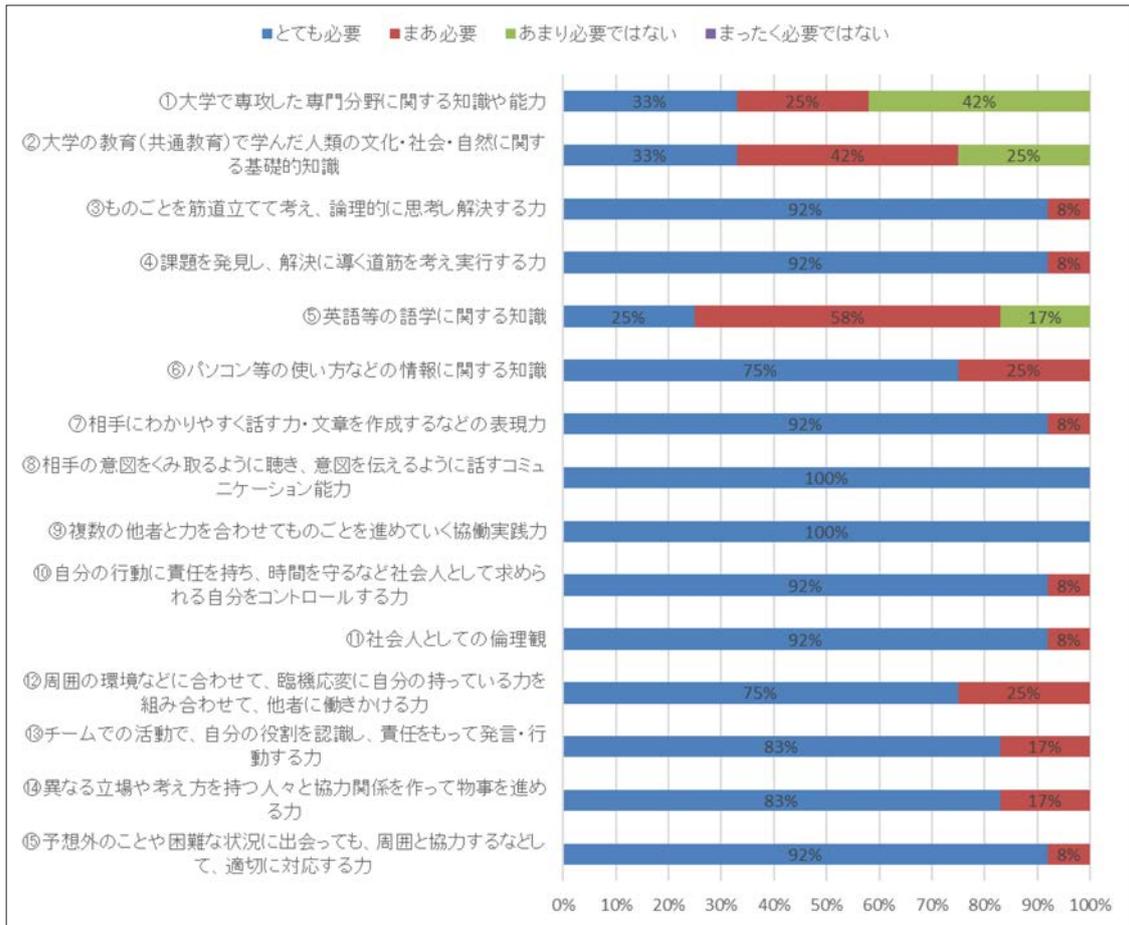
(3) 結果

1) 回答状況

就職先調査依頼数（卒業生の承諾回答数）	就職先調査回答数
30	12

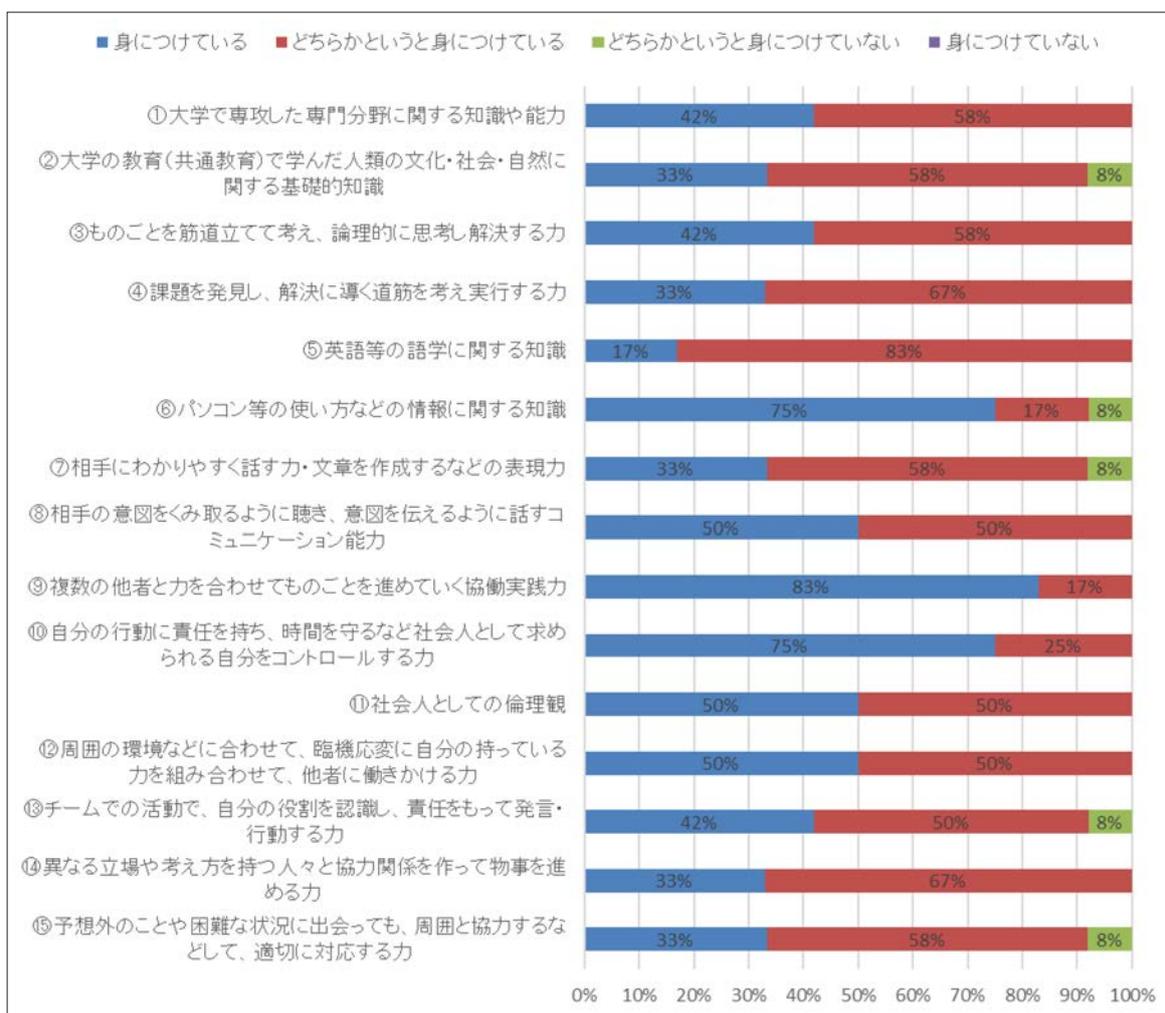
2) 回答結果

設問 貴社（貴校）において、「ハイ・パーフォーマー」と呼ばれる優秀な社員（教員）には、次のような能力が必要ですか。あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。



就職先の上司が求めるハイ・パーフォーマーの要件として、⑧「相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力」、⑨「複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力」の2つについては、回答者全員が「とても必要である」と回答した。この2項目については、昨年度の就職先調査においても回答者全員がとても必要であると答えており、現代社会において求められる能力であると捉えられる。

設問 「調査対象になっている高知大学の卒業生」は、次のような力を身につけていますか。
 あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。



「調査対象になっている高知大学の卒業生」の能力評価では、下記の10の能力について、回答者全員が「身につけている」または「どちらかというとな身につけている」と評価している。

①大学で専攻した専門分野に関する知識や能力、③ものごとを筋道立てて考え、論理的に思考し解決する力、④課題を発見し、解決に導く道筋を考え実行する力、⑤英語等の語学に関する知識、⑧相手の意図をくみ取るように聴き、意図を伝えるように話すコミュニケーション能力、⑨複数の他者と力を合わせてものごとを進めていく協働実践力、⑩自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力、⑪社会人としての倫理観、⑫周囲の環境などに合わせて、臨機応変に自分の持っている力を組み合わせて、他者に働きかける力、⑭異なる立場や考え方を持つ人々と協力関係を作って物事を進める力

2.3.4.2 リフレクション・セメスターにおけるインターンシップふりかえりセミナーの実施

(1) 趣旨・目的

卒業時の質保証に向けた形成的評価の節目として、3年次第1学期に、リフレクション・セメスターを設け、学生総合支援センターの教職員とアドバイザー教員が支援し、学修成果についての自覚を促すことで、自分の強みを意識して社会に貢献できる力の集大成に向けて準備する。

(2) 取組内容

共通教育科目（教養科目・キャリア形成支援分野）「インターンシップ実習」の授業において、インターンシップの事前・事後学習の時間に、大学生活の振り返りとそれに基づいたインターンシップ期間の目標設定、インターンシップの振り返りを行った。

【インターンシップ事前指導】

1) 令和元年7月20日（土）受講者14名

<到達目標>

- 1) インターンシップと経験学習の基礎知識を習得する。
- 2) インターンシップの目的を理解した上で、自らの目標を立てる。
- 3) 2) で立てた目標を他者と共有することで、自らの目標を多面的に分析し改善する。

<セミナーの内容>

はじめにインターンシップ及び経験学習の基礎知識を教授した。次に、各自がこれまでの大学生活を振り返り、さらに自らのキャリアビジョンを踏まえた上で、本授業におけるインターンシップの3つの目的に沿った具体的な目標を設定した。後半では、それぞれが立てた目標を少人数のグループ内で発表し、他の学生及び教員からフィードバックを得ることで、目標をブラッシュアップし、質の高い学びに繋げた。

【インターンシップ事後指導】

令和元年10月5日（土）受講者14名、10月24日（木）受講者1名、10月30日（水）受講者2名

<到達目標>

- 1) インターンシップ期間中の自分のモチベーションやインターンシップ先での活躍度等について振り返る。
- 2) インターンシップ参加前に立てた3つの目標について、参加前と参加後の状態の変化や、目標達成のために行った働きかけの有効性を検証する。
- 3) インターンシップの経験から得た気づきを振り返り、それを踏まえた今後の行動計画を立てる。

<セミナーの内容>

学生が、自らの経験と向き合いより客観的な自己把握ができるよう、モチベーション曲線を用いた振り返りを実施した。次に、事前指導のセミナーで立てた各自の3つの目標について、参加前と参加後の状態の変化を測定し、目標達成のために行った働きかけの有効性を検証した。

最後に、自身のインターンシップ経験と振り返りの内容を、少人数のグループ内で発表し、経験を言語化し他者に語るという、リフレクションの仕上げを行った。

(3) 結果

インターンシップという、今後のキャリア形成にとって重要な経験を振り返るなかで、学生は自身の経験を言語化し、他者に語ることによって、より質の高い振り返りができるようになった。そのことは、最後のプレゼンテーションからうかがえる。

また受講者に行ったアンケート調査（n=11）では、「事前指導は、インターンシップに行く際にどのくらい役に立ちましたか？」の質問に対して、2名の学生が「とても役に立った」、9名の学生が「役に立った」と回答した。自由記述の回答から、インターンシップに行く目的

や目標を事前指導で明確にすることで、インターンシップがより実りあるものになったことがうかがえた。「事後指導は、インターンシップを振り返るのにどのくらい役に立ちましたか？」の質問に対しては、4名の学生が「とても役に立った」、7名の学生が「役に立った」と回答した。同様に自由記述の回答を見ると、特に他者の経験や学びと比較することで自らの強みと弱みを発見したり、学生や教員からのフィードバックを得たりすることでより深い振り返りを行うことができたことが示唆された。

このように、リフレクション・セメスターを3年次の第1学期に設定することは、学生が自身と向き合い、より客観的な自己評価と、それに基づいた今後の目標設定ができるようになるよう、学生を支援するために有効であることが確認された。

2.3.4.3 大学教育の質保証に関するアンケートの実施

(1) 趣旨・目的

大学の質保証に関わる目標数値を設定しており、その進捗状況を検証するために、学生の授業外学修時間、大学教育や学生生活への満足度等の調査を行い、学生の学修状況について明らかにすることを目的とする。

(2) 取組内容

- 1) 調査時期 令和元年9月25日(水)～令和元年12月15日(日)までの期間
- 2) 対象 全学部・全学年(学部生)
- 3) 調査方法 Microsoft Office 365 のアンケート機能Formsを使い、Webアンケートとして実施した。
- 4) 調査内容
 - ①在学中に力を入れたい・チャレンジしたいこと (①のみ最終学年は対象外)
 - ②授業外学修時間 ③学修に対する意欲 ④e-ポートフォリオ活用状況
 - ⑤本学で育成を目指す10+1の能力に対する授業の効果測定
 - ⑥学びへのモチベーションに寄与する経験 ⑦大学教育や学生生活への満足度
 - ⑧英語力を身に付けたいレベル ⑨卒業後の進路希望
 - ⑩就職を希望する地域とその理由 ⑪大学教育や学生生活における成長実感

(3) 結果

1) 学部別・学年別回収率

学部別・学年別の回収率は下記のとおりである。

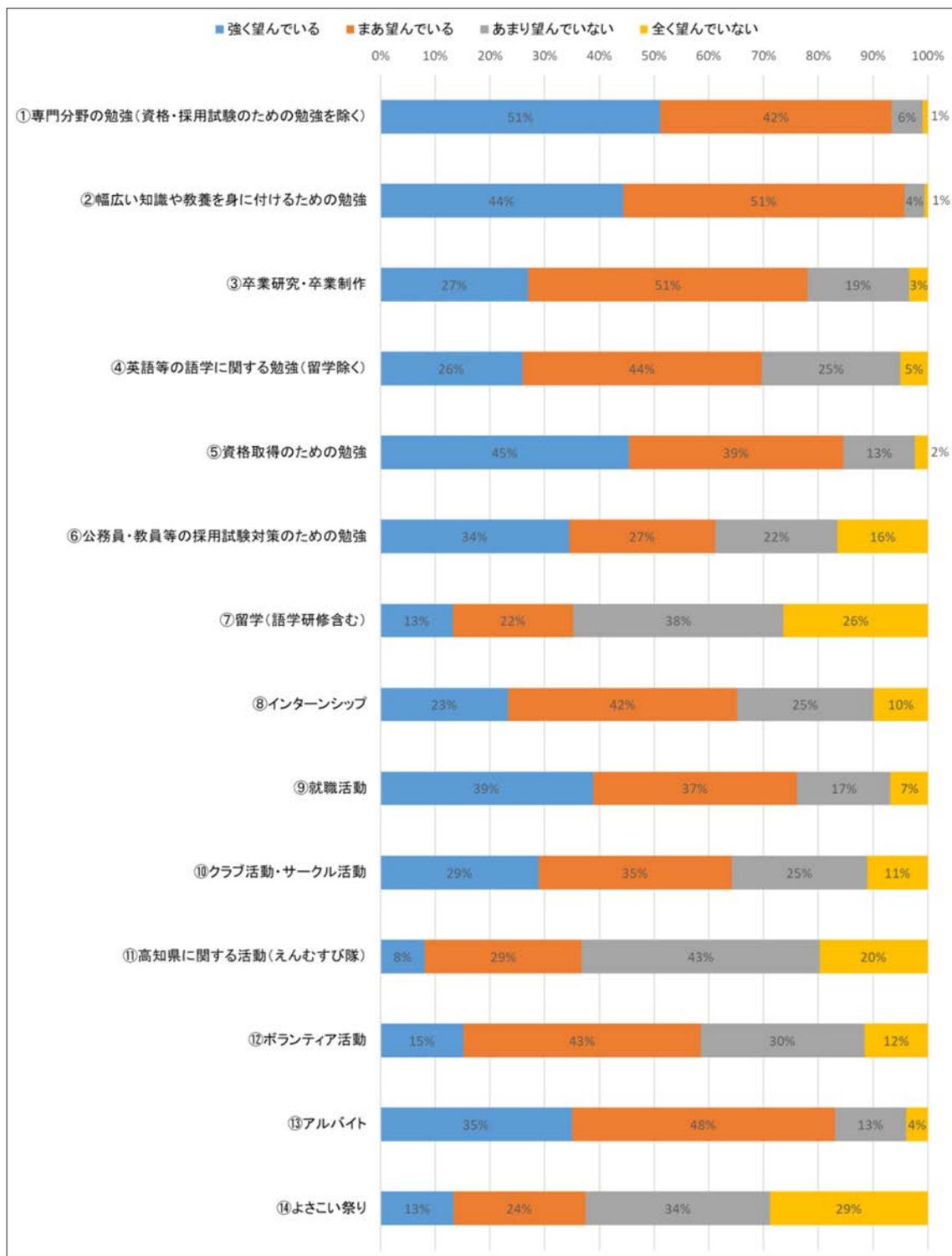
学部	回答数	在籍者数	回答率
人文学部・人文社会科学部	589	1214	48.5%
教育学部	509	556	91.5%
理学部・理工学部	571	1064	53.7%
医学部	399	975	40.9%
農学部・農林海洋科学部	509	830	61.3%
地域協働学部	127	249	51.0%
土佐さきがけプログラム	37	55	67.3%
総計	2751	4943	55.7%

※在籍者数は令和元年10月1日現在

2) 調査内容の結果

① 在学中に力を入れたい・チャレンジしたいこと

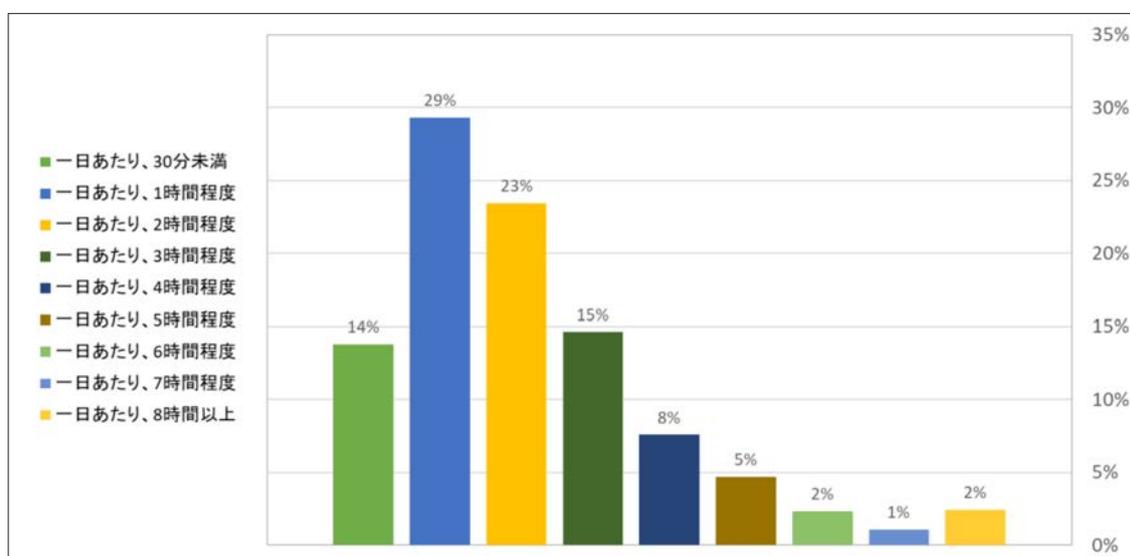
設問 あなたが、卒業時まで力を入れたい・チャレンジしたいことについて教えてください。次の①～⑭それぞれについて、最も近いものを選んでください。（この設問のみ、最終学年4（6）年は対象外）



卒業時まで力を入れたい、チャレンジしたいことについて、あらかじめ14の項目を設定し、調査を行った。「強く望んでいる」「まあ望んでいる」の割合が高いのは、1位が「②幅広い知識や教養を身に付けるための勉強」、2位が「①専門分野の勉強（資格・採用試験のための勉強を除く）」、3位が「⑤資格取得のための勉強」、4位に、「⑬アルバイト」、5位に「③卒業研究・卒業制作」と続いていることが確認できた。

② 授業外学修時間

設問 令和元年度のあなたの一日あたりの授業外での学修時間（授業（実験・実習を含む）の調べものや予習・復習、提出課題等の作成、グループでの学修、自主的な勉強等）について、最も近いものを一つ選んでください。

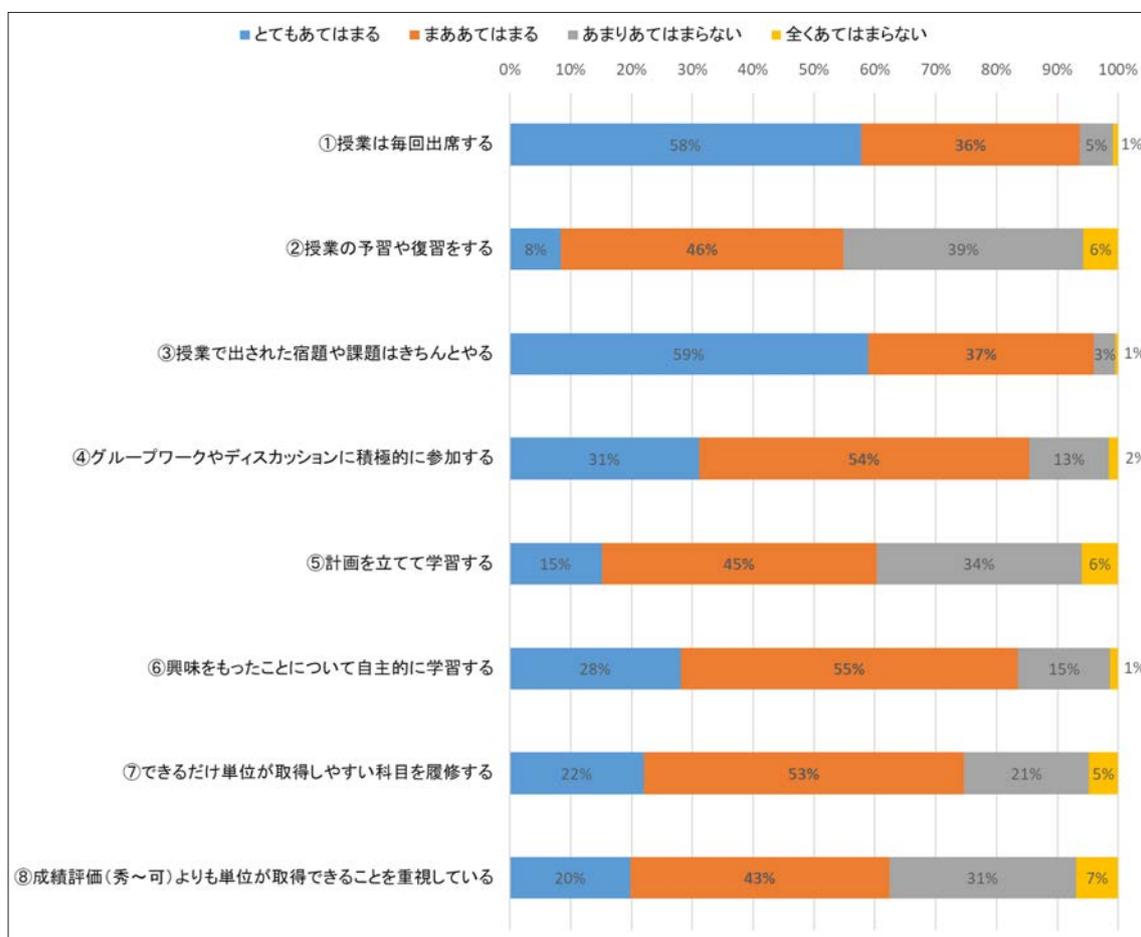


* 「8時間以上」と「30分未満」はそれぞれ「8時間」、「15分」に換算して計算。

学生の一日あたりの学修時間は、1時間程度が最も多く、次いで2時間程度、3時間程度と続く。一方、30分未満が、14%程度いることも明らかになった。一日あたりの平均時間は、2.2時間であった。

③ 学修に対する意欲

設問 あなたは大学での授業に、普段からどのように取り組んでいますか。次の①～⑧それぞれについて、最も近いものを選んでください。



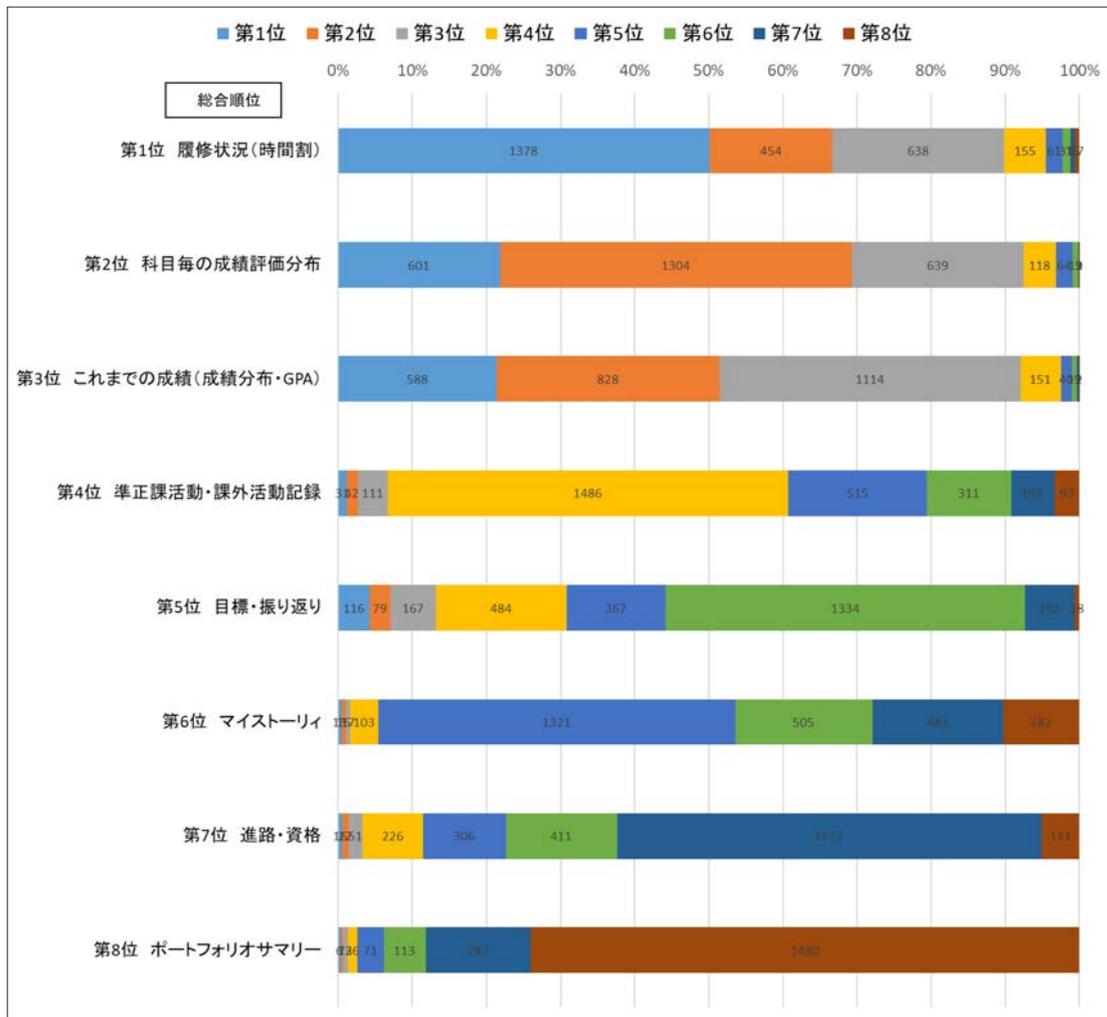
学生の学修への取組について、調査を行った。「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」と「授業は毎回出席する」は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の割合が90%を超えており、「グループワークやディスカッションに積極的に参加する」「興味をもったことについて自主的に学修する」も80%以上の学生があてはまると回答している。この結果から、本学の学生は、授業については、まじめに取り組んでいると自己評価していることが明らかである。

しかし、「授業の予習や復習をする」、「計画を立てて学習する」ことについては、あてはまると回答した割合は50～60%と高い数値ではない。したがって、授業外学修時間の拡大に向けて意図的な取組がよりいっそう求められることが示唆された。

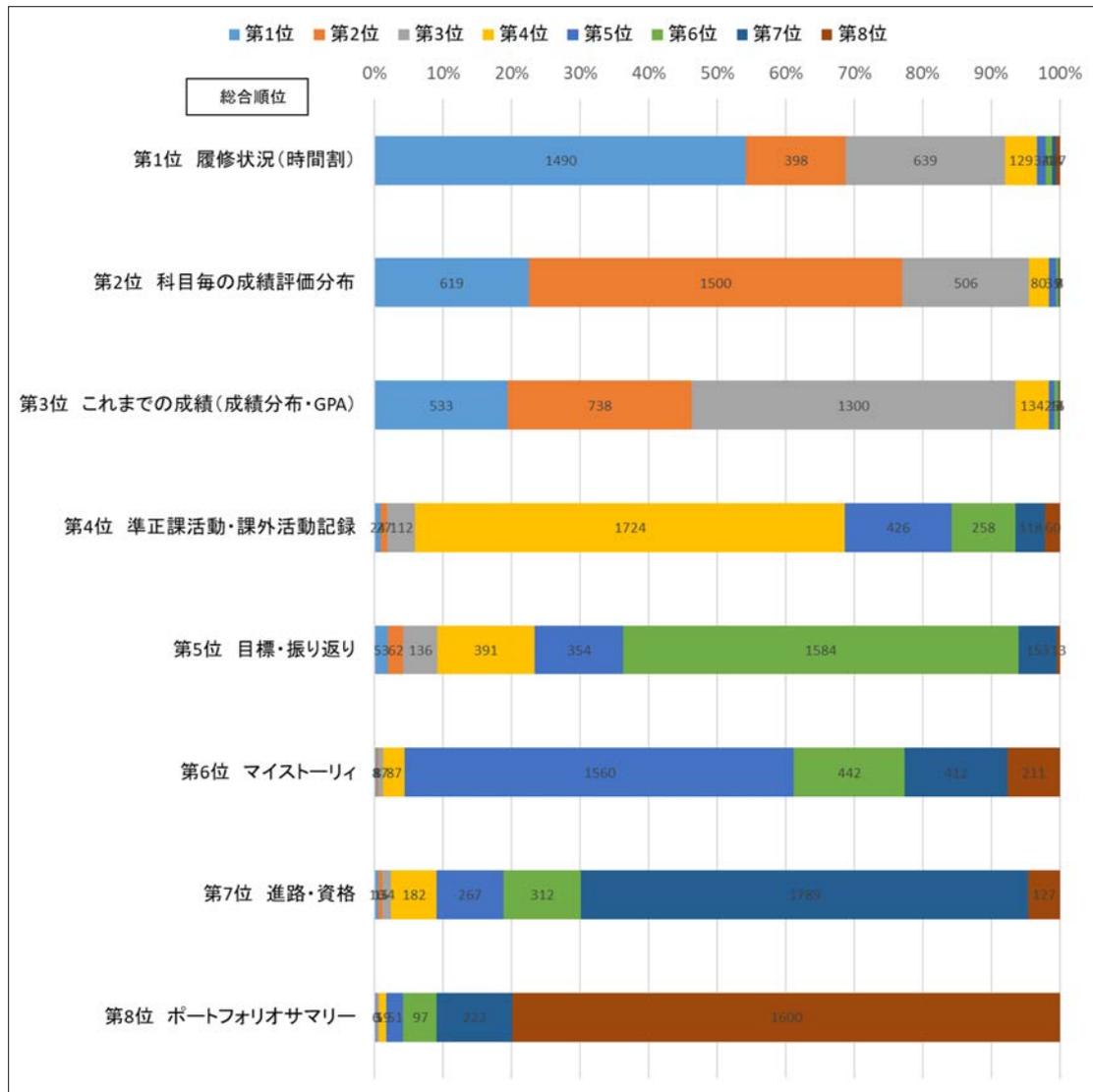
また、「できるだけ単位が取得しやすい科目を履修する」、「成績評価(秀～可)よりも単位が取得できることを重視している」にあてはまると答えた学生が6割～7割程度いることがうかがえる。

④ e-ポートフォリオ活用状況

設問 e-ポートフォリオの活用状況について教えてください。次の8つの機能をよく使っている順に並び替えてください。



設問 e-ポートフォリオの活用状況について、さらに教えてください。次の8つの機能を役立っている順に並び替えてください。

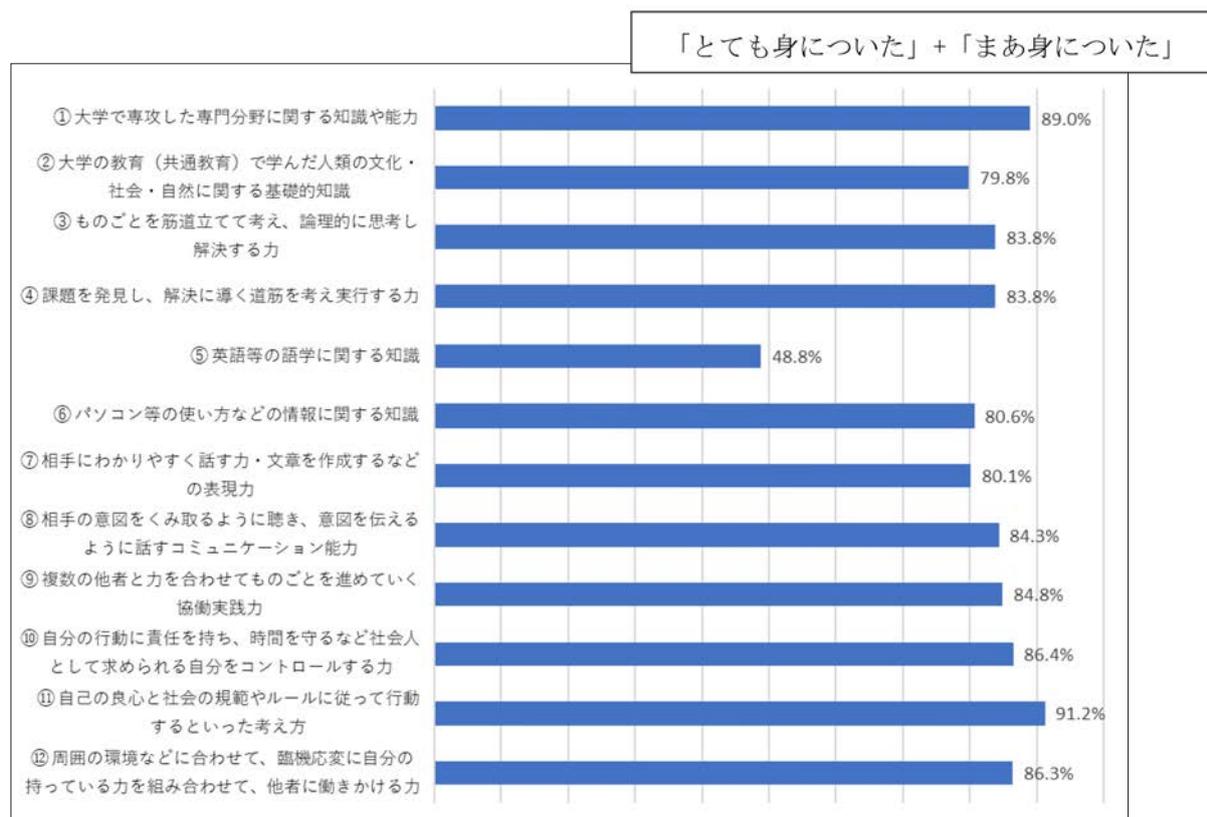


e-ポートフォリオの活用状況及び役立っている機能について確認したところ、上位から、「履修状況（時間割）」、「科目毎の成績評価分布」、「これまでの成績（成績分布・GPA）」であり、学生は自己の学修状況、学修成果については、興味関心を持っていることがうかがえる。

一方で、学生自身が入力する事項に対する役立ち感は低く、大学から与えられたデータは確認するが、自己で考え入力する事項への興味関心は、低いことが示唆された。これは、e-ポートフォリオの運用上の大きな課題であり、今後、自己記述部分の入力指導・支援に取り組む必要がある。

⑤ 本学で育成を目指す10+1の能力に対する授業の効果測定

設問 本学の授業（受講した授業全般について）を受けて、身に付いたと思う能力について教えてください。次の①～⑫それぞれについて、最も近いものを選んでください。

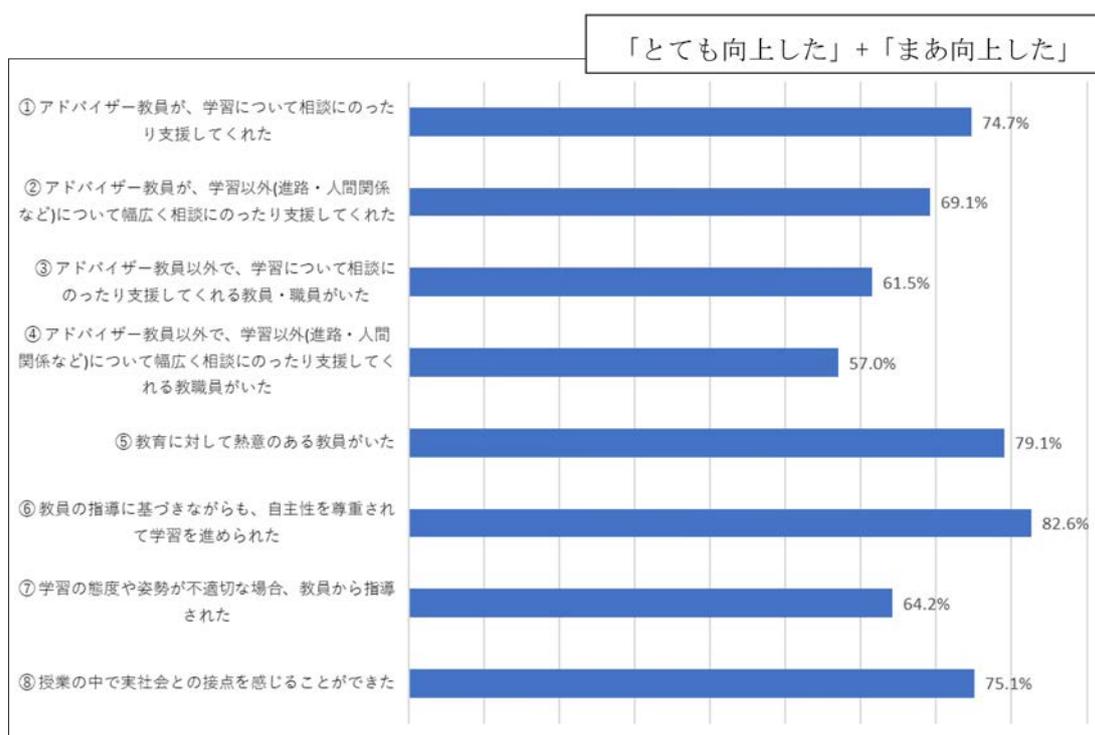


本学が目指している「10+1の能力」の育成に関する項目であり、授業を通して学生自身が身に付いていると自己評価したものである。上位は、「自己の良心と社会の規範やルールに従って行動するといった考え方」「大学で専攻した専門分野に関する知識や能力」「自分の行動に責任を持ち、時間を守るなど社会人として求められる自分をコントロールする力」であった。一方、下位にあるのは、「英語等の語学に関する知識」であり、昨年度と同様の結果となった。

⑥ 学びへのモチベーションに寄与する経験

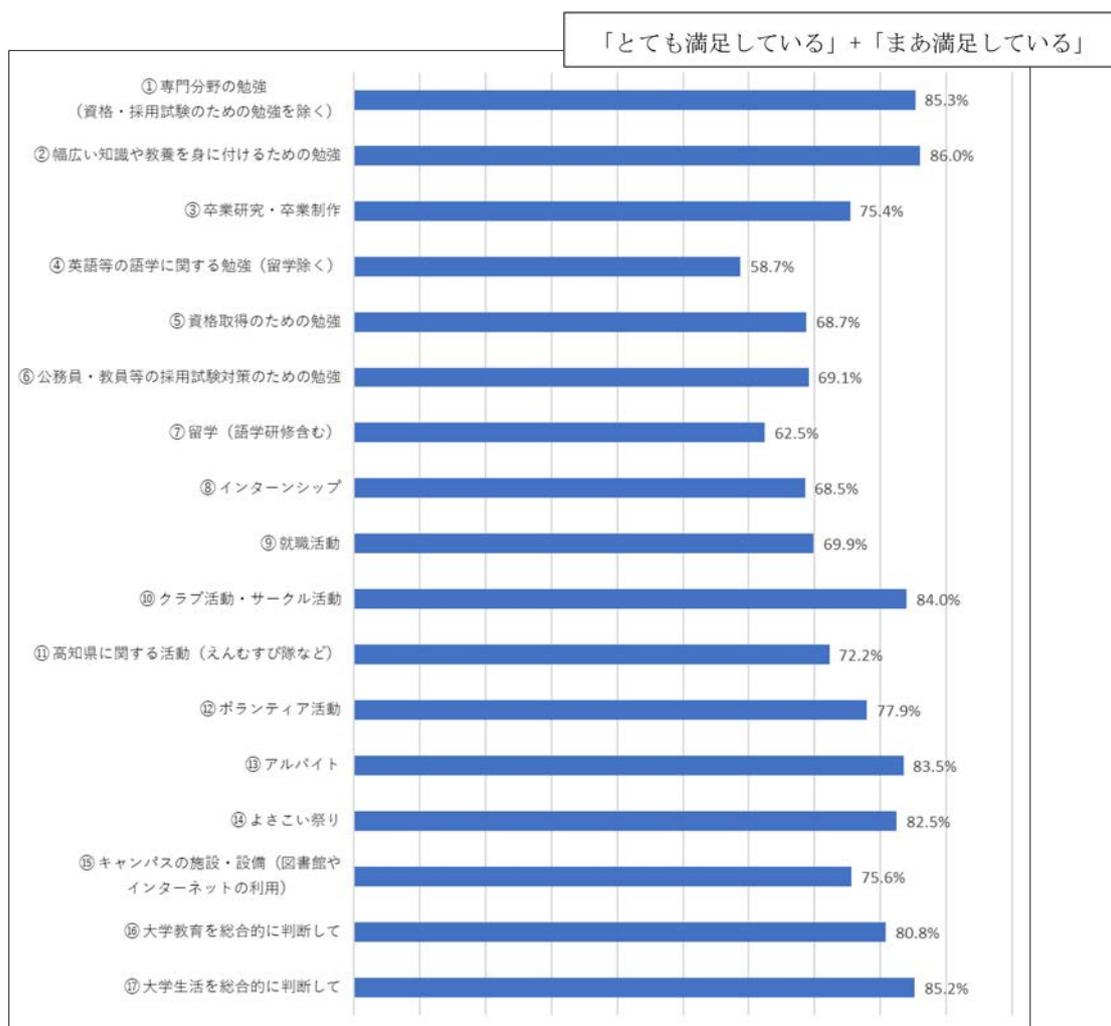
設問 本年度（今年の4月以降）に、次のような大学での経験は、あなたの学びへのモチベーションを向上させましたか。次の①～⑧それぞれについて、最も近いものを選んでください。

学びへのモチベーションを向上させた経験については、「教員の指導に基づきながらも、自主性を尊重されて学習を進められた」が最も高く、次いで「教育に対して熱意のある教員がいた」、「授業の中で実社会との接点を感じることができた」、「アドバイザー教員が、学習について相談にのったり支援してくれた」であり、昨年度と同様に、教員の存在と社会との接点を持つことが学びのモチベーション向上につながっている。



⑦ 大学教育や学生生活への満足度

設問 入学してからこれまでの大学教育や学生生活に対する満足度について教えてください。次の①～⑰それぞれについて、最も近いものを選んでください。



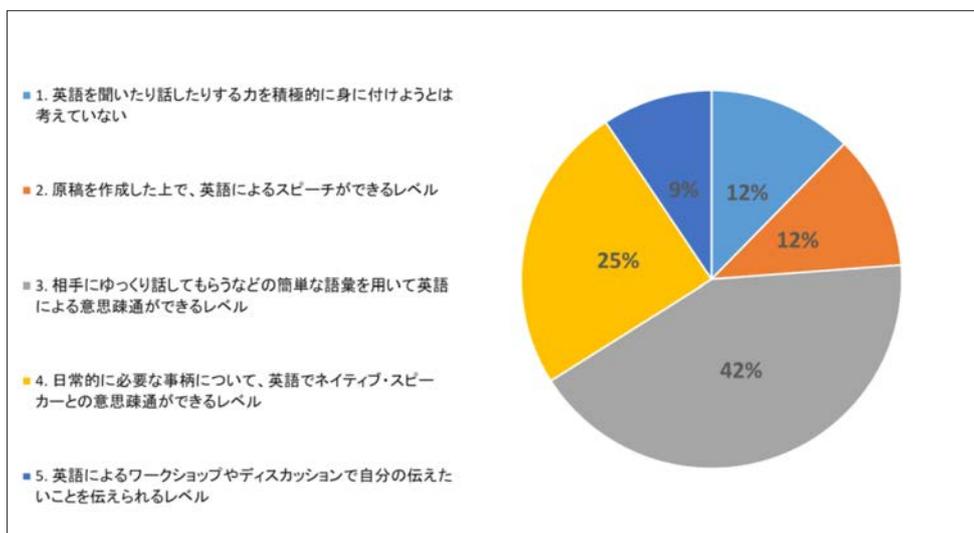
※「経験していない」を除いて割合を集計している。

大学教育や学生生活への満足度では、「専門分野の勉強」と「幅広い知識や教養を身に付けるための勉強」に満足している学生が85%を超えており、教育への満足度が高い結果となった。一方で、「英語等の語学に関する勉強」や「留学」に関する満足度はその他の項目と比べて低く、同調査で本学の授業で身についたと思う能力について尋ねた結果 (p.56) や、卒業生調査において大学教育で身についたと思う能力を尋ねた結果 (p.43) と同様に低い割合となっている。

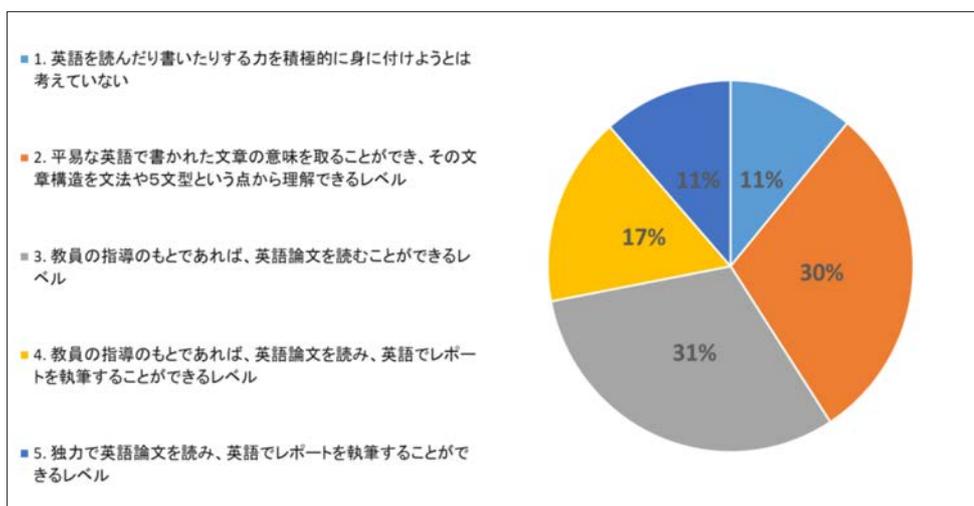
大学教育と大学生活の総合的な満足度については、どちらも80%を超えており、本学の学生が総合的には満足していることがうかがえる。

⑧ 英語力を身に付けたいレベル

設問 あなたが、在学中に身に付けたいと考えている英語力（「聞く」・「話す」）のレベルについて、最も近いものを1～5のうちから一つ選んでください。



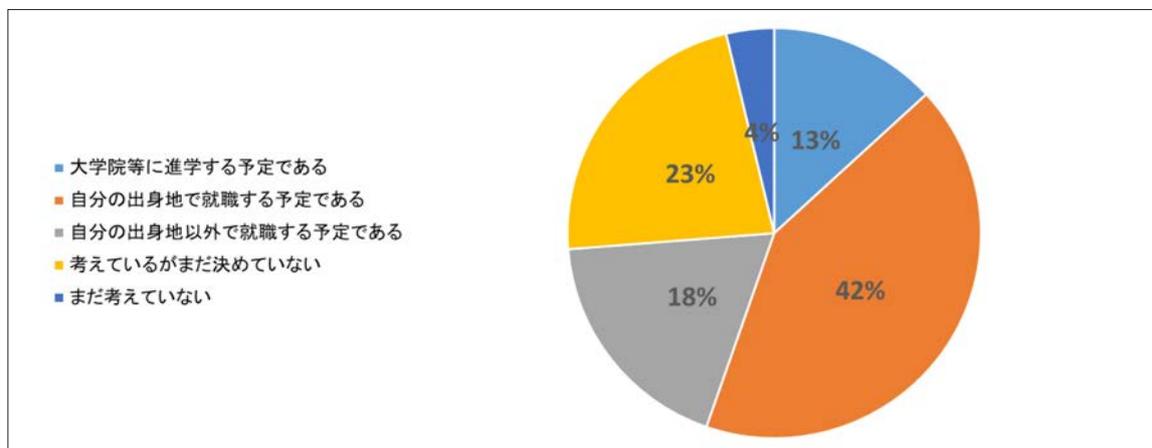
設問 あなたが、在学中に身に付けたいと考えている英語力（「読む」・「書く」）のレベルについて、最も近いものを1～5のうちから一つ選んでください。



先述した満足度の項目では、英語等の語学に関する勉強や留学に対する満足度は高くなかったが、身に付けたい英語力のレベルをみると、3を選択している学生が多いことから、ある程度の語学力は必要としているものの、ハイレベルな英語力を身に付けたいと考えている学生は少ないことがうかがえる。

⑨ 卒業後の進路希望

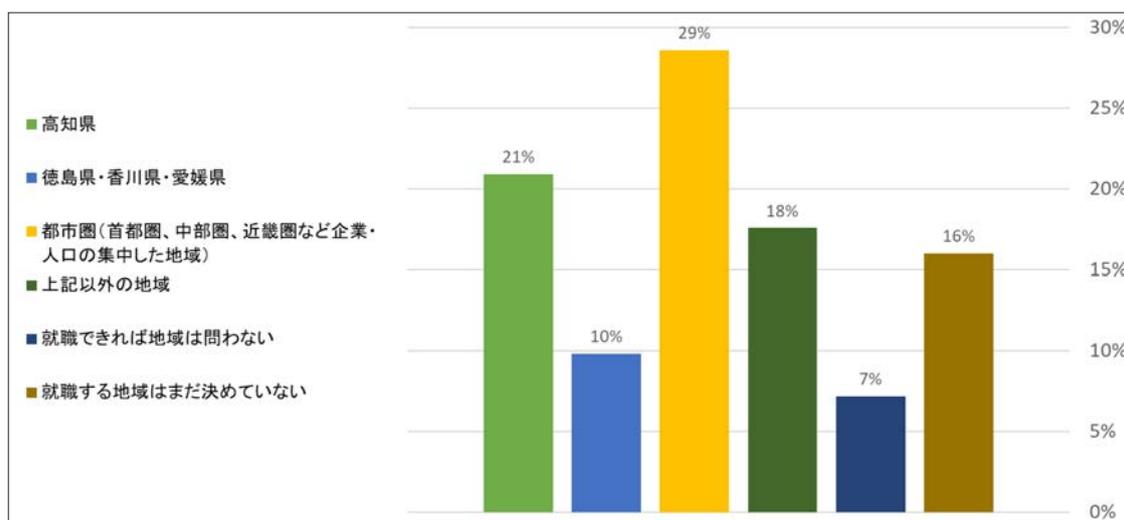
設問 現在考えているあなたの卒業後の進路について、最も近いものを一つ選んでください。



卒業後の進路は、「自分の出身地で就職する予定である」が42%と最も多かった。次に「考えているがまだ決めていない」「自分の出身地以外で就職する予定」と続く。「まだ考えていない」と回答した学生が13%いるが、本データは、全学年の平均値であり1年生のデータも含まれるためである。

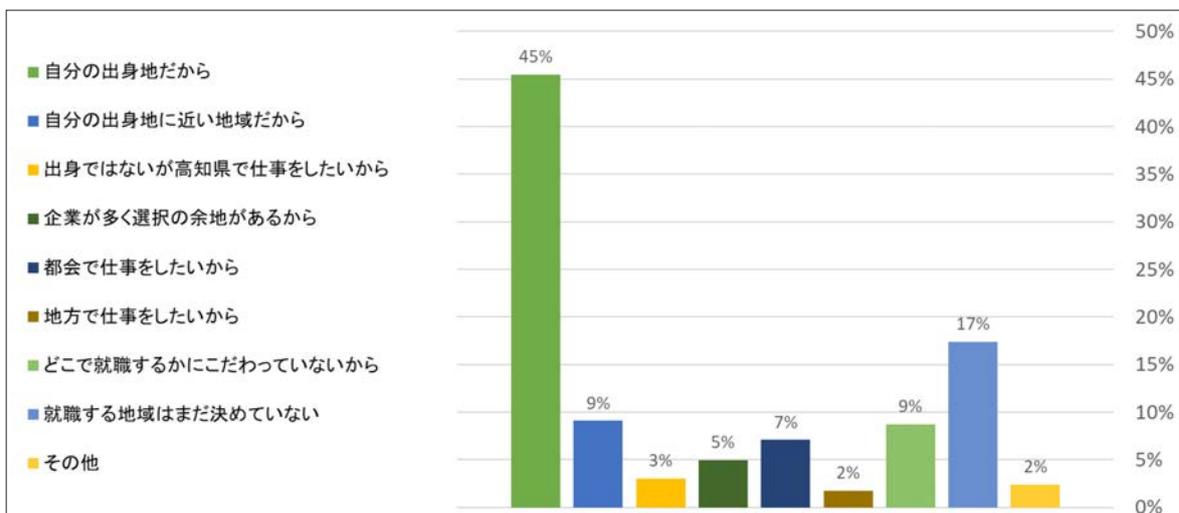
⑩ 就職を希望する地域とその理由

設問 あなたが就職を希望する地域について、最も近いものを一つ選んでください。



就職先を希望する地域であるが、1位は「都市圏（首都圏、中部圏、近畿圏など企業人口の集中した地域）」、2位は「高知県」、3位は、「上記以外の地域」「就職する地域はまだ決めていない」と続く。

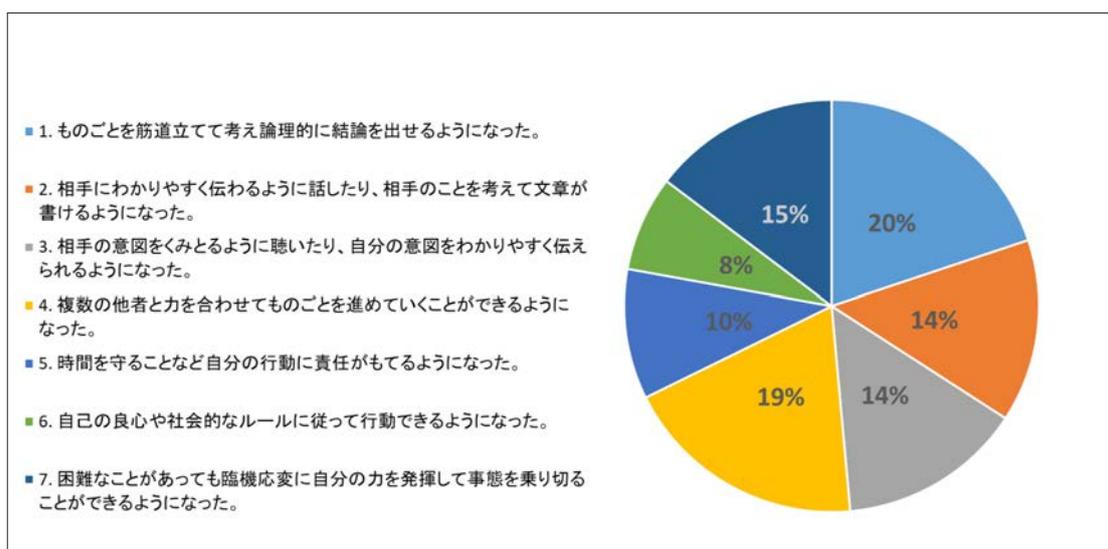
設問 問13で、「就職する地域はまだ決めていない」以外を選んだ人にうかがいます。その理由として、最も近いものを一つ選んでください。



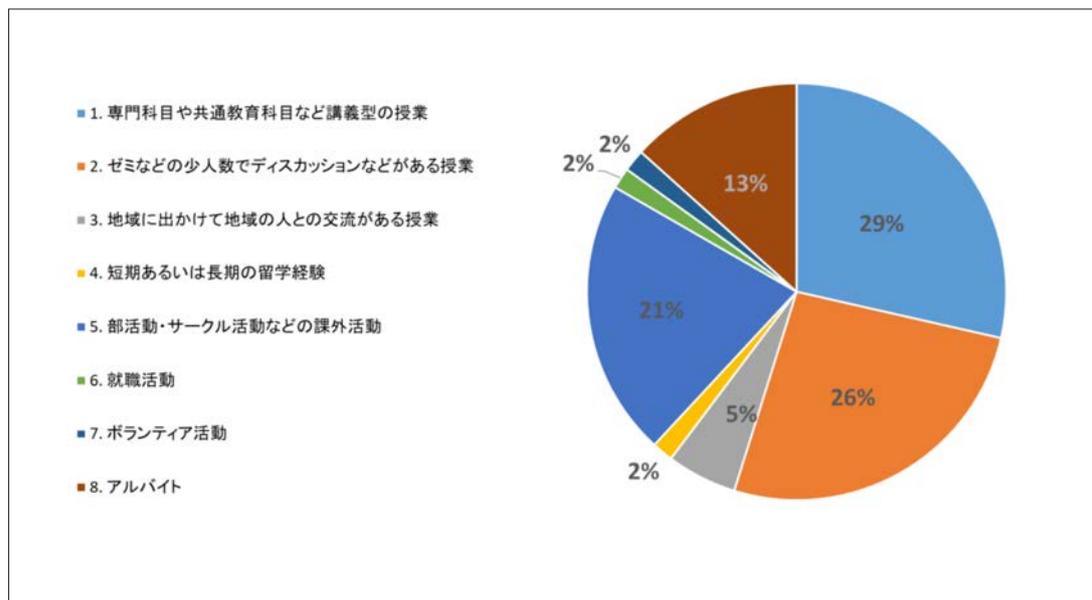
就職する地域を決めている人を対象に確認したところ、1位は、「自分の出身地だから」という回答が多くみられた。出身地への就職希望が強いことが示唆された結果である。しかし、この回答は、全学年を対象とするため、1年、2年生も含まれており、進路については、漠然と考えていることも想定できることから、「自分の出身地」と回答したものが多いと考えられる。

⑪ 大学教育や学生生活における成長実感

設問 高校生までの自分と比べて、大学入学後、一番成長したなと思うことを次のなかから選んでください。



設問 上記の問いで、あなたの成長に一番つながっているのは、大学生活のどのような場面でしょう。次の中から回答してください。



大学教育や学生生活における成長実感についての設問は令和元年度新たに追加したものである。大学入学後に一番成長したと思うものについての設問では、「ものごとを筋道立てて考え論理的に結論を出せるようになった」の回答が最も多く、次いで「複数の他者と力を合わせてものごとを進めていくことができるようになった」であった。一方で、「自己の良心や社会的なルールに従って行動できるようになった」と回答した割合は最も低かった。

成長につながった大学生活での場面については、「専門科目や共通教育科目など講義型の授業」と「ゼミなどの少人数でディスカッションなどがある授業」が上位となっており、大学での授業が学生の成長実感に大きく影響していることが確認できた。

2.3.4.4 学修成果と学生生活のデータの分析及び検証

(1) 趣旨・目的

AP事業で定めた指標を用いて、高知大学での学生の成長を、データから検証する。また、成長に結びつく要因を、データを用いて分析する。

(2) 取組内容

以下の2種類の分析を実施した。

- A. 令和元年度在学生の学年別に見た能力、経験、満足度の推移
- B. 学修成果と学生生活データ間の相関

(3) 結果

- A. 令和元年度在学生の学年別に見た能力、経験、満足度の推移

【調査対象と調査項目】

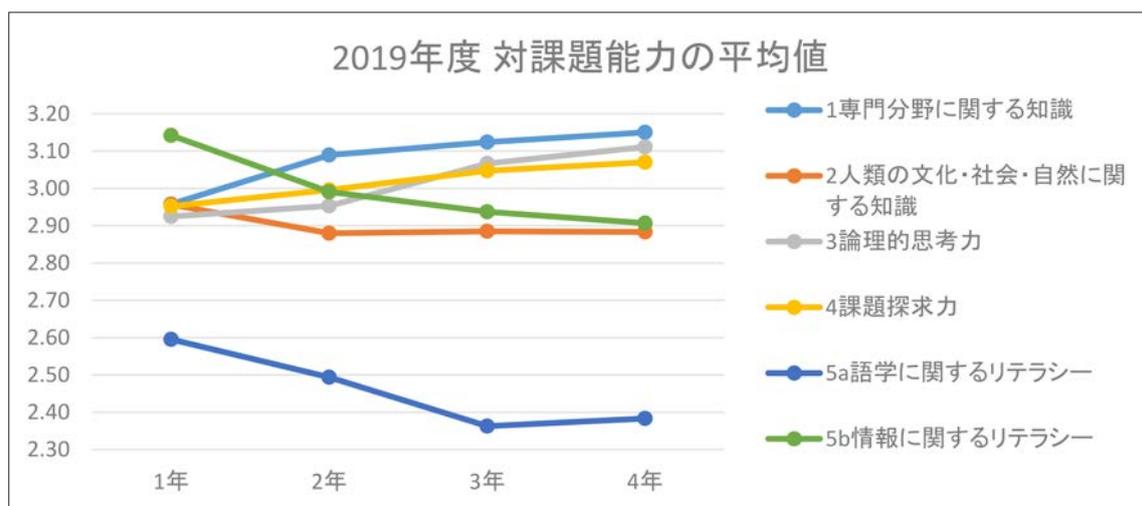
2019年度 大学教育の質保証に関するアンケートの回答（対象者：1～6年生4,943名、回答数：2,751、回答率：55.7%）をもとに、以下の項目について、各学年の平均値を用いてグラフ

化した。

- ・本学で育成を目指す10の能力に対する授業の効果測定
- ・大学教育や学生生活への満足度
- ・授業外学修時間

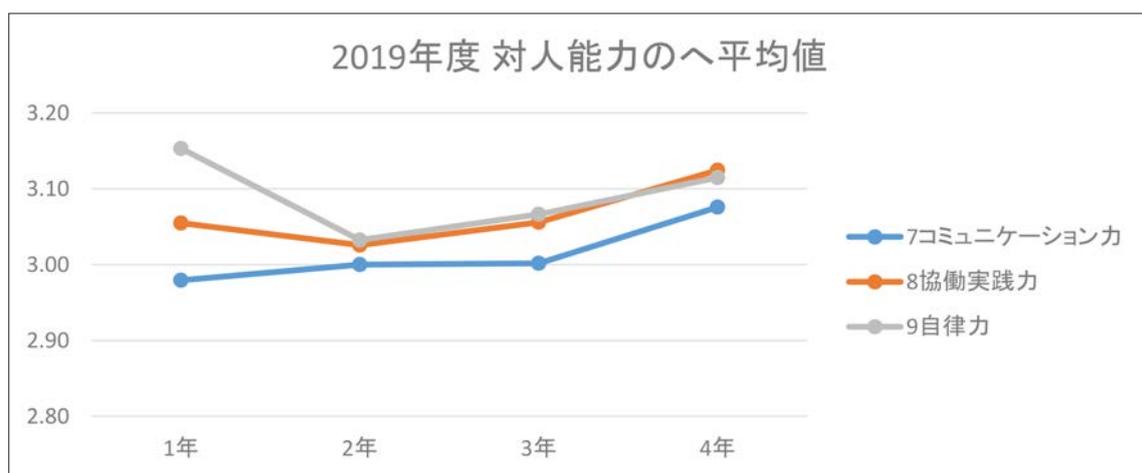
それぞれのグラフを掲載する。縦軸の目盛がグラフ毎に異なるので注意されたい。

【10+1の能力（対課題）】



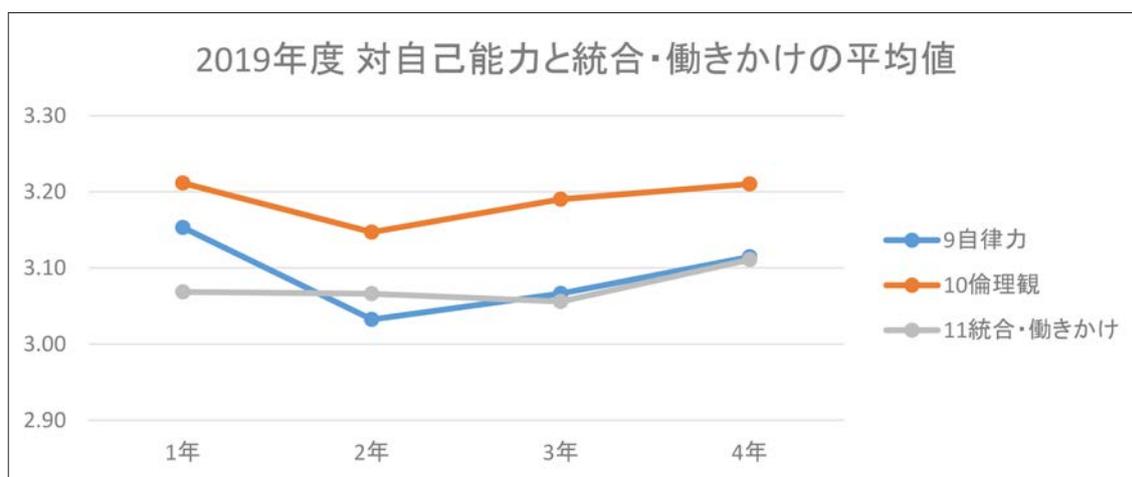
専門分野に関する知識と、論理的思考力が順調に伸びている様子が確認できる。

【10+1の能力（対人）】



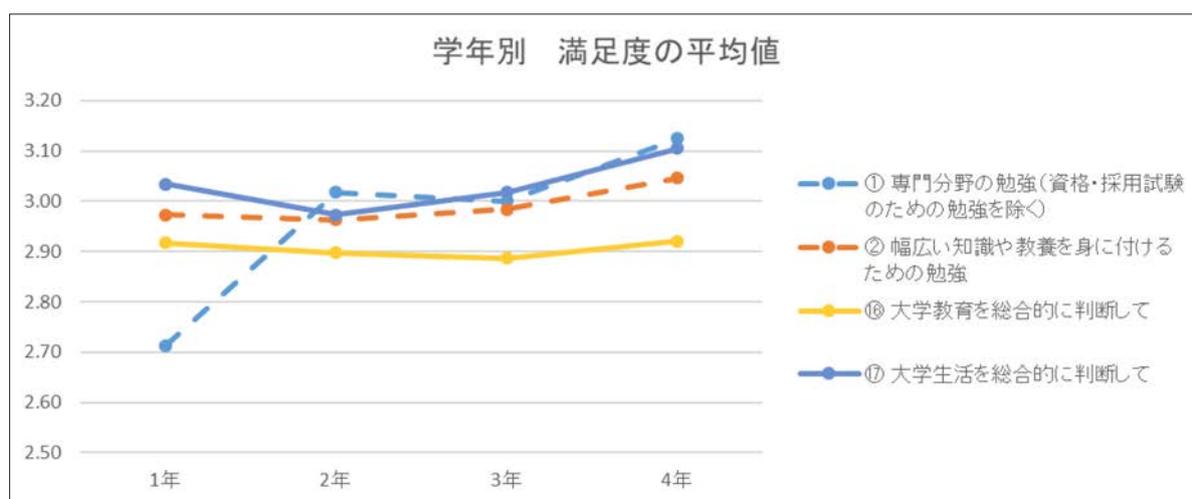
協働実践力と自律力が、2年生で一度大きく落ち込んだ後、回復している。大学での経験により、入学時に持っていた「モノサシ」を定義し直す必要に迫られたのではないかと推測される。

【10+1の能力（対自己、統合・働きかけ）】



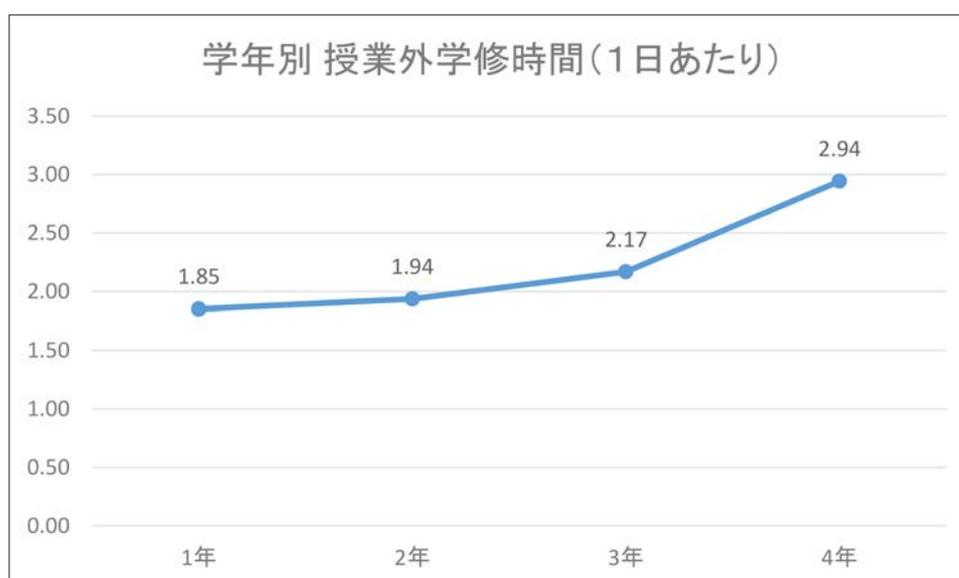
対自己の能力は、2年生で一度落ち込んでいる。統合・働きかけは、3年生までは伸び悩んでいるが、4年生で伸びている。

【満足度】



質保証アンケートでは、17項目の満足度を調査しているが、「大学教育を総合的に判断して」、「大学生生活を総合的に判断して」、「専門分野の勉強」、「幅広い知識や教養を身に付けるための勉強」の結果のみ示した。専門分野の勉強は順調に伸びている一方、その他の満足度は1年生から2年生で落ち込んでいる様子が確認できる。

【授業外学修時間】



3年生から、授業外学修時間が伸びていることが確認できる。

B. 学修成果と学生生活データ間の相関

学生の諸能力の成長を促す要因を分析するため、学修成果と学生生活に関するデータの項目間の相関係数を調べた。

【調査対象】

- ・ 2019年度高知大学学部生4,975名（通算GPAが算定されない3名を除いた人数）

【調査データと対象学年】

以下の①～④の調査のデータを用いた。セルフ・アセスメントと大学生基礎力レポートは、1、3年生のみが受検している点に注意されたい。

- ① 通算GPA（2019年度1学期までの通算）：1～6年生

- ② セルフ・アセスメント：1、3年生

入学年度	受検年次	
	1年次	3年次
2017年度	○	○
2019年度	○	

③ 大学生基礎力レポート：1、3年生

入学年度	受検年次	
	1年次	3年次
2017年度	○	○
2019年度	○	

④ 2019年度 質保証アンケート：1～6年生

これらの調査データから、数値データに置き換え容易な102項目の間の相関を調べた。

【相関行列の概要】

102の項目間の相関を、3つに分けて分析した。認められた中程度以上（相関係数の絶対値 ≥ 0.4 ）の相関から、特徴的なものを紹介する。括弧書きした数値は相関係数の値である。

相関行列Ⅰ. 通算GPA, セルフ・アセスメント, 大学生基礎力レポートの相関

[セルフ・アセスメントと大学生基礎力レポートの相関]

セルフ・アセスメントと大学生基礎力レポートの間には、下表のように相関が見られた。

	2017の1年基礎力	2019の1年基礎力	2019の3年基礎力
2017の1年セルフ	(a) 中程度の相関	—	弱い相関のみ
2019の1年セルフ	—	(b) 中程度の相関	—
2019の3年セルフ	弱い相関のみ	—	(c) 中程度の相関

表中でa～cを付した中程度の相関を、以下に詳しく述べる。

(a) 2017年入学生の1年生のセルフ・アセスメントと、1年生の大学生基礎力レポートとの間には、以下の項目間で中程度の相関が認められた。

セルフ・アセスメント	大学生基礎力レポート
論理的思考力 (0.42) 課題解決力 (0.45) 表現力 (0.43) コミュニケーション力(0.42) 協働実践力(0.42) 自律力(0.54) 統合・働きかけ(0.52)	協調的問題解決力・行動評価総合

(b) 2019年入学生の1年生のセルフ・アセスメントと、1年生の大学生基礎力レポートとの間には、以下の項目間で中程度の相関が認められた。

セルフ・アセスメント	大学生基礎力レポート
協働実践力	協調的問題解決力・行動評価総合 (0.46)
自律力	進路総合 (0.41) 協調的問題解決力・行動評価総合 (0.52) 学びへの取り組み (0.43)

(c) 3年生のセルフ・アセスメントと、3年生の大学生基礎力レポートの間では、以下の項目間で中程度の相関が認められた。

セルフ・アセスメント	大学生基礎力レポート
論理的思考力(0.45) 課題解決力(0.47) コミュニケーション力(0.43) 協働実践力(0.42) 自律力(0.49) 統合・働きかけ(0.48)	協調的問題解決力・行動評価総合
自律力(0.41) 統合・働きかけ(0.42)	成長実感総合

[2019年入学生のセルフ・アセスメントの能力間の相関]

・2019年入学生のセルフ・アセスメントでの10+1の能力間の相関行列は下表のようになった。相関行列であるため、対角成分に関して対称になっていることに注意されたい。

- ▶ほとんどの能力間で、中程度の相関が認められた。
- ▶（青囲み）リテラシーは、コミュニケーション力、協働実践力、自律力との相関が弱い。
- ▶（赤囲み）倫理観は、協働実践力、自律力との相関が弱い。

能力番号	能力名	3	4	5	6	7	8	9	10
3	論理的思考力	1.00	0.61	0.41	0.56	0.55	0.46	0.47	0.45
4	課題探求力	0.61	1.00	0.42	0.56	0.53	0.51	0.52	0.44
5	リテラシー	0.41	0.42	1.00	0.51	0.36	0.34	0.36	0.41
6	表現力	0.56	0.56	0.51	1.00	0.59	0.56	0.49	0.49
7	コミュニケーション力	0.55	0.53	0.36	0.59	1.00	0.63	0.53	0.41
8	協働実践力	0.46	0.51	0.34	0.56	0.63	1.00	0.58	0.36
9	自律力	0.47	0.52	0.36	0.49	0.53	0.58	1.00	0.35
10	倫理観	0.45	0.44	0.41	0.49	0.41	0.36	0.35	1.00

相関行列Ⅱ. 質保証アンケートの相関

相関行列の分析では、質保証アンケートのうち、以下の項目を分析対象に用いている。

- ① 在学中に力を入れたい・チャレンジしたいこと（最終学年は実施しない）
- ② 授業外学修時間
- ③ 学修に対する意欲
- ⑤ 本学で育成を目指す10+1の能力に対する授業の効果測定
- ⑥ 学びへのモチベーションに寄与する経験
- ⑩ 大学教育や学生生活への満足度

特徴的な点を以下に紹介する。括弧書きのページ数で、対応する質保証アンケートの詳細が掲載されている箇所を示している。

- ・強い相関が、モチベーションに寄与する経験に関する項目間（p.57参照）に見られた。
 - ▶「アドバイザー教員が、学習について相談にのったり支援してくれた」と「アドバイザー教員が、学習以外（進路・人間関係など）について幅広く相談にのったり支援してくれた」の間（0.79）
 - ▶「アドバイザー教員以外で、学習について相談にのったり支援してくれる教員・職員がいた」と「アドバイザー教員以外で、学習以外（進路・人間関係など）について幅広く相談にのったり支援してくれる教職員がいた」の間（0.80）
- ・「大学教育を総合的に判断して」という満足度項目と中程度以上の相関が認められたのは、以下の項目であった。（p.58参照）
 - ▶①専門分野の勉強（0.48）
 - ▶②幅広い知識や教養を身に付けるための勉強（0.47）
 - ▶⑥公務員・教員等の採用試験対策のための勉強（0.41）
 - ▶⑮キャンパスの施設・設備（0.50）
 - ▶大学生活を総合的に判断して（0.66）
- ・「大学生活を総合的に判断して」という満足度項目と中程度以上の相関が認められたのは、以下の項目であった。（p.58参照）
 - ▶①専門分野の勉強（0.42）
 - ▶②幅広い知識や教養を身に付けるための勉強（0.41）
 - ▶大学教育を総合的に判断して（0.66）
- ・「10+1の能力」に注目すると、次の表のような相関行列となった。（p.56参照）（相関行列では、質保証アンケートでの質問項目を対応する10+1の能力に置き換えている。）
 - ▶リテラシー（5a,5b）は他の項目と相関が弱い。
 - ▶リテラシー以外の対課題能力（1 専門分野に関する知識、2 人類の文化・社会・自然に関する知識、3 論理的思考力、4 課題探究力）では、ほとんどの能力間で相関が認められた。
 - ▶知識・リテラシー以外の項目（3 論理的思考力、4 課題探究力、6 表現力、7 コミュニケーション力、8 協働実践力、9 自律力、10 倫理観、11 統合・働きかけ）間では、ほとんどの能力間で相関が認められた。

	1	2	3	4	5a	5b	6	7	8	9	10	11
1 専門分野に関する知識	1.00	0.42	0.42	0.41	0.31	0.25	0.38	0.32	0.31	0.29	0.29	0.29
2 人類の文化・社会・自然に関する知識	0.42	1.00	0.43	0.40	0.37	0.31	0.35	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29
3 論理的思考力	0.42	0.43	1.00	0.65	0.29	0.29	0.49	0.43	0.37	0.38	0.37	0.40
4 課題探求力	0.41	0.40	0.65	1.00	0.32	0.31	0.47	0.45	0.44	0.41	0.38	0.41
5a 語学に関するリテラシー	0.31	0.37	0.29	0.32	1.00	0.35	0.31	0.27	0.24	0.25	0.22	0.24
5b 情報に関するリテラシー	0.25	0.31	0.29	0.31	0.35	1.00	0.35	0.31	0.29	0.29	0.28	0.25
6 表現力	0.38	0.35	0.49	0.47	0.31	0.35	1.00	0.62	0.45	0.40	0.35	0.42
7 コミュニケーション力	0.32	0.29	0.43	0.45	0.27	0.31	0.62	1.00	0.56	0.43	0.42	0.48
8 協働実践力	0.31	0.29	0.37	0.44	0.24	0.29	0.45	0.56	1.00	0.49	0.45	0.53
9 自律力	0.29	0.29	0.38	0.41	0.25	0.29	0.40	0.43	0.49	1.00	0.60	0.51
10 倫理観	0.29	0.29	0.37	0.38	0.22	0.28	0.35	0.42	0.45	0.60	1.00	0.54
11 統合・働きかけ	0.29	0.29	0.40	0.41	0.24	0.25	0.42	0.48	0.53	0.51	0.54	1.00

相関行列Ⅲ．通算GPA、セルフ・アセスメント、大学生基礎力レポートと質保証アンケートの相関

- ・通算GPAと中程度以上の相関が認められたのは、全102項目中、質保証アンケートの「授業は毎回出席する」（0.52）のみであった。
- ・授業外学修時間については、大学生基礎力レポートと質保証アンケートの両方で調査しているが、両者の調査結果には中程度の相関（0.42）が認められた。

2.3.4.5 令和元年度外部評価委員会の開催

(1) 趣旨・目的

AP事業の実施状況や成果に関する客観的・総体的かつ継続的な評価を受けられる体制を構築することにより、堅実なPDCAサイクルに基づいた本事業の推進を行っていくことを目的として、平成28年度から令和元年度まで、AP事業外部評価委員会を開催してきた。本AP事業は、「高大接続改革推進事業」という位置づけと、テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」の特性から、委員は高等教育に関わる学識経験者、地域の高等学校における教育を担う高知県教育委員会と高等学校関係者、そして高知県内の企業関係者で構成されている。

令和元年度はAP事業の最終年度であることから、令和元年度の取組に対する評価だけでなく、これまで本学が実施してきたAP事業全体の評価について、委員からの忌憚のない意見をいただき、AP事業終了後の取組へ活かしていくため、下記の日時で開催した。

(2) 取組内容

- 1) 日時 令和2年2月28日（金）13時30分～16時30分
- 2) 会場 高知大学朝倉キャンパス 総合研究棟2階会議室1

3) 外部評価委員

氏名	所属等	備考
谷 富貴	高知県教育委員会事務局 高等学校課授業改善アドバイザー	1号委員 高等学校関係者
中野 守康	兼松エンジニアリング株式会社 管理部門常勤監査役	2号委員 企業等関係者
小澤 望	平成6年度卒業生（人文学部）	3号委員 本学を卒業した者
光明 千里	教育学部在学学生保護者	4号委員 本学の学部在学学生の 保護者
中井 俊樹	愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室 教授	5号委員 実施本部長が指名する 高等教育の有識者
高岸 憲二	高知県教育委員会事務局 教育次長	5号委員 実施本部長が指名する 高等教育の有識者

(委員長互選)

(3) 結果

委員会終了後に提出いただいた評価委員6人の各評価項目別の評価結果は以下のとおりである。

1) 外部評価の視点

次の各項目について、平成30年度事業報告をもとに、5段階で評価を行った。

- A：十分適切といえる
- B：おおむね適切といえる
- C：どちらともいえない
- D：あまり適切といえない
- E：まったく適切といえない
- (N：判定できない)

2) 評価項目別の評価結果

単位：人

評価項目	A	B	C	D	E	N
I. 教育改革に向けた意識改革	4	2	0	0	0	0
II. 多面的評価指標を外部と共同開発する	6	0	0	0	0	0
III. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する	3	2	1	0	0	0
総合評価（令和元年度）	4	2	0	0	0	0
総合評価（AP全体）	6	0	0	0	0	0

3) 評価項目詳細 (取組内容)

I. 教育改革に向けた意識改革	教員の意識改革に関するアンケートの実施
	令和元年度アクティブ・ラーニング科目の実施状況調査の実施
	FD・SD ウィーク (授業公開週間) の実施
	令和元年度高大接続の視点による授業公開と授業協議会の実施
	パフォーマンス評価に関わる FD の開催
	リフレクション・セメスター及び学生面談に関わる FD の開催
	外部講師による FD「ティーチング・ポートフォリオについて」の開催
II. 多面的評価指標を外部と共同開発する	学修ポートフォリオ (e-ポートフォリオ) の機能の拡充
	ディプロマ・サプリメントの発行
	多面的評価指標研究会の開催
	多面的評価指標ルーブリックモデルの実施
	外部アセスメントテストの実施 大学生基礎力レポート
	統合・働きかけのパフォーマンス評価の実施
III. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する	卒業生調査及び卒業生就職先調査の実施
	リフレクション・セメスターにおけるインターンシップふりかえりセミナーの実施
	大学教育の質保証に関するアンケートの実施
	学修成果と学生生活のデータの分析及び検証
総合評価 (令和元年度)	令和元年度の AP 事業全体について
総合評価 (AP 事業全体)	高知大学の AP 事業全体について

4) 令和元年度の総合評価

令和元年度の取組については、「年度を経るにつれて、取組の一つひとつがより具体的で効果的なものに変容してきた」、「AP事業4年目になり、調査データが増え、今後の取組に活用されるであろう有用な情報が得られていた」、「FD・SDウィークの周知やe-ポートフォリオの独自機能の開発・運用等により、参加率や利用率が向上した点は評価できる」など、複数の委員から一定の成果があげられているとの評価をいただいた。特に、AP事業で開発したe-ポートフォリオや多面的評価指標ルーブリック、ディプロマ・サプリメントについては、高い評価を得た。

一方で、「事業の最終年度であるからこそ、昨年度以上の成果を期待したが、十分な成果が出たとは言えないのではないか」との意見もあった。また、卒業生調査の回収率を上げるための工夫の必要性についても指摘がなされた。

5) AP事業全体の総合評価

AP事業全体を通しては、「大学教育の質保証という点で、大きな成果を上げた事業だったと思う」、「AP事業を通じて、学修成果という目に見えないものを可視化するために様々な取組が行われたことは非常に評価できる」、「質保証の体制を高めると同時に大学教育の質的転換を目指した先進的な取組と言える。事業終了後の事業の継続性についても十分に検討されているので、今後の高知大学の教育の発展につなげていくことを期待している」など、全ての委員から肯定的な評価を得た。

また、AP事業終了後の取組について、下記の意見をいただいた。

【委員からの意見（抜粋）】

- ・ 今後は整備された質保証の基盤を活用して、全学および各学部のカリキュラムのPDCAにつながる体制を構築していくために、各学部のディプロマ・ポリシーに定めた教育目標と全学で検討された「10+1の能力」を育成するという教育目標の統合が重要になるだろう。そして、その統合された教育目標にそったカリキュラム編成、実施、評価、改善のサイクルが根づくことを期待している。
- ・ ホームページ上で公開されている学生へのインタビュー動画を有効に活用し、高校生など若い世代に対しても情報発信をしてもらいたい。

外部評価委員からの意見並びに指摘事項について、対応策を検討し、AP事業終了後も継続する取組に活かしていくこととなった。

2.4 AP事業の情報の収集と発信

2.4.1 先進モデル校の視察

平成28年度から継続して、AP事業に関わる先進的な事例について調査を行うため、各学部選出の教育ファシリテーターを含む教職員が、先進的な取組を行う大学のシンポジウムや研修会に参加し、本学の教育に還元できる知見を得た。また、出張の成果等を記入した出張報告書を大学教育創造センター教員及び各学部のファシリテーターが共有することで、各学部の質保証の取組強化を図った。

<先進モデル校視察一覧>

視察日	内容	主催・共催 (開催場所)
8月29日	AP採択校テーマV 第1回地域別研究会	日本福祉大学 (エステック情報ビル21階)
11月9日	AP採択校テーマV 第2回地域別研究会	日本福祉大学 (公立千歳科学技術大学)
	公立千歳科学技術大学 AP成果報告会	公立千歳科学技術大学 (公立千歳科学技術大学)
12月22日	AP採択校テーマV共催シンポジウム 「高等教育改革と卒業時の質保証」	AP事業テーマV採択校 (日本福祉大学 東海キャンパス)

2.4.2 シンポジウムの開催

(1) 趣旨・目的

本シンポジウムは、大学教育再生加速プログラム（AP）事業・テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」に選定されて以降に得られた成果について、全国の高等教育機関・高等学校関係教職員に広く情報発信することを目的に実施する。

(2) 取組内容

1) 日 時 令和元年11月29日（金） 12：00～17：30

（ポスターセッション12：00～12：45）

2) 場 所 大阪工業大学梅田キャンパス OIT梅田タワー 3階 常翔ホール

（大阪府大阪市北区茶屋町1番45号）

3) 主 催 高知大学・大阪工業大学

共 催 日本福祉大学

協 賛 関西地区FD連絡協議会

4) プログラム

<ポスター発表>

12：00～17：30（うち、12：00～12：45（45分）ポスター発表在席時間）

ポスター発表参加校 AP事業採択校 12校

<シンポジウム>

13：00～13：10 開会挨拶 櫻井 克年（高知大学長）

13：10～13：20 開催校挨拶 益山 新樹氏（大阪工業大学長）

13：20～14：10 基調講演Ⅰ「テーマ 学びの質保証に向けた教学マネジメント」

中井 俊樹氏（愛媛大学 教育・学生支援機構教授）

14：10～14：40 基調講演Ⅱ 高橋 浩太郎氏

（文部科学省 高等教育局大学振興課 大学改革推進室 室長補佐）

14：40～15：00 - 休憩 -

15：00～15：20 幹事校挨拶 中村 信次氏

（日本福祉大学 学長補佐/AP事業推進委員長・教授）

15：20～15：40 事業報告Ⅰ 小島 郷子（高知大学 副学長（教育担当）・教授）

15：40～16：00 事業報告Ⅱ 井上 晋氏

（大阪工業大学 教務部長/AP事業推進責任者/工学部教授）

16：00～17：20 パネルディスカッション

「テーマ 学びの質保証に向けた教学マネジメント」

パネリスト 中井 俊樹氏、高橋 浩太郎氏、井上 晋氏

奥田 一雄（高知大学 理事（教育担当）/AP事業実施本部長）、

中村 信次氏

コーディネーター 椋平 淳氏

（大阪工業大学 教育センター長・工学部教授）

17：20～17：30 閉会挨拶 塩崎 俊彦

(高知大学大学教育創造センター副センター長・教授)

(3) 結果

1) 参加者 137名 (講師5名、学外者111名、高知大学教職員21名)

2) アンケート結果

参加者137名の内、53名からアンケートの回答があった。

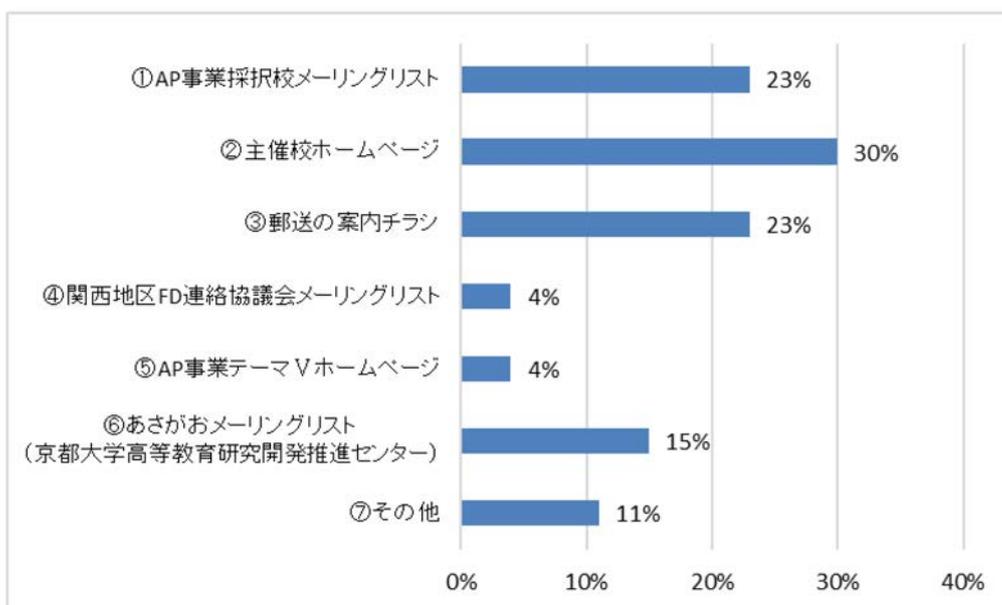
回答者の職種は下記のとおりである。

<職種>

職種	参加者数	アンケート回答者	
		人数	割合
国公立大学 教員	21	9	17%
国公立大学 職員	16	7	13%
私立大学 教員	38	12	23%
私立大学 職員	45	24	45%
短期大学 / 高専 教員	3	1	2%
企業	1		
団体	10		
官公庁	1		
その他	2		
未回答			
合計	137	53	100%

<本シンポジウムを何で知ったか>

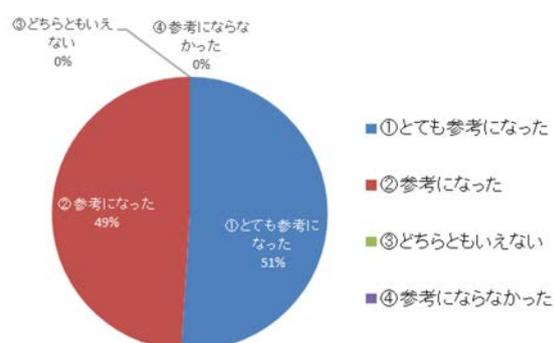
選択肢	人数	割合
①AP 事業採択校メーリングリスト	12	23%
②主催校ホームページ	16	30%
③郵送の案内チラシ	12	23%
④関西地区FD連絡協議会メーリングリスト	2	4%
⑤AP 事業テーマVホームページ	2	4%
⑥あさがおメーリングリスト (京都大学高等教育研究開発推進センター)	8	15%
⑦その他	6	11%



参加者がどの広報媒体でシンポジウムについて知ったかについての質問では、主催校のホームページで知ったとの回答が最も多く、ホームページでの情報発信が広報に役立っていることがわかった。

<シンポジウム全体の感想：択一>

選択肢	人数	割合
① とても参考になった	27	51%
② 参考になった	26	49%
③ どちらともいえない	0	0%
④ 参考にならなかった	0	0%
未回答	0	0%



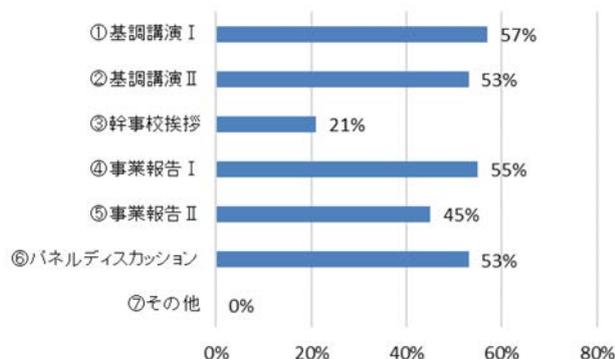
<シンポジウム全体の感想：自由記述（一部抜粋）>

①	① 教学マネジメントの中身・本質等について知ることができた。
①	① AP事業に関するシンポジウムにはいくつか参加しました(テーマVに限らず)。本シンポジウムは中でも最も焦点がはっきり見えてわかりやすかったです。いよいよ最終ラウンドになって、いろいろな課題(ディプロマサプレメントなど)に一定の仕組みが出来上がってきているのがその理由だとは思いますが、いずれにしてもGOODでした。
①	① 本学も教学マネジメントについて、様々な検討を始めているところです。基調講演だけでなく、事例報告も多彩で、とても勉強になりました。
①	① 本学で進めるべき点の整理ができた。
①	① 課題が明らかになってきた段階で次につなげる議論ができた。
②	② 教学マネジメント指針の内容を理解する良い機会になった。他大学のディプロマサプレメントの具体的に見せる項目を知ることができた。
②	② 内容もさることながら質問等がサイトで共有されていたこともあり、自身で気付かなかったことが分かった。この運営は良かった。
②	② 学修成果の可視化の具体例が参考になった。また、課題についても明らかになった。
②	② 多方面からの発表だったため、様々な視点からの教学マネジメントの話が伺えてよかった。

シンポジウム全体の感想では、とても参考になったと回答したのが51%、参考になったと回答したのが49%と、回答者全員から肯定的な回答を得られた。

特に参考になったものに○をつけてください。（複数回答可）

選択肢	人数	割合
①基調講演Ⅰ	30	57%
②基調講演Ⅱ	28	53%
③幹事校挨拶	11	21%
④事業報告Ⅰ	29	55%
⑤事業報告Ⅱ	24	45%
⑥パネルディスカッション	28	53%
⑦その他	0	0%

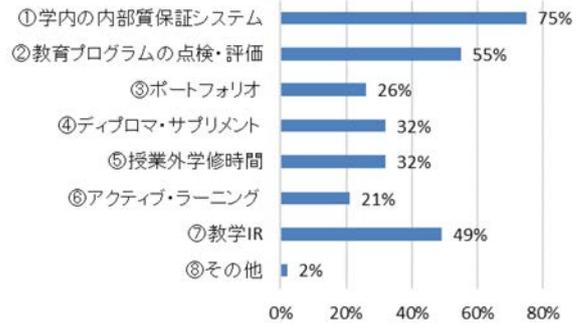


【理由】

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	理由
基調講演Ⅰ	基調講演Ⅱ	幹事校挨拶	事業報告Ⅰ	事業報告Ⅱ	パネルディスカッション	その他	
<input type="radio"/>		現状、他大学の取組がよくわかった。					
<input type="radio"/>							教学マネジメントについて一から説明して下さったので、勉強になった。
<input type="radio"/>			<input type="radio"/>				内容が深くわかりやすかった。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		<input type="radio"/>				高知大事例が参考になった。
<input type="radio"/>			<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		教学マネジメントを考えるうえで、検討対象にするべき項目が具体的にわかった。その他、教職課程の支援体制の改善にもこうした考え方が利用できると思う。「ポートフォリオ活用(入力)→学生と教員の面談」という丁寧なケアが、学生の学びの動機付けに重要であることを再確認できた。
<input type="radio"/>							論点整理として参考になりました。
	<input type="radio"/>						小さい私立大学のため、文部科学省のご意見をしっかり理解する機会がありませんでした。これからの20年のための国家の考えが理解でき、大変ためになりました。
<input type="radio"/>							中井先生の講演は以前にも拝聴いたしましたが、改めて確認させていただきました。
					<input type="radio"/>		APに選定されている大学が実直に教育改革を継続させる(していく)姿勢を感じることができ、その結果、質保証に対する高尚な議論になったと思います。
	<input type="radio"/>						文科省の考えるところが知れたため。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		カリキュラムマネジメントを中心とした教学マネジメントについて整理ができた。教学マネジメント指針についてその根本のコンセプトが理解できた。
					<input type="radio"/>		そもそもの教学マネジメントとは何かを改めて考える良い機会となりました。
<input type="radio"/>			<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			具体的な取組方法が知りたかったため。
<input type="radio"/>		多様な視点の話が聞けて良かった。					
	<input type="radio"/>		<input type="radio"/>				シンプルなポートフォリオの利用で評価方法の設定が重要であると感じたので。
<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				<input type="radio"/>		先日の私大協教務部課長相当者研修会で一度伺ったので。(幹事校挨拶、事業報告Ⅰ、事業報告Ⅱ)
<input type="radio"/>							理解が深まりました。
<input type="radio"/>			<input type="radio"/>	<input type="radio"/>			具体的な事例が示されていた点。
	<input type="radio"/>				<input type="radio"/>		教学マネジメント指針の現状・背景等が理解できた。

1) 大学教育の質保証について、特に関心のあるものに○をつけてください。(複数回答可)

選択肢	人数	割合
①学内の内部質保証システム	40	75%
②教育プログラムの点検・評価	29	55%
③ポートフォリオ	14	26%
④ディプロマ・サプリメント	17	32%
⑤授業外学修時間	17	32%
⑥アクティブ・ラーニング	11	21%
⑦教学 IR	26	49%
⑧その他	2	4%



「⑧その他」の内訳	人数
質保証の可視化方法	1
そもそもの入り口である入試制度	1

【理由】

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	理由
学内の内部質保証システム	教育プログラムの点検・評価	ポートフォリオ	ディプロマ・サプリメント	授業外学修時間	アクティブ・ラーニング	教学 IR	その他	
	○			○		○		授業レベルのアセスメントに比べ、プログラムレベルの評価は困難 授業外学修の定義、測定(調査)方法を知りたい。IRの具体的事例
○	○							実現、実施が容易でないと思うので。
○	○					○		最も目の前に迫った課題と思うため。(認証評価)
○			○	○	○	○		担当者として改革を進めるため。
	○	○	○					カリキュラムマネジメントに携わっている立場であるため。
○				○				学内で内部質保証システムを構築中であるため。予習・復習等の授業外学修時間の実質化の必要性を感じているため。
○								本来は他の選択肢の「教育プログラムの点検・評価」が重要と思いますが、認証評価がちらつくと、選択したチェックになってしまいます。
○	○					○	○	小規模大学ではソーカーで話が通りやすいと考えがちですが、カベは意外と高いと実感しています。その辺を踏まえた組織づくりが大切であると思います。また、いかに学生を取り込んで教員の主体的かかわりをもたせられるかを模索しています。
○		○	○				○	本学でFDを担当しています。上記について今年から取り組んでいる内容のため、関心を持っています。
○	○		○	○			○	本学の教学マネジメント推進担当者となっているため。
○				○	○	○		(授業外学修時間)定められている時間を確保・実施できている大学はあるか？(教学IR)本学で課題となっている
		○	○	○	○	○		ディプロマサプリメントの活用形態をどう想定するか(何を最も重要な目的に据えるか)によって、記載する項目や発行形式が変わるので、その考え方を知りたい。学内に点在する様々なデータ、アンケート結果などを、どんな目的で組み合わせで分析するかIRの代表的なモデルについて知りたい。
○	○						○	本学にはあまりシステム化していないため。 今回の講演を聞いて興味を持ったため。(教学IR)

2) 高知大学のAP事業について、ご意見・要望等ございましたらお教えてください。

良い刺激になり参考になりました。ありがとうございました。
ありがとうございました。
参考になりました。ありがとうございました。
ポートフォリオ、ディプロマサブリメントの内容について詳しく説明していただける機会があると、ありがたく思います。
沢山の有益な情報を集めることができました。ありがとうございました。
次回以降も、両大学の取組を知る機会があればうれしく思います。その時は、“学生がどのように変わったのか”ということをお教え頂きたいです。本日はありがとうございました。
今後も取組に期待しております。
ありがとうございました。
非常に重要な取組について一般に公開して頂き、ありがとうございました。自分では学ぶことが難しいFDIについて実例を伺いながら学ぶことができ、大変勉強になりました。
先進的事例であり、しかも安定的に進められており、大変参考になりました。
大変参考になりました。高知大学のポートフォリオシステムは良く作りこまれており、学生も使いやすそうでした。ぜひ、多くの大学でも使用できるようにしていただきたいです。
パネルディスカッションの最後にふれられた質問意見の内容とその答えをウェブ等で公開していただきたい。
とても参考になった。
内容がわかりやすく勉強になった。(大学に勤務して5年程度の者にもわかりやすい)
会場の設営や時間配分も良い。
もう少し様々な事例も聞きたいので、セクションごとで(教室を分けて)実施してもいいのかなと思った。
質問紙をwebでされていたので、アンケートもwebにしてもらおうと大変助かる。
パネルディスカッションの質問のやり方はとても良いです。様々な意見が聞ける&周りの人の意見も見れて本当に良かったです。
とても私自身の意見はまとまらず、大変な情報量と貴重なご意見の数々、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

【シンポジウムの様子】



●登壇者一覧



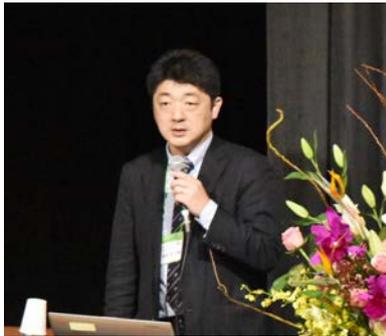
開会挨拶
櫻井 克年 (高知大学)



開催校挨拶
益山 新樹 氏 (大阪工業大学)



基調講演 I
中井 俊樹 氏 (愛媛大学)



基調講演Ⅱ
高橋 浩太郎 氏 (文部科学省)



幹事校挨拶
中村 信次氏 (日本福祉大学)



高知大学取組報告
小島 郷子 (高知大学)



大阪工業大学取組報告
井上 晋 氏 (大阪工業大学)



コーディネーター
棕平 淳 氏 (大阪工業大学)



パネリスト
奥田 一雄 (高知大学)

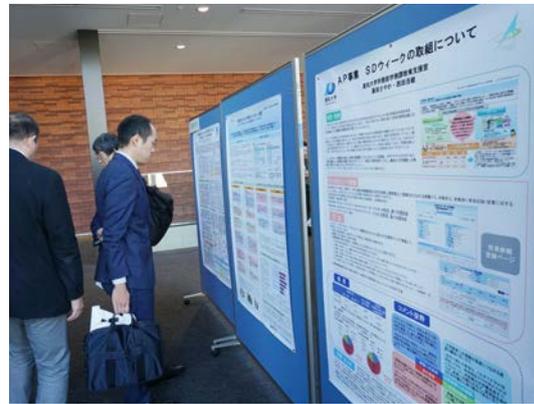
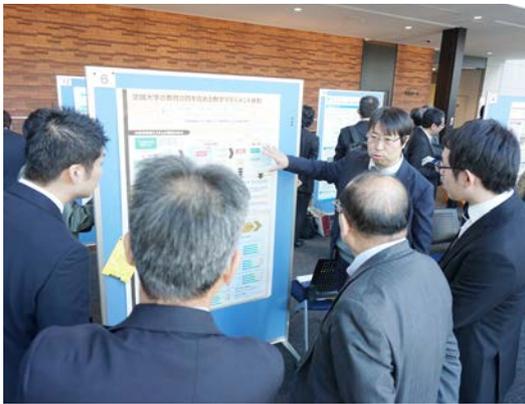
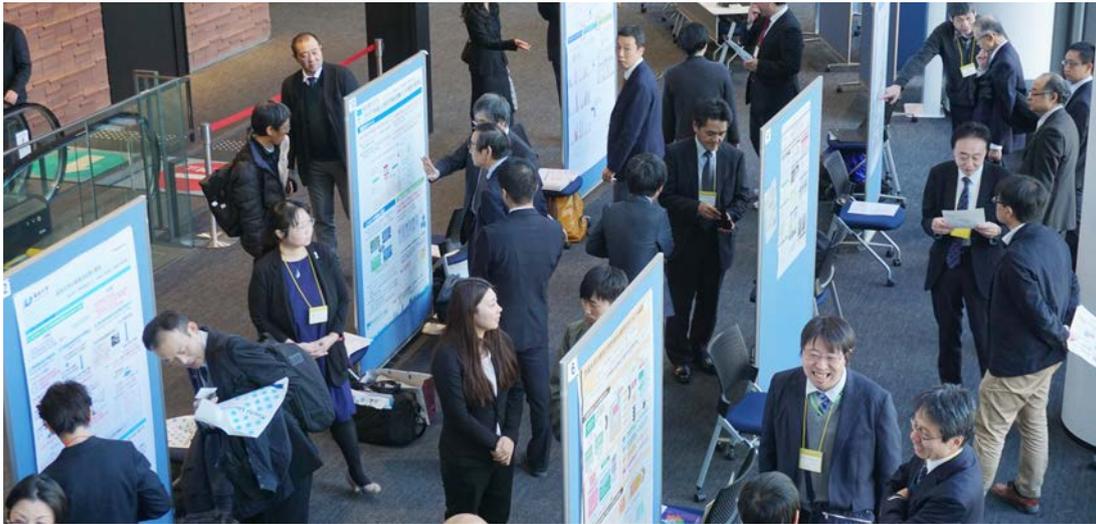


閉会挨拶
塩崎 俊彦 (高知大学)

● パネルディスカッション



●ポスターセッション



2.4.3 学外の研修等における発表

(1) SPODフォーラム2019でのポスター発表

令和元年8月28日～30日に愛媛大学で開催されたSPODフォーラム2019において、AP事業に関わる取組についてポスター発表を行った。発表内容は、「質保証のための意識改革～FD・SDウィークの試み」であり、会場では、ポスターの前で活発な議論が展開された。

<ポスター発表の様子>



質保証のための意識改革～FD・SDウィークの試み

SPODフォーラム2019 愛媛大学

杉田 郁代、塩崎 俊彦、高畑 貴志、立川 明、小島 郷子（高知大学 大学教育創造センター）

報告の趣旨・目的

高知大学では、大学教育再生加速プログラム（テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」）の一環として、2017年度より、「質保証のための意識改革」をテーマとして、教職員が授業参観するFD/SDウィークを行っている。本取組は、高知大学の授業改善を推進することによって、教職員のFDとして授業参観を通じて授業参観者が自省的に自己の授業に対する考えを整理することを目指す。一方で教職員の場合は、SDの一環として、教育活動である授業と自己の業務との関連性について考えてもらうことを目的とした。本報告では、このうち、職員から得られたフィードバック・コメントの分析を通じて、本取組のSDとしての効果を分析する。

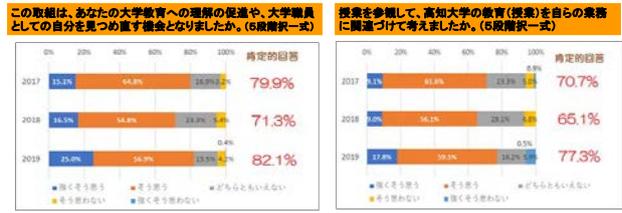
これまで、FDの取組組みとして他の教職員の授業を参観するという取組は多くの大学でされており、その効果について検証されてきた。しかし、職員による授業参観の事例についてはほとんど報告されていない。

本取組を始めた2017年度は、大型科学省より、「大学設置基準等の一部を改正する省令の公布について（通知）」が出され、SDが義務化された年度であった。通知では、「必要知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修」が義務づけられているが、本取組は、大学職員が授業参観を通じて、自校の教育活動と自らの業務との関連性を意識し、これに基づいた能力・資質の向上を図ろうとするものである。

このために本取組では、職員が授業参観に関する目標を「1. 高知大学の教育を知る。2. 高知大学の教育を知る。3. 授業参観を自己の業務に引き付けて考える」とし、授業参観後、上記目標に関わる内省型の設問に対して、フィードバック・コメントを登録するという形式で職員の内省を促した。

本発表は、上記のフィードバック・コメントと自由記述コメントから、SDとしての授業参観に関わる職員の意識について探的に検証していく。

効果検証Ⅰ / 授業参観を自分事として捉えられたか？



効果検証Ⅱ / 取組の目標は達成されたか？

目標1. 「高知大生を知る」

*** 授業・学生からは遠い部署にいる職員の意識醸成**

普段の仕事では、学生さんと接する機会がないので、大学で講義を受けることが久しぶりなこともあり、有意義だったので、今後もこのような機会があれば、参加したいと思っています。

〇講で窓口業務をしていますが、実際の授業中の学生の様子をみる機会がなく、貴重な機会となりました。ありがとうございました。

高知大学の講義がどのような形で行われ学生がどのような姿勢で臨んでいるのかを、肌で感じることで大変有意義であった。この授業参観という試みは普段講義のものに陥り関心することのない私達職員にとり、非常に意味のあるものであり、今後の職務に少しでも役に立つものであることを改めて感じている。個人的に強い関心・興味のある講義の参観を希望させて頂いたが、この貴重な機会を捉え、先方や学生に改めて大学職員としてどのようなサポートが今後必要とされるのかを改めて考えるきっかけになったように思う。

学生に接することは、全く未知の分野であったので勉強をさせていただきました。

現在の総務系業務にはあまり関係ありませんが、今後、学生系の業務に携わった時に参考となる

目標2. 「高知大学の教育を知る」

*** 大学教員の現状と教員による教育の現状への理解の深化**

授業参観は、実際に学生さんごとのような講義を受けているのかを知ることができ、貴重な機会となりました。今回は教員側が短く、教員側から教員側の立場を学ぶこともでき、大変有意義な機会となりました。

授業参観で教員が教育を行っているの現場を見ることが、学生を育てるにどう関わっているのかを知るの機会となりました。理解が深まりました。教員側から教員側として、必要に応じて学生の考え方を伺うことも、学生との積極的な関わりをもちたいことを考えてみたい。

事前に、当初は90分間開講されることなどを窮屈に感じておりましたが、大学職員でありながらこのようなことがなければ大学の授業を参観することもないので、大変有意義な機会となりました。

教員の学生に対する丁寧さは、自分の学生との場合は世間の教育水準がどのようなものか興味があるのと、大変勉強になりました。

*** 教員の教育活動への理解**

このよう授業を参観することは、本取組ならではの業務の者にはなかなか機会がなかったものと思います。本取組により授業に参観する学生を教、先生方の様子などを見ていただき、大学における新しい視点を養うことができました。

普段先生方がされている授業を目にする機会がほとんどありませんが、授業参観を通じて、先生方の授業に携わっている教育というものを改めて感じることができました。

教員の研究の基礎となる部分の講義を聴くことができ、少しではあるが授業を深めることができました。

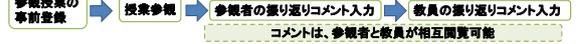
授業でPCやスマホの利用が常態化であれば、教室内に電源コンセントがあれば学生にとって安心かもしれませんね。

FD/SDウィークの取り組み概要

FD/SDウィークへの参加者					公開授業期間・授業数				
	2016	2017	2018	2019		2016	2017	2018	2019
教員	88人	79人	49人	66人	科目数	34科目	42科目	39科目	40科目
職員	157人	217人	183人	189人		延べ開講科目数	92回	99回	96回

FD/SDウィークは、毎年度、第1学期、第2学期のいずれかに、6～7週間程度の期間を設定して実施している。

授業参観実施の手順（専用システムを作成して利用）



- SD（職員）用振り返り設問
- 参観した授業で、講義の教育方法や学習形態等について、特に印象に残ったことはどのようなことですか。
 - 参観した授業で、学生の様子について気づいたことはどのようなことですか。（100字～200字程度）
 - 参観した授業について、授業担当者へのコメントがあれば書いてください。
 - 参観が行われた教室の環境の整備や設備について、学修に適していると感じましたか。（5段階評価）
 - 授業を参観して、高知大学の教育（授業）を自らの業務に関連づけて考えましたか。（5段階評価）
 - この取組は、あなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか。（5段階評価）
 - ①～⑥の回答の理由や、来年度の本取組の実施に向けての愚痴のないご意見、ご要望をお聞かせください。（自由記述）
- 【研究対象】本取組期間の3年分の振り返り設問の回答（5段階評価【5】、【6】及び自由記述【7】）
 【検証方法】自由記述の検証については、高等教育を専門とする3名の研究者によって分析検証を行った。

目標3. 「授業を自己の業務に引き付けて考える」

*** 自己の仕事とスキルへの気づき**

今日の学生さんの意見を聞かせて頂き、様々な考え方があり、自分も改めて気づかされた。今後、私の業務を行う上で、様々な考え方があり、それを改めて自問自答し、取り組んでいきたいと感じました。とても貴重な機会を頂き、ありがとうございました。

フィードバックシートを使って相手の良いところを褒めるとともに改善点を伝えることは、相手に「気づき」を与えることなので、職場のSDにも使えたいと思います。

事務の仕事でもミーティングの効率的な進め方や、プレゼンテーションのスキルが必要とされますので、グループ討議や発表の様子、教員の先生とのまやフォローなど、参考にしました。

先生の授業の話し進め方は、事務職員として仕事をする際に、相手に説明する際の話し方の参考になると思いました。

授業の進め方を見て、後輩や同僚への指導、教え方について考えさせられるものでした。

直接の業務とは関係ないが、例えばグループで仕事を行う場合、どの様に進めれば効果的なのか参考になったと思います。

教育に関わる事項については、これまで大学の聖域扱いとされ、事務職員が口を挟める状況にはなかった。本取組は大学職員すべてが、教育への関心を広げ、質保証を高めるための取組の取り組みであると思う。

高度が進む環境において、大学教育だけでなく現在の業務についても、現状のままではなくなる可能性があると感じなければならぬということを今回の参観で感じた。

考察と課題

高知大学OAP事務局の一つとして「教職員の意識改革」を掲げた。ここに報告した「FD・SDウィーク」の取組は、このうちの職員による授業参観の取組についての分析である。

SDの一環として職員による授業参観を実施するにあたって、3つの目標を設定し、本取組が自分事として本学の教育活動を捉え、自らの業務に引き付けて考えを深めることをめざした。

授業参観を通じて、「大学職員としての自分を見つめ直す機会」としての自己を見つめ直す機会を得られた（H30年度の特定の参観者の年度に比べて低いことについては、その原因となる学内事情等について検討した）。

これに対して、「授業参観を通じて、自らの業務と大学の教育活動を関連づけて考えられたか」とについては、いずれの年度も、肯定的回答が上記「職員」としての自己見直しに比べて低いものであった。このことについては、直接に学生や教員による教育活動に携わらない管理・総務系の職員が教職員の業務の現場を直接知る機会が少なく、大学の教育活動と自らの業務を関連づけて捉える機会が、これまでは少なかったことに起因するものと考えられる。

次に、このよう大学の教育活動に対する職員の意識の現状に対して、本取組がどのようなインパクトを与えたかについて、効果検証Ⅰに対する職員のフィードバック・コメントを通じて見てみる。

本取組を実施するにあたって設定した3つの目標のうち、目標1「高知大生を知る」については、普段学生や授業に関わらない職員から、「学生と接する機会が少ない」「普段なかなか授業を見る機会がない」など、抽象的な記述ではあるが、本取組による授業参観が、日常の業務では接しえない学生や授業に接する機会が広がったことが見て取れる。

目標2「高知大学の教育を知る」では、大学教員の現状と教員の教育の現場の理解（アンケートアンケート）と教員の教育活動の理解、教員側から教員側として、必要に応じて学生の考え方を伺うことも、学生との積極的な関わりをもちたいことを考えてみたい。

目標3「授業を自己の業務に引き付けて考える」では、自己の仕事とスキルへの気づき、業務への直接的な反映の2つの記述が顕著であった。前者では、SD研修でめられるような内容に陥らないうえ、自己のスキルアップと関連付けて捉えるものであり、後者は、通常の業務と授業を直接関連づけた具体的な記述が見られた。

以上のことから、本取組は、①職員による授業参観を通じた教育活動への理解を通じて、自らの大学職員であるという自覚や、日常の業務と教育活動の接続について内省する機会となった、ということができた。

当然ながら、本報告は職員に上記のようなインパクトを与え、内省を促す結果となっているが、取組を通じて職員自身の行動変容までは届いていない。自らの業務に引き付けて考えることが、FD/SDウィークや大学広報への反応など、その萌芽を見出すこともできるが、なお、今後の課題としたい。

肯定的な結果の一方で、「授業参観に時間がかかる」といった負担感を感じる声もみられた。上記に記した結果において、授業参観に対する評価は肯定的な回答が多い。しかし、自己の業務に関連付けて考えることができた説明に対する肯定的な回答は、前記の通りと比べると、肯定的な回答は少ない。大学職員の中には、授業に全く関わらない部署や日常業務に学生や授業などの教育活動に関与しない部門があることから、年度以降、これを一つの課題として検討していく必要がある。

(2) AP事業採択校テーマV 2019年度第2回地域別研究会での事例報告

令和元年11月9日（土）に公立千歳科学技術大学で開催された「AP採択校テーマV 2019年度第2回地域別研究会」において、「高知大学における質保証の取り組み」と題して、本学がこれまで行ってきた取組について事例報告を行った。

報告した主な内容は下記のとおりである。

【報告内容】

- ① 3つのポリシーに基づく教育活動の実施
- ② 卒業段階でどれだけの力を身に付けたのかを客観的に評価する仕組みの構築
- ③ 学生の学修成果をより目に見える形で社会に提示するための手法の開発
- ④ 学外の多様な人材との協働による助言・評価の仕組みの構築
- ⑤ 教育改革に向けた教員の意識改革
- ⑥ まとめと今後の課題について

(3) AP事業採択校テーマV 2019年度全国シンポジウムでのポスター発表

令和元年12月22日（日）に日本福祉大学にて開催された「AP事業採択校テーマV 2019年度全国シンポジウム」にて、「高知大学AP事業の成果と展望」をテーマにポスター発表を行った。

高知大学AP事業の成果と展望

高知大学 小島郷子・川村悠子*・塩崎俊彦・杉田郁代・高畑貴志
(大学教育創造センター, *学務部 学務課)

1. 高知大学のAP事業の成果

ディプロマポリシーに基づく教育活動を加速させるための3つの柱

【取組】

- I. 教育改革に向けた意識改革
- II. 多面的評価指標を外部と開発
- III. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する

【成果】

- 「教育の質保証」の再生加速へ
1. 学部・コースを超えた全学的な取り組みの定着
 2. 現代社会のニーズにあった能力指標の開発 (卒業後も視野に入れた指標)
 3. アセスメントスケジュールを全学で整備

I. 教育改革に向けた意識改革
教育改革に関する意識の共有化

FD・SDウィークの実施

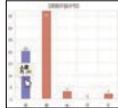


教職員で授業参観
学生の学びの実態把握
教職協働

GPAの厳正化

成績に関わる申し合わせの作成

授業科目における成績評価分布の公表



外部講師によるファシリテーション力向上FD



全学的な取り組みの定着

ディプロマ・サブメントを卒業時に発行

10+1の能力

専門分野に関する知識、人間の文化・社会・自然に関する知識、論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観
統合・働きかけ

II. 多面的評価指標を外部と共同開発
学修成果の可視化

総合的教養教育に関するWG報告
10の具体的能力の提案

10+1の能力指標に基づいたDPの見直し

10+1の能力測定指標 (ルーブリック)の作成

全学横断の具体的能力指標

セルフアセスメントによる10の能力の測定
+1(統合・働きかけ)の評価

eポートフォリオに蓄積・共有

教員・学生ヘフィードバック

学修成果の可視化
正課を共有した面談・支援

「学修成果の可視化」の整備

多面的評価指標開発研究会

多面的評価指標開発研究会とは？
高知大学が育成しようとする人材についての能力指標の開発に向けて、高等学級関係者や地域・企業と協働して研究会を開催し、多面的評価指標の開発に取り組み、質保証の仕組みの構築を行うことを目的に設置。「高大接続」と「大社接続」



出口の課題を検証

卒業生調査の実施

全学同じ尺度で検証

インタビュー調査(首都圏と地方で実施)
卒業生の自己評価と上司の他者評価を聴き取り調査

質問紙調査(社会人1年目の卒業生)

能力指標とルーブリックの開発に反映
卒業後のパフォーマンスの保証
社会で活躍できる卒業生の育成

卒業後も視野に入れた指標によるアセスメント・スケジュール



学位プログラムを越えた全学的な教育の質保証に関する体制が構築された。

2. 展望

「2040年にむけた高等教育グランドデザイン」(中央教育審議会、2018年)に示された、「教育の質の保証と情報公表—「学び」の質保証の再構築」に照らして、本学のAP事業における成果と課題は以下のとおりである。

1. グランドデザインで求められる「卒業後の成長をも意識した質の向上を図る必要性」の難しさ

グランドデザインでは、「卒業後の成長をも意識した質の向上を図る必要性」が求められているが、卒業生に調査を実施することの難しさ、在学時とのものさしのすり合わせ、卒業生の自己評価の信頼性の課題などの難しさがある。本学では、多面的評価指標開発研究会を設置し、卒業生が働く社会と、質を測るものさし(コンピテンシーの共有も含めて)について検討を重ねた。

2. 2つの評価のチューニングの必要性

本事業では、学生の自己評価のみを取り扱わず、教員評価と卒業生の場合は上司評価を照らし合わせて検討を重ね、検証を行った。学生(卒業生含む)は、評価者としては未熟であることを踏まえて検討する必要がある。

3. 質保証のための教学マネジメントの構築

本事業によって、学位プログラムを越えた質保証のための体制の骨格を提示することができた。今後は、学修成果の可視化による成果を用いて、どのように教学マネジメントを機能させていくかが課題となる。

(4) AP全体報告会でのポスター発表（APアーカイブへの掲載）

令和2年3月5日、6日に開催予定であったAP全体報告会において、本学がこれまで行ってきたAP事業の取組の成果と今後の課題等についてポスター発表を行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により報告会が中止となったため、代替コンテンツとして、APアーカイブのWebサイト上に、要旨集とポスターが掲示された。

APアーカイブURL：<https://www.AP-archive.jp/>

<掲載ポスター>

37

テーマV 卒業時における質保証の取組の強化

高知大学

高知大学AP事業の成果と展望

高知大学大学教育創造センター 塩崎俊彦・高畑貴志・小島郷子・杉田郁代

1. 高知大学のAP事業の成果

【取組】

I. 教育改革に向けた意識改革
II. 多面的評価指標を外部と開発
III. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する

I. 教育改革に向けた意識改革
教育改革に関する意識の共有化
FD・SDウィークの実施
教職員で授業参観
学生の学びの実態把握
教職協働
GPAの厳正化
成績に関わる申し合わせの作成
授業科目における成績評価分布の公表
外部講師による
ファシリテーション力
向上FD

II. 多面的評価指標を外部と共同開発
学修成果の可視化
総合的教養教育に関するWG報告
10の具体的能力の提案
10+1の能力指標に
基づいたDPの見直し
10+1の能力測定指標
(ルーブリック)の作成
全学横断の具体的能力指標
セルフアセスメント
による10の能力の
測定
教員・学生による
+1(統合・働きかけ)
の評価
eポートフォリオに蓄積・共有

III. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する
大学の卒業生は「社会で活躍できているか」を検証
出口の課題を検証
多面的評価指標開発研究会
多面的評価指標開発研究会とは？
高知大学が育成しようとする人材についての能力指標の開発に向けて、高知大学
関係校に地域・企業と協働して研究会を
開催し、多面的評価指標の開発に取り組み、
質保証の仕組みの構築を行うことを
目的に設置。
「高大接続」と「大社接続」
卒業生調査の実施
全学同じ尺度で検証
インタビュー調査(首都圏と地方で実施)
卒業生の自己評価と上司の他者評価を聴き取り調査
質問紙調査
(社会人1年目の卒業生)
能力指標とルーブリックの開発に反映
卒業後のパフォーマンスの保証
社会で活躍できる卒業生の育成
卒業後も視野に入れた指標による
アセスメント・スケジュール

【成果】

「教育の質保証」の再生加速へ
1. 学部・コースを超えた全学的な取組みの定着
2. 現代社会のニーズにあった能力指標の開発
(卒業後も視野に入れた指標)
3. アセスメントスケジュールを全学で整備

10+1の能力
専門分野に関する知識、人間の文化・社会・自然に関する知識、論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、表現力、コミュニケーション力、協働実践力、自律力、倫理観
統合・働きかけ

ディプロマ・サブリメントを卒業時に発行

教員・学生へフィードバック
学修成果の可視化
正課を共有した面談・支援

「学修成果の可視化」の整備

学位プログラムを越えた全学的な教育の質保証に関する体制が構築された。

2. 展望

「2040年にむけた高等教育グランドデザイン」(中央教育審議会、2018年)に示された、「教育の質の保証と情報公表—「学び」の質保証の再構築」に照らして、本学のAP事業における成果と課題は以下のとおりである。

1. グランドデザインで求められる「卒業後の成長をも意識した質の向上を図る必要性」の難しさ。
グランドデザインでは、「卒業後の成長をも意識した質の向上を図る必要性」が求められているが、卒業生に調査を実施することの難しさ、在学時とのものさしのすり合わせ、卒業生の自己評価の信頼性の課題などの難しさがある。本学では、多面的評価指標開発研究会を設置し、卒業生が働く社会と、質を測るものさし(コンピテンシーの共有も含めて)について検討を重ねた。
2. 2つの評価のチューニングの必要性
本事業では、学生の自己評価のみを取り扱わず、教員評価と卒業生の場合は上司評価を照らし合わせて検討を重ね、検証を行った。学生(卒業生含む)は、評価者としては未熟であることを踏まえて検討する必要がある。
3. 質保証のための教学マネジメントの構築
本事業によって、学位プログラムを越えた質保証のための体制の骨格を提示することができた。今後は、学修成果の可視化による成果を用いて、どのように教学マネジメントを機能させていくかが課題となる。

2.4.4 平成30年度AP事業報告書及びその他刊行物の発刊

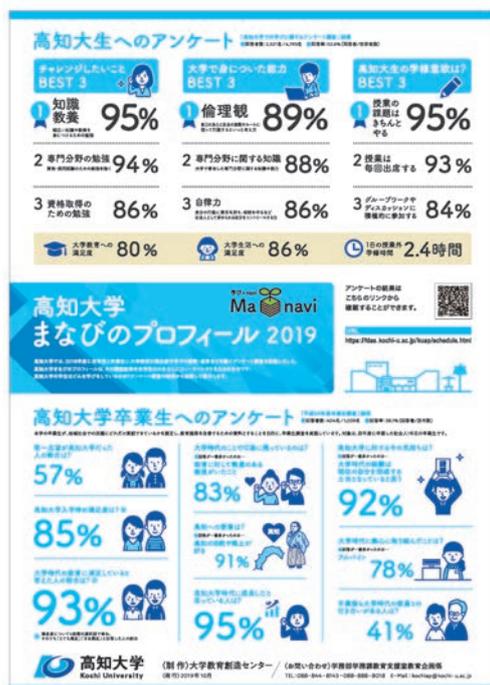
(1) 平成30年度AP事業報告書

AP事業について、事業概要、事業の背景・位置づけ、平成30年度の具体的な取組と実績を報告書にまとめ、情報発信もかねて令和2年2月に発刊した。



(2) 「高知大学まなびのプロフィール2019」の発行

平成30年度に実施した在学生への学びに関するアンケート調査 (p.50) と卒業生調査 (p.37) の結果について、学生へフィードバックするための資料として、「高知大学まなびのプロフィール2019」を作成した。「高知大学まなびのプロフィール2019」は、学生や教職員が自由に閲覧できるように紙媒体のものを大学内の複数箇所へ設置したほか、在学生全員へデータにて配付した。



2.4.6 AP事業ホームページでの情報発信

本事業に関する進捗状況について掲載し、事業成果を含む情報を発信するために、平成28年度に本事業専用のホームページを開設した。令和元年度も定期的な更新を行い、一人でも多くの人に閲覧してもらえるよう工夫した。

<AP事業ホームページ： <http://fdas.kochi-u.ac.jp/kuAP/>>



2.4.7 学生へのインタビュー動画「高知大学Mana Video」の作成

高知大学での学びや学生生活等について、在学生（最終学年）へインタビューを行い、本学のAP事業における成果物の一つとして、動画にまとめた。作成した動画は令和元年度高知大学・大阪工業大学AP事業シンポジウムの冒頭で上映したほか、ホームページ上で公開している。

<インタビュー内容（抜粋）>

- ・大学で何を学びましたか？
- ・学生生活で成長できた点は？
- ・学生生活で身についたことは？
- ・大学で培った力はどんな時に活きますか？
- ・大学で学んだことは就職活動に活かされましたか？



第3章 まとめ

3.1 高知大学における教育の質保証 —AP事業終了後の取組—

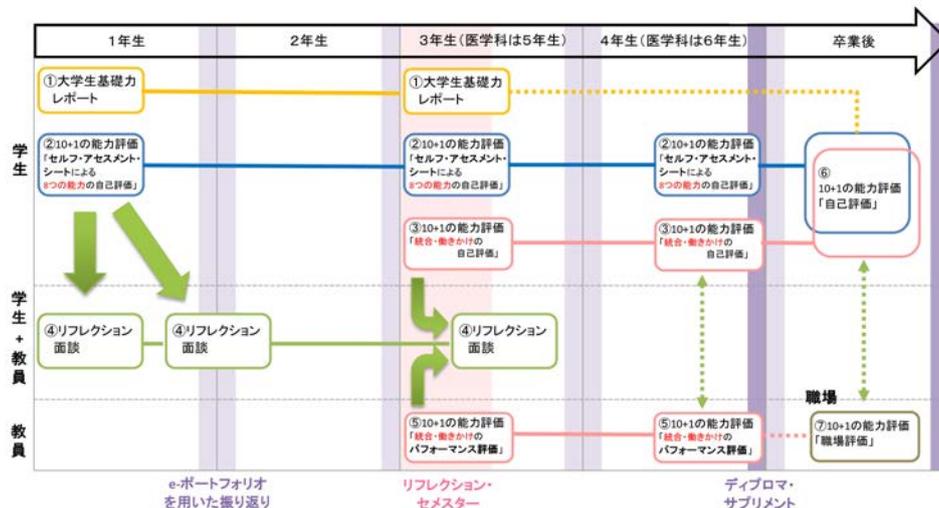
「大学教育再生加速プログラム（AP）」は、大学教育の質的転換の加速を促し、大学の人材養成機能の抜本的強化を推進することを目的に文部科学省において平成26年度より開始されたプログラムである。

平成28年度「大学教育再生加速プログラム（AP）」テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」に採択（申請件数116、採択件数19）された本学は、卒業段階でどれだけの力を身につけたのかを客観的に評価する仕組みや、その成果をより目に見える形で社会に提示するための効果的な手法等の開発に取り組んできた。具体的には、「地域協働による教育」の展開と、それによる学生の能力の育成を中心に、「Ⅰ. 教育改革に向けた意識改革」、「Ⅱ. 多面的評価指標を外部と共同開発」、「Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する」の3本の柱で教育の質保証のための仕組みの構築をめざした。

平成29年度の中間評価では「S：計画を超えた取組であり、現行の努力を継続することによって本授業の目的を十分に達成することが期待できる」を受け（19採択校中6校）、教育改革が着実に進捗してきた。

本学では、DPに基づいて学生が修得すべき「10+1の能力」（対課題能力：専門分野に関する知識、人類の文化・社会・自然に関する知識、論理的思考力、課題探求力、語学・情報に関するリテラシー、対人能力：表現力、コミュニケーション力、協働実践力、対自己能力：自律力、倫理観）及びその諸能力を統合し他者に働きかける力「統合・働きかけ」（以下「10+1の能力」という。）の定義を明確にし、全学で体系的・組織的な教育の整合性を図った。「10+1の能力」の明確化と共に能力指標を作成することで、GPAに加え、多面的な評価軸を用いて、卒業段階で学生がどれだけの学修成果を身に付けたのかを客観的に評価するための取組を開始した。

さらに、入学時から卒業時まで、診断的評価・形成的評価・総括的評価の3回の評価を実施し、さらにその評価結果をもとに学生の振り返りとそれを支援する教員による面談時期を表示し、入学から卒業後までの評価を体系化した。



※ ①②は全学で日程を定め大学教育創造センターが実施
 ③④⑤は各学部にて日程を定め実施
 ⑥⑦は卒業後に大学教育創造センターが実施

合わせて、卒業時の学修成果の客観的提示方法として、既存の教務情報システムとe-ポートフォリオを再構築するとともに機能の拡充を行った。e-ポートフォリオにおいて、入学から卒業までの履修状況や成績分布、さらに成績の推移等について可視化し、進路希望目標や振り返り、準正課活動と正課外活動等の学生生活の記録を行うことで、大学生活の学修成果を一元管理でき、卒業後の進路に向けた道標となることが期待される。そして、卒業時の学修成果を客観的に提示する方法として令和元年度卒業生から、卒業時に学位記と合わせて「ディプロマ・サプリメント」を発行する体制を整えた。

本学が4年間取組んできた、質保証に向けての事業内容の中で、下表の内容は次年度以降も継続されることが決定している。今後は高知大学の全体的な教育改革の中核としての役割を担う大学教育創造センターが主導的な役割を果たし、教育の質的転換をさらに加速していく。

No.	取組一覧	大学教育創造センター			
		全体	教育評価ユニット	プログラム開発ユニット	教育改善ユニット
1	グッドプラクティス集の作成(moodle上で公開)			○	○
2	moodle上に構築された教員プラットフォームの運用			○	
3	新たなFDコンテンツの提供				○
4	FD・SDウィークの開催		○		○
5	パフォーマンス評価・リフレクション面談に関わるFDを開催する		○	○	○
6	ディプロマ・サプリメントの検討・見直し	○			
7	e-ポートフォリオの運用			○	
8	教員や学生を対象とした学修ポートフォリオの説明会			○	
9	セルフ・アセスメントの実施・報告		○		
10	パフォーマンス評価の実施		○		
11	大学生基礎カレポートの実施・報告	○			
12	学生の学修状況に関する調査を実施し、データを分析・検証する(質保証調査: H29 紙媒体(H28、H29年度分をまとめて実施)、H29 ALCS学修行動調査、H30・R1 Webで質保証調査を実施)		○		
13	学内にある学生の学修成果に関わるデータと学生生活に関わるデータの分析・検証		○		
14	全学共通の授業アンケートの実施		○		○
15	全学共通授業アンケート実施者に対する効果検証のためのアンケート調査の実施・報告		○		○
16	卒業生調査の実施(H28・H29 紙媒体、H30～Webで実施)		○		
17	就職先調査の実施(H29 紙媒体(H28、H29年度分をまとめて実施)、H30～Webで実施)		○		
18	分析結果を学生や教職員にフィードバックする(報告書の作成)		○		

最後に、AP事業テーマV採択校間で連携が進み、事業を実施する上での悩みや課題を共有しながら本事業に取組めたことは、財産といえる。幹事校を担当していただいた日本福祉大学には衷心より御礼申し上げ、感謝の意を表したい。

今後は、本学の取組成果を全国の大学に情報発信することで、全国の大学の教育改革が進むなど、我が国の高等教育の発展に寄与すると共に、AP事業採択校としての役割を果たしていきたい。

第4章 資料集

4.1 本報告書で使用する用語・略語

ディプロマ・ポリシー … 「卒業認定・学位授与の方針」（文部科学省，2016）

「学位授与に関する基本的な考え方について、各大学等が、その独自性並びに特色を踏まえ、まとめたもの。この方針において、卒業（修了）生に身に付けさせるべき能力に関する大学の考えを示すことにより、受験者が大学を選択する際や、企業等が卒業（修了）生を採用する際の参考となる。機構の認証評価では、同方針について明確に定めそれに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され有効なものとなっているかを評価する。（大学評価・学位授与機構，2016）」

ルーブリック評価 … 「評価水準を示す「尺度」と、各段階の尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。学習を評価する際の規準の様式。どのような内容が習得されていればその尺度に達しているかの判断ができるよう、各尺度の説明は記述形式で表される。そのため、定量的に表しにくい、パフォーマンスの評価等、定性的なものとの評価の際に活用される。（大学評価・学位授与機構，2016）」

パフォーマンス評価 … 「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能などを用いて行われる人のふるまいや作品を、直接的に評価する方法（松下，2007）」

FD（ファカルティ・デベロップメント） … 「教員が授業内容方法を改善し、教育力を向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。大学設置基準により、FD活動の実施が義務化されている。（大学評価・学位授与機構，2016）」

SD（スタッフ・デベロップメント） … 「大学等の管理運営組織が、目的・目標の達成に向けて十分機能するよう、管理運営や教育・研究支援に関わる事務職員・技術職員又はその支援組織の資質向上のために実施される研修などの取組の総称。（大学評価・学位授与機構，2016）」

IR（インスティテューショナル・リサーチ） … 「高等教育機関において、機関に関する情報の調査及び分析を実施する機能又は部門。機関情報を一元的に収集、分析する事で、機関が計画立案、政策形成、意思決定を円滑に行うことを可能とさせる。また、必要に応じて内外に対し機関情報の提供を行う。（大学評価・学位授与機構，2016）」

アクティブ・ラーニング（能動的学修） … 「一方向性による知識伝達型の学修方法ではなく、学修者が能動的に学修する方法やそのプロセス。問題解決能力、批判的思考力、コミュニケーション能力といった汎用的能力の育成を図ることが期待される。（大学評価・学位授与機構，2016）」

アドバイザー教員 … 高知大学では、学生が大学生活を円滑に進められるように、アドバイザー教員制度を設けている。アドバイザー教員は、本学の専任教員が担当し、履修計画及び進学・就職・健康や心配事等日常的な結びつきを重視し、学生生活全般に係る問題について助言指導するもの。

引用文献

- ・「高等教育に関する質保証関係用語集」大学評価・学位授与機構 2016
- ・「パフォーマンス評価による学習の質の評価 –学習評価の構図の分析にもとづいて–」松下佳代 著 京都大学高等教育研究第18号 2012

4.2 令和元年度FD・SDウィーク報告書

令和元年 9月 25日

令和元年度 FD・SD ウィークの実施結果について（報告）

高知大学大学教育創造センター

1. FD・SD ウィークの趣旨と目標

【趣旨】教育改善に関する教職員の意識改革の一環として、従来の相互授業参観を見直し、各学部等5授業程度を選んで公開授業とし、授業参観の機会を増やす。これによって

- (1) 授業公開者の授業改善を行う。
- (2) 授業参観を通じて参観する側の教員が授業についての内省を通じた教育改善を図る。
- (3) 職員は授業参観を通じて、大学の授業について理解する第一歩とし、業務への反映を図ることをめざす。

【目標】

- (1) 授業公開教員
参観者から得たフィードバックをもとに、次年度以降の授業改善を行う。
- (2) 授業参観教員
参観した授業から得られた気づきや新たな教授法などを参観者が内省し、自らの授業改善・教育改善に活かしていく。
- (3) 職員
公開授業を参観することで、本学が行う教育の一端に触れ、日常の業務に反映させていく。

2. 実施期間と開講科目数

期 間：令和元年6月12日（火）～令和元年7月25日（木）

科目数：40科目（延べ105回開講 ※eラーニング科目は1回として集計）

3. 参加者数（参観申込者数、授業参観記録登録者数）

本年度の、FD・SDウィークの授業参観は、Webページ上の集計で教職員合わせて延べ343人（教員104人、職員239人）の申し込みがあり、参観後の授業参観記録登録者数は延べ273人（教員81人、職員192人）であった。

（昨年度実績：申込者328人（教員67人、職員261人）、授業参観記録登録者280人（教員58人、職員222人））

科目ごとの参観申込者数及びコメント登録者数（延べ人数）

No.	時間割コード	科目名	参観申込者数			コメント登録者数		
			教員	職員	計	教員	職員	計
1	01071	大学基礎論		1	1		1	1
2	01104	課題探求実践セミナー（自由探求学習Ⅰ）	2		2	2		2
3	01902	課題探求実践セミナー（医学科）		1	1		1	1
4	02001	倫理を考える	2	7	9	2	7	9
5	03052	障害者支援入門		13	13		12	12
6	03071	働き方改革と職業生活を考える	3	77	80	3	58	61
7	06620	スポーツ科学講義	1	3	4	1	3	4
8	06622	スポーツ科学実技A	1	1	2	1	1	2
9	07152	大学生活入門	6	6	12	3	5	8
10	07153	アクティブラーニング入門	8	7	15	4	3	7
11	25011	東洋史概論Ⅰ	2	11	13	1	9	10
12	27121	中国言語文化論	2	4	6	2	3	5
13	28000	ミクロ経済学Ⅱ	2	1	3	2	1	3
14	28017	財政学	1	7	8	1	4	5
15	41120	表現（音楽）	3	2	5	3	2	5
16	42505	日本画応用	7	6	13	6	4	10
17	42713	電気実習		1	1		1	1
18	42907	英米文学概論	1		1	1		1
19	44454	知的障害心理学	3	5	8	3	5	8
20	51103	医科物理学Ⅰ	1	3	4	1	3	4
21	51106	医科生物科学Ⅰ		7	7		5	5
22	51322	臨床倫理		9	9		9	9
23	52109	栄養と代謝		17	17		16	16
24	60013	社会調査論	4	1	5	3		3
25	60041	社会教育論	2	9	11	2	8	10
26	60051	農業振興論	1	5	6	1	5	6
27	70552	理工学英語ゼミナールⅠ	5		5	5		5
28	71120	初等複素解析	2		2	1		1
29	72107	計算機システム学	6	1	7	5		5
30	73118	地球表層動態学	3		3	1		1
31	74125	物理化学演習	7		7	5		5
32	77102	地球惑星科学	1	6	7	1	5	6
33	81080	森林土木学	5	11	16	5	9	14
34	81106	食料品質評価学	2	3	5	2	3	5
35	82003	基礎分析化学	2	2	4	1	1	2
36	82005	基礎有機化学	1		1	1		1
37	83002	海洋地球科学概論	10	9	19	5	6	11
38	92001	Public Speaking in English	1		1	1		1
39	92002	English for Global Communication	7	3	10	6	2	8
合計			104	239	343	81	192	273

4. 授業参観記録

授業参観後に、参観者が Web 上で授業参観記録を作成した。その質問項目（記述コメントおよび選択回答）と回答の要旨を以下に示す。

【教員】

（１）参観した授業について、教員の授業方法や学生の学習形態等について、特に印象に残ったことはどんなことですか。（自由記述式）

本年度の公開では、設問で求められている授業方法に関して、授業の組み立て、導入方法、途中のブレイク方法、資料（パワーポイント、板書、提示方法）、事前課題の出し方など授業方法や構成に着目された記述が多くみられたことが特徴であった。このような記述は、年々増えている。

また、昨年度に続き、資料の内容、提示方法、時間設定など具体的な教授方法に関わる記述が多かった。中には、授業外学修時間、e-learning に関わる認識の捉えなおし、反復視聴の可能性など、e-learning の効果に関わる記述がみられた。

（２）授業を参観して、あなたが実施している授業方法や学生の学習形態等についてあらたに気づいたことはどんなことですか。（自由記述式）

自己の授業方法を取り上げながら、説明方法、繰り返し説明することの大切さ、学生を飽きさせない工夫、知識伝達型の講義方法からの脱却などの記述が多くみられた。学生に理解させるための、わかりやすい授業、学生の学習意欲などに関わる記述もあった。この設問では、他の先生の参観授業を通して、自己の授業方法と比較し、内省的に振り返る記述が多くみられ、一定の成果を得られたと捉えることができる。

（３）参観した授業での授業方法や学生の学習形態等で、自分の授業にも取り入れてみたい、あなたの授業に取り入れることが可能だと思うことはどんなことですか。（自由記述式）

本年度は、双方向の授業づくり、学生を授業に参加させるための工夫、授業外学修の促し方、資料づくり、小テスト、教員の話し方など細部にわたって観察されたコメントが多く、そのほとんどは、自己の授業との比較検討からのコメントであった。授業の技法・手法に関わるコメントが多く、自己の授業への取入れに向けて授業参観された様子がよく伝わるものであった。

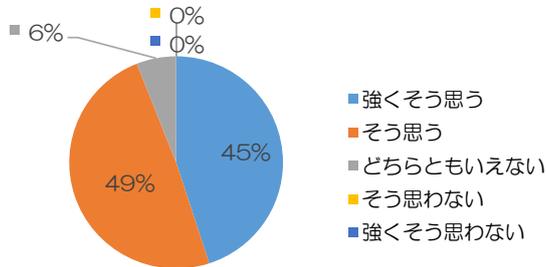
（４）参観した授業の授業方法や学習形態について、授業担当者へのコメントがあれば書いてください。（自由記述式）

授業参観へのお礼とともに、授業のどこが良かったなどを具体的にコメントされたものが多くみられた。同じ教員であるという立場からのアドバイスや助言的なコメントであり、授業公開者にとって有益なものであったと考えられる。

（５）この取組は、あなたの授業改善や教員としての意識改革に役立つものでしたか。（5段階択一式）

94%が肯定的な回答をしており、本取組は、意識改革に役立つものであったことが伺える。

(5) この取組は、あなたの授業改善や教員としての意識改革に役立つものでしたか。



	度数	割合
強くそう思う	36	45
そう思う	39	49
どちらともいえない	5	6
そう思わない	0	0
強くそう思わない	0	0
	80	100

【職員】

(1) 参観した授業で、講義の教育方法や学習形態等について、特に印象に残ったことはどのようなことですか。(自由記述式)

学生への動機づけ、グループワークの導入など学生の参加を促す手法、学生を授業に集中させる方法、KULASを用いた授業、ICTを活用した双方向型授業などに関する意見が多くみられた。実際のアクティブ・ラーニングを見ることを通して、アクティブ・ラーニングが理解できたなどのコメントも寄せられていた。また、e-learningの授業について、利点を見出すコメントが多く、スマホやPCを活用して、どこでも授業を受けることのできるメリット、授業教材の作り方、小テストを活用して学生を飽きさせない工夫などが挙げられていた。対面授業に加えて、新しい学習形態であるe-learningについて理解してもらえる好機になったようである。

(2) 参観した授業で、学生の様子について気がついたことはどのようなことですか。(自由記述式)

学生の様子について、授業への遅刻、途中退出、まじめにノートを取らない学生がいたこと、授業中にスマホ、パソコンを操作して授業に関係ないことをしている、居眠りするなど、授業に向き合っていない学生に関わる記述がみられた。また、教室にごみが散乱しているなどの学習環境についての記述もみられた。しかし、一方で、授業を真面目に受けている学生、前の方に着席し真剣に授業を受ける学生、挙手し主体的に学んでいる学生、メモを取りながら授業を受ける学生の様子を捉えた記述もみられた。全体としては、前半にあるような授業に対するネガティブな受講態度の記述よりも、後半の授業に積極的に向かう学生を捉えたコメントの方が多く寄せられていた。

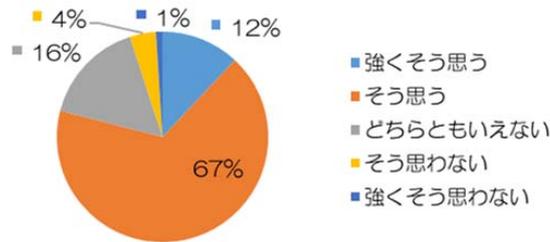
(3) 参観した授業について、授業担当者へのコメントがあれば書いてください。(自由記述式)

授業参観のお礼や、授業内容が有益であることと、学生に必要な知識であることなどのコメントが見られた。また、昨年度に引き続き、授業内容に関心があるとのコメントも多く寄せられていた。個人の業務に関わる内容であったことや、プレゼン等に活用できる内容だったなどのコメントもみられ、SDとしての授業を活用することについても示唆されるコメントがみられた。

(4) 参観が行われた教室の環境の整備や設備について、学習に適していると思いませんか。(5段階択一式)

79%が、肯定的な回答をしており、否定的な回答は5%であった。どちらともいえないという回答は16%であった。

(4) 参観が行われた教室の環境の整備や設備について、学修に適していると思いませんか。

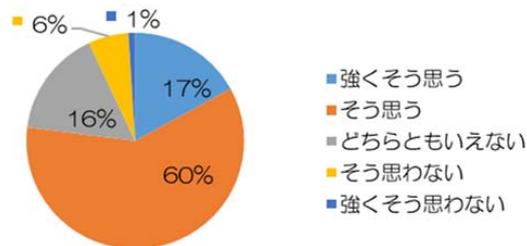


	度数	割合
強くそう思う	22	12
そう思う	126	67
どちらともいえない	31	16
そう思わない	7	4
強くそう思わない	3	1
	189	100

(5) 授業を参観して、高知大学の教育（授業）を自らの業務に関連づけて考えましたか。(5段階択一式)

昨年度の肯定的回答は、65%であり、本年度は、77%と伸びていた。したがって、昨年より自らの業務に関連付けて参観した職員の増加がうかがえる。今後、具体的に関連づけに結びついた状況について検証を深めていきたい。

(5) 授業を参観して、高知大学の教育（授業）を自らの業務に関連づけて考えましたか。

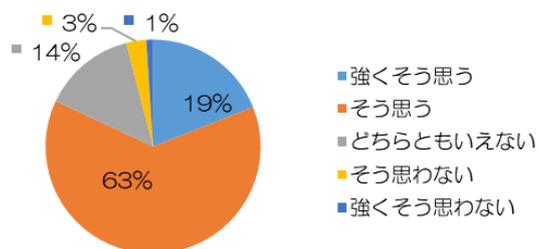


	度数	割合
強くそう思う	33	17
そう思う	116	60
どちらともいえない	31	16
そう思わない	11	6
強くそう思わない	1	1
	192	100

(6) この取組はあなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか。(5段階択一式)

昨年度は 75%であり、本年度は 82%と伸びていた。本取組が、職員の大学教育への理解促進、自己の業務を見つめなおす機会につながっていることが明らかになったといえる。

(6) この取組は、あなたの大学教育への理解の促進や、大学職員としての自分を見つめ直す機会となりましたか。



	度数	割合
強くそう思う	37	19
そう思う	120	63
どちらともいえない	27	14
そう思わない	6	3
強くそう思わない	1	1
	191	100

(7) (4)～(6)の回答の理由や、来年度の本取組の実施に向けての忌憚のないご意見・ご要望をお聞かせください。(自由記述式)

大学職員の中には、授業や学生に接する機会がない部署に勤務する者もあり、本取組のような教育活動の一端である授業を参観することにより、大学に関わる知識理解を深める好機になったことがうかがえる記述や本取組を継続してほしいとの要望が多く寄せられていた。さらに、教員の教育活動を理解できたというコメントも見られた。しかし、一方では、参観することへの意義が見いだせないなどの否定的なコメントも見られた。4年目を迎え、本取組を見直し再検討する時期にきたことが示唆される。

5. 成果について

参観後のアンケート調査の結果から、本企画の趣旨や目標に対する成果として、次のようにまとめられる。

【授業公開教員】

授業公開教員からは、参観者からのネガティブなコメントも含め、次年度以降の授業改善や、自身の成長の糧になるものであったとのコメントが寄せられており、授業改善のためのヒントを得られる機会となったことがうかがえた。

【授業参観教員】

授業参観は意識改革に役立つものであったかという問いに、94%の肯定的な回答が寄せられており、昨年度も95%の肯定的な回答比率であったことから、本取組は一定の効果を得ることができていると考えられる。本年度は、授業に関わる具体的な技法・手法に関わるコメントが多く寄せられていることから、授業参観を重ねてきたことにより「授業を見る」観察力の向上がうかがえるものであった。また、設問の性質から、自己の授業と比較し授業を見る視点からの内省的なコメントが多く寄せられており、一定の成果があったことがうかがえる。

【職員】

授業や学生に直接かわからない部署の職員が、授業参観を行うことによって、大学教育の教育活動の一つの要である授業を通して、学生の現状をとらえることができ、本学の教育活動への理解促進につながったと考えられる。

また、本取組の回数を重ねていくことにより、複数の学部の授業、様々な授業形態を知り、他の参加者のコメントを相互閲覧することによって、「授業を見る目」が洗練されてきたことがうかがえるコメントも見られた。

4.3 セルフ・アセスメント・シート様式

・3年生用

セルフ・アセスメント・シート(3年生)

20 年 月 日

この調査票は、記名式で行われますが、みなさんの修学支援や本学の教育改善以外の目的で使用されることはありません。また、個人名が公表されることは一切ありません。該当する口に✓を入れてください。

人文 教育 理工 医学 農林 地域 TSP 学籍番号〔 〕 氏名〔 〕

以下のすべての設問に、<身についていない>⇔<身についている>を基準に4段階で回答してください

		身についていない	あまり身についていない	ある程度身についている	身についている	
論理的思考力	1	文章や資料・データなどを読む際に、一つひとつの部分に関連づけながら全体の構成を理解できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	2	ものごとを一面的に理解するのではなく、立場を変えて、その対極の視点からもとらえることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	3	別々に起こっているように見える事柄や、関係がないように思われる知識について、共通点や背景などを考えながら、関連づけて理解することができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
課題探求力	4	身のまわりに起こっている事柄の中に、誰かから教えられるのではなく、自ら課題を見出すことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	5	自分で見出した課題について、どのような点に原因があるかを説明できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	6	課題を解決するにあたって、適切な方法や手順を考えてから取り組むことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
表現力	7	自分の考えや調べたことを図や表にあらわして説明できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	8	自分が作成したレポートや資料を他者の視点で修正できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	9	口頭発表やプレゼンテーションで、聴き手の立場や状況に応じた表現方法を選択できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
コミュニケーション力	10	他者の言うことを理解したうえで、自分の考えを相手にわかるように伝えることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	11	事実と意見・感想などを区別・整理して相手に伝えることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	12	結論を先に述べるなど、自分の言いたいことをわかりやすく相手に伝える工夫ができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
協働実践力	13	グループでの活動で、自分の役割を認識し、責任をもって発言・行動できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	14	グループでの活動で、多数決に頼らずメンバーの納得や合意を得る努力を続けることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	15	グループでの活動で、活動に貢献してくれた他のメンバーに感謝の気持ちを伝えることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
自律力	16	ものごとに取り組む時、いつまでに何をするかを具体的に決めて実行できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	17	はじめてのことや苦手なことでも、自分や自分のグループのために積極的に取り組むことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	18	結果が出た時に、うまくいったこと、うまくいかなかったことを振り返ることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
リテラシー・倫理観	19	情報やデータが正確であるか、客観的であるかを判断できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	20	情報を発信したりデータを作成する際に、その内容やデータの利用方法に責任を持つことができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	21	自らが直面した課題について、それまでに学んだ知識や技能と関連づけて説明できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
統合・働きかけ	22	ある考え方や方法で結果が出せないとき、別の考え方や方法でやってみることを繰り返し試みることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	23	異なる立場や考え方を持つ人々と協力関係を作って物事を進めることができる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	24	予想外のことや困難な状況に出会っても、周囲と協力するなどして、適切に対応できる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

1～3<論理的思考力>、4～6<課題解決力>、7～9<表現力>、10～12<コミュニケーション力>、13～15<協働実践力>、16～18<自律力>、19～20<リテラシー・倫理観>、21～24<統合・働きかけ>

(平成31年度入学生用:e-ポートフォリオで実施)

セルフ・アセスメント・シート

セルフ・アセスメント・シートは、みなさんが大学生活の中でどのような能力を身につけてきたかを記録し、みなさんの大学での学びを支援するためのものです。これまでの学習経験や生活、課外活動などでの経験をもとに、設問の内容が今の自分に身につけているかどうかを回答してください。この調査結果は上記の目的のためにアドバイザー・教員と共有されますが、その結果が授業科目の成績に影響することはありません。また、今後の修学支援や本学の教育改善以外の目的で使用されることはありません。

以下の①～⑪の項目について、右の5つの文章(左から右にいくにつれて難易度が上がります)のうち、自分が到達していると思う文章をクリックしてください。

		項 目						
対 人	論理的思考力	①	文章や資料・データなどを読み際に、一つひとつの部分に関連づけながら全体の構成を理解できる。	文章や資料・データに示された事実を読み取るのに苦労する。	個々の文章や資料・データに表示・表現された内容を客観的に読み取ることができる。	個々の文章や資料・データに関連性について説明できる。	与えられた文章や資料・データから全体像を把握し、自分の言葉で説明できる。	与えられた文章や資料・データに不足している情報を得るために、新たなデータ・資料を探索できる。
		②	ものごとを一面的に理解するのではなく、少なくともその対極の視点からもとらえることができる。	ひとつの事柄を理解する際に、自分が理解できる範囲でしか捉えられない。	ひとつの事柄を理解する際に、いくつかの観点や枠組みで捉えることができることを理解している。	いろいろな立場からの考え方や意見を理解した上で、自分の見解を述べることができる。	ものごとを理解するためのさまざまな観点や枠組みの利点・欠点を理解した上で用いることができる。	ある物事の理解が示された際に、そこに論理的矛盾があれば、それを指摘できる。
		③	別々に起こっているように見える事柄や、関係がないように思われる知識について、共通点や背景などを考えながら、関連づけて理解することができる。	身のまわりに起こっていることや社会的問題について、これまで学んでいることと結びつけて考えることが難しい。	身のまわりに起こっていることや社会的問題について、これまで学んでいることと関連づけて理解できている。	これまで学んできたことをもとにして、身のまわりに起こっていることや社会的問題の背後にある共通点や原因を考察できる。	一見無関係に見える事柄について、それらを関連づけるための方法や考え方が身に付いている。	個別の事柄や知識を関連づけることで、その背後にある共通点や原因を考察できる。
	課題探求力	④	身のまわりに起こっている事柄の中に、誰かから教えられるのではなく、自ら課題を見出すことができる。	与えられた課題とこれまで身につけた知識や経験を関連づけて考えることが難しい。	与えられた課題について、身につけた知識や経験と関連づけて考えることができる。	演習・実験・実習などで指導を受けつつ、これまで身につけた知識や経験に基づいて課題を見出すことができる。	自らが設定した課題を解決することができるが、どのような意義を持っているか説明することができる。	自らの知識や経験に基づいて、身のまわりに起こっている事柄の中に、新たな課題を見出すことができる。
		⑤	課題について、どのような点に原因があるかを説明できる。	課題の背景に関する理解が不十分である。	課題の背景を十分理解している。	課題の背景に基づき、課題の本質やどのような点に問題があるかを理解している。	課題について、他者に課題の本質や問題の原因・背景を説明できる。	課題の本質や問題の原因・背景について、他者からの質問・意見などに答えられる。
		⑥	課題を解決するにあたって、適切な方法や手順を考えて取り組むことができる。	課題解決の方法を考えるために必要となる、課題の原因や背景の理解が不十分である。	課題の原因や背景に基づいて、課題解決の方法を考察できる。	課題解決のための具体的なプロセスを立案できる。	適切な方法や手順で課題解決に取り組むことができる。	課題解決の手順や方法について、他者からの質問や意見を取り入れてブラッシュアップできる。
	語学・情報に関するリテラシー	⑦	外国語(母語以外の言語)で書かれた文章を理解し、自分の伝えたいことを文章で表現できる。	単語・熟語・文法の知識が不足しており、語学辞典を十分に活用できない。	平易な外国語で書かれた文章の意味を取ることができ、その文章構造を理解できる。	第三者の支援があれば、外国語の論文を読むことができる。	第三者の支援があれば、外国語の論文を読み、外国語でレポートを執筆することができる。	独力で外国語の論文を読み、外国語でレポートを執筆することができる。
		⑧	情報機器を用いて、情報を収集、分析し、文書やプレゼンテーション資料を作成し、活用することができる。	情報機器を用いて、自分で文書やプレゼンテーション資料を作成したり、表計算を行うのは難しい。	文書・表計算やプレゼンテーション資料を作るためのソフトウェアの基本的な操作を理解している。また情報検索の方法が理解できている。	情報機器を用いて、情報を収集、分析し、自分の考えを文書やプレゼンテーション資料として表現できる。	専門的な分野で必要となる計算や分析についても適切なソフトウェアを用いて成果を出すことができる。	情報機器を用いた専門的な調査、分析をスムーズに行うことができ、創造的な作業や意思決定に反映することができる。
	表現力	⑨	自分の考えや調べたことを図や表にあらわして説明できる。	自分の考えを文章や箇条書きにまとめることが難しい。	自分の考えを箇条書きなどにまとめることができる。	自分の考えを簡単な図や表にまとめることができる。	自分の考えを関連性のよくわかる図や表として示すことができる。	関連性のよくわかる図や表を用い、他者に分かりやすく説明できる。
		⑩	自分が作成したレポートや資料を他者の視点で修正できる。	レポートや資料のデータや表現の誤りを修正できていない。	他者が作成したレポートや資料について、データや表現の誤りを指摘できる。	自分が作成したレポートや資料について、提出する前にデータや表現の誤りを修正できる。	他者が作成したレポートの構成や資料の示し方などを、読み手に分かりやすくなるように指摘・助言できる。	レポートや資料を作成する際に、読み手の立場に立って、分かりやすく構成や表現となるよう適切に修正できる。
		⑪	プレゼンテーションで、聴き手の立場や状況に応じた表現方法を選択できる。	プレゼンテーションの準備が不十分で、何かを伝えようという意思が聴き手に伝わらない。	プレゼンテーションの際に、あらかじめ準備していた内容の説明ができる。	プレゼンテーションの際に、聴き手とアイコンタクトをとりながら説明することができる。	プレゼンテーションの際に、話し方や身振りなどを工夫して、聴き手の注目を引き付けることができる。	プレゼンテーションの際に、聴き手の様子を見ながら、その場に応じた方法や内容を選択して発表することができる。

4.5 シンポジウム資料

〈開催案内〉



高知大学
Kochi University

主催



大阪工業大学
OSAKA INSTITUTE OF TECHNOLOGY

共催



日本福祉大学



Acceleration Program

学びの質保証に向けた 教学マネジメント

令和元年度 高知大学・大阪工業大学AP事業シンポジウム

対象 高等教育機関・高等学校関係教職員 【事前申込制】先着**300名**

参加費
無料

令和元年度に最終年度を迎えるAP事業の取組終了後を見据えて、学びの質を保証する教学マネジメントをテーマに高知大学と大阪工業大学による合同シンポジウムを開催します。学生の成長を支援し社会が求める人材を育成する方策を、大学のマネジメントの観点から議論し考える機会となればと思います。皆様の御参加をお待ちしております。

13:00~13:10 開会挨拶 櫻井 克年 (高知大学長)

13:10~13:20 開催校挨拶 西村 泰志 (大阪工業大学長)

13:20~14:10 基調講演 I
「学びの質保証に向けた教学マネジメント」
中井 俊樹 氏 (愛媛大学 教育・学生支援機構教授)

14:10~14:40 基調講演 II 文部科学省

14:40~15:00 休憩

15:00~15:20 幹事校挨拶
中村 信次 氏 (日本福祉大学 学長補佐/AP事業推進委員長・教授)

15:20~15:40 事業報告 I
小島 郷子 (高知大学 副学長(教育担当)・教授)

15:40~16:00 事業報告 II
井上 晋 (大阪工業大学 教務部長/AP事業推進責任者/工学部教授)

16:00~17:20 パネルディスカッション
「学びの質保証に向けた教学マネジメント」
パネリスト 中井 俊樹 氏 (愛媛大学) 基調講演 I 講師
文部科学省 基調講演 II 講師
井上 晋 (大阪工業大学)
奥田 一雄 (高知大学 理事(教育担当)/AP事業実施本部長)
中村 信次 氏 (日本福祉大学)
コーディネーター 椋平 淳 (大阪工業大学 教育センター長・工学部教授)

17:20~17:30 閉会挨拶
塩崎 俊彦 (高知大学 大学教育創造センター副センター長・教授)

17:50~ 情報交換会 19:50頃終了予定

12:00~15:00 AP採択校によるポスターセッション
ポスターセッション在席時間12:00~12:45

日時 **令和元年 11/29 (金)**
12:00~17:30 (受付 11:30~)

場所 **大阪工業大学梅田キャンパス
OIT梅田タワー3階 常翔ホール**
(〒530-8568 大阪府大阪市北区茶屋町1-45)



JR大阪駅、梅田駅から徒歩5分

お申込
方法

11月15日(金)までに下記どちらかのWebサイトからお申込みください。

高知大学
AP事業HP



大阪工業大学
AP事業HP



※先着順のためお早めにお申し込みください

お問い合わせ

高知大学学務部学務課教育支援室教育企画係
TEL.088-844-8143/088-888-8018
E-Mail. kochiap@kochi-u.ac.jp

〈ポスターセッション発表テーマ一覧〉

高知大学・大阪工業大学AP事業シンポジウム(令和元年11月29日) ポスターセッション発表テーマ一覧(敬称略)

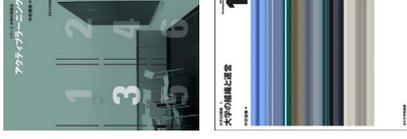
番号	発表テーマ	発表代表者		共同発表者	AP事業採択テーマ	設置形態
		氏名	所属			
1	BALシステムを用いた 全学的AL推進と教員の意識変容	中嶋 克成	徳山大学 福祉情報学部	寺田 篤史 (徳山大学 経済学部) 河田 正樹 (徳山大学 経済学部)	I	私立
2	ICT環境の整備・活用による教育改善の試み	内田 竜司	福岡歯科大学 教育支援・教学IR室	赤間 尚希(福岡歯科大学 教育支援・教学IR室)	II	私立
3	AP事業の成果を活用した教育の内部質保証	松本 高志	阿南工業高等専門学校 創造技術工 学科 電気コース	小松 実(阿南工業高等専門学校 創造技術工 学科 電気コース) 山田 耕太郎(阿南工業高等専門学校 創造技 術工学科 一般教養) 川畑 成之(阿南工業高等専門学校 創造技術 工学科 機械コース) 太田 健吾(阿南工業高等専門学校 創造技術 工学科 情報コース)	II	国立
4	「学びの好循環」を支える学習支援とその担い手の 充実	林 透	山口大学 大学教育機構 大学教育セ ンター	—	I・II 複合型	国立
5	追手門学院大学アサーティブの取り組みと教育改 革	志村 知美	追手門学院大学 アサーティブ課	辻川 美智子(追手門学院大学 アサーティブ 課) 田畑 慎太郎(追手門学院大学 社会学部社会 学科)	III	私立
6	茨城大学の教育の質を高める教学マネジメント体制	太田 寛行	茨城大学 理事・副学長(教育総括担 当)	嵐田 敏行(茨城大学 全学教育機構)	V	国立
7	学修成果の可視化を通じた卒業時の質保証の取組	神田 直弥	東北公益文科大学 公益学部	—	V	私立
8	ICEモデルによる教学マネジメント	関沢 和泉	東日本国際大学 高等教育研究開発 センター	南雲 勇多(東日本国際大学 経済経営学部)	V	私立
9	東京薬科大学薬学部における卒業時の質保証への 取組	平野 俊彦	東京薬科大学 薬学部	稲場 有子(東京薬科大学 教学IR研究推進課)	V	私立
10	キャリア形成と主体的学修を基盤とした卒業時の質 保証	永江 総宜	東京都市大学 教育開発機構	小池 慶一(東京都市大学 企画・広報室)	V	私立
11	AP事業推進のための教学マネジメント	大口 将	日本福祉大学 大学事務局	—	V	私立
12	高知大学AP事業の成果と展望	杉田 郁代	高知大学 大学教育創造センター	小島 郷子(高知大学 大学教育創造センター) 塩崎 俊彦(高知大学 大学教育創造センター) 高畑 貴志(高知大学 大学教育創造センター)	V	国立

学びの質保証に向けた 教学マネジメント

2019.11.29
中井俊樹（愛媛大学）

講師紹介

- 三重県松阪市出身
- 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室
- 大学教育論、人材開発論
- 日本高等教育開発協会副会長、大学教育学会理事
- 「シリーズ大学の教授法」「看護実践教育シリーズ」「大学SD講座」のシリーズ書籍の企画、編集、執筆
- 2015年より道後温泉から徒歩5分の場所に家族4人で暮らす



話題提供の目的

- 学びの質保証に向けて大学はどのように教学マネジメントの体制を整備したらよいのでしょうか。本話題提供では、学びの質保証に向けた教学マネジメントに関する論点を整理することと、どのように教育改革を推進することができののかについて議論するきっかけを提供したい。

構成

- **大学教育の質保証の特徴**
- 大学のカリキュラムの編成原理
- 教学マネジメントの体制の整備

紅まどんなの質保証

- ブランドを保つために、一定の基準に達したものを「紅まどんな」として出荷
 - ・ 糖度、酸味、色、形、傷
- 基準に満たないものの一部は「あいか28号」として販売
- 「あいか28号」の基準に満たないものは、生産者の自宅用もしくは廃棄処分？

大学教育の質保証と
紅まどんなの質保証との
間にどのような共通点と
相違点があるのだろうか？



大学教育の質保証の特徴

- 大学は人を育てる場である
 - ・ 人を一流、二流、三流に振り分けることが第一ではない
 - ・ 学生を育てる教育と評価こそが重要
- 学生は目標を理解する
 - ・ 具体性をもった明確な目標は意欲を高める
 - ・ 評価の基準が明確であれば、学生の自己評価や相互評価を促進できる
- 学習成果は測定しにくい
 - ・ 頭の中は直接見えない
 - ・ テストやアンケートなどで評価

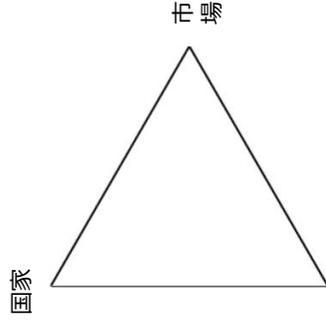
構成

- 大学教育の質保証の特徴
- **大学のカリキュラムの編成原理**
- 教学マネジメントの体制の整備

カリキュラム

- カリキュラム
 - ・ 広義には学習者に与えられる学習経験の総体
 - ・ 教育目標、教育内容、教授・学習方法、評価
- 教育課程
 - ・ カリキュラムの中でも特に制度化され計画化された部分を指す行政用語
- プログラム
 - ・ 初年次教育プログラムのように、一定の教育目的の下で授業科目や学習活動などが一定のまとまりをもって組織化されたもの

調整の三角形



教育機関

クラーク (1994) から筆者修正

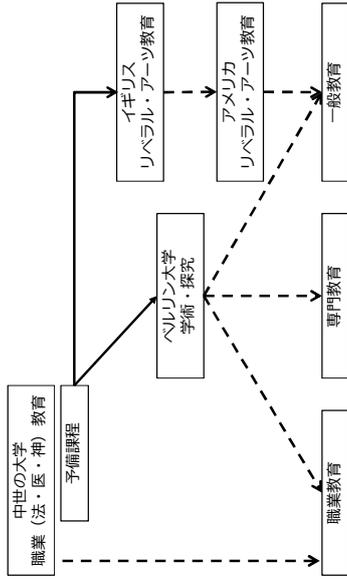
カリキュラム編成の3つの理念型

- 自治モデル
 - ・ よく知っている教育機関自身が学問の自由のもとづいて決める
- 国家モデル
 - ・ 教育機関は公共性が高く国家予算を配分しているため国家が決める
- 市場モデル
 - ・ 受験者市場や労働市場などの市場が決める

小学校と大学のカリキュラムの違い

小学校のカリキュラム	大学のカリキュラム
国による基準多い 学習指導要領 検定教科書 学年制 選択教科なし 年齢主義 履修主義 主に担任教員が授業 45分授業	国による基準少ない 大学設置基準 教科書のない授業も 単位制 選択科目多い 課程主義 修得主義 さまざまな教員が授業 90分授業など

大学教育の歴史



金子 (2013)

カリキュラムの3つの方向性

- **職業教育**
 - ・ 中世の大学を起源
 - ・ 職業人を育成する
 - ・ 講義、演習、実習
- **一般教育**
 - ・ イギリスのリベラルアーツ教育を起源
 - ・ 教養ある市民を育成する
 - ・ 講義、議論、チュートリアル、エッセイ
- **専門教育**
 - ・ ドイツのベルリン大学を起源
 - ・ 研究者、専門家を育成する
 - ・ 講義、演習、実験、卒業研究

単位の設計

- **卒業に必要な単位数**
 - ・ 124単位以上
 - ・ 教室以外でのeラーニングは60単位を超えない
- **1 単位**
 - ・ 45時間の学修を必要とする内容
 - ・ 授業 + 授業時間外の学習
- **総学習時間の設計**
 - ・ 45時間×124単位 = 5580時間

単位制度

- **授業科目を単位と呼ばれる学習時間数に区分して修得していくモジュール方式 (ロスブラット 1999)**
 - ・ 各学年での教育課程の修了を繰り返すことによって学習していく学年制とは異なる
- **長所**
 - ・ 選択制、柔軟性、学問の自由、他機関との接続
- **短所**
 - ・ 費用が高い、管理コストが高い、時間割が難しい、一貫性の欠如、統合性の欠如、履修指導の必要性

参考 単位制度の起源

- アメリカのハーバード大学
- 1869年に学長に就任したエリョット
- 決められた授業しか学生が履修できない状況を変え、単位制度と選択科目制が導入された。
- 結果として、カリキュラム編成の複雑化、履修指導の重要性にもつながった？



学期、単位時間、開講頻度

- 学期の区切り方
 - 1 学期制 (通年制)
 - 2 学期制 (セメスター制)
 - 3 学期制
 - 4 学期制 (クオーター制)
- 単位時間
 - 60分授業、90分授業、100分授業、105分授業
- 開講頻度
 - 週1回授業、週2回授業

スコープとシーケンス

- スコープ
 - Scope
 - どのような範囲の授業科目を設定するのか
 - 教育内容の取舍選択
- シーケンス
 - Sequence
 - どのような順序で配列するのか
 - 学生の学習の段階に合わせた配列

授業科目の設定方法

- 分化的アプローチ
 - 親学問の体系によって細かく分類
 - 科研費の審査区分のような細目表
 - 代数学、幾何学、基礎解析学、数理解析学・・・
- 統合アプローチ
 - 関連する学問の間を取り除いて関連性を高める
 - 学際科目、領域横断科目
 - 「社会科学と理科を融合して生活科にしよう」
 - 「ビッグバンから生物多様性までを統合科学の1科目にして学ばせよう」

カリキュラム上の配列の例

- 一般的な配列の例
 - ・ 教養→専門基礎→専門
 - ・ 基礎→応用→発展
 - ・ 理解→練習→実践
 - ・ 習得→活用→探究
 - ・ 教員主導の教育→学生主導の教育
- 単純な積み上げだけで(ばない)
 - ・ アーリー・エクスポジチャー (早い時期に仕事や学問の現場に出る機会)
 - ・ くさび型カリキュラム (専門教育、教養教育とも4年間を通じて履修)
 - ・ らせん型カリキュラム (重要な概念を中核として何度も繰り返し返す)

学生の履修の制御

- 必修科目、選択科目、自由科目
- キャップ制
 - ・ 同時に履修できる授業科目に単位数で上限を設定する制度
- 各授業の履修条件
 - ・ 履修できる学生の学年を明確にする
 - ・ 事前に指定した授業の単位を修得していないと登録ができない
- 各授業の履修者の上限設定
- 履修モデルの提示
- ナンバリング

専攻分野の決定方法

- 入学試験の形式
 - ・ 一括入試 (大きく入り入試)
 - ・ 学科別などの入試
- レイトスベシヤリゼーション
- 研究室配属のルール
- 転学部・転学科のルール
- 履修指導の体制

多様な学生への対応

- 習熟度別クラス編成
 - ・ プレースメントテスト
- リメディアル教育
 - ・ 高校レベルの生物学、物理学、数学など
- 飛び入学、早期卒業、長期履修
- 優等学位
 - ・ 選ばれた学生を対象としたオナーズ・プログラム

正課教育と正課外活動

- 正課教育
 - ・ カリキュラムの中の単位授与を行う学習
- 正課外活動
 - ・ クラブ・サークル・自主ゼミ・自治活動など
 - 2つの間に活動を位置づける場合も
 - ・ 準正課教育
 - ・ 単位授与は行わないが大学・学部等が教育的意図をもって提供する教育・学習活動
 - ・ サービスラーニング、海外研修、インターンシップ、ボランティア活動など

その他の視点

- 教授言語
- 教職課程や資格取得プログラムなどの履修の可能性
- 留学やフィールドワークの期間の確保
- ダブル・ディグリー制度
- ジョイント・ディグリー制度

構成

- 大学教育の質保証の特徴
- 大学のカリキュラムの編成原理
- **教学マネジメントの体制の整備**

政策における大きな流れ

- 学士課程教育のプログラム化
 - ・ 大学教育は各教員の属人的な取組であり、学位プログラムという観点から体系的な教育に転換すべき

教学マネジメントに関わる個別政策

- シラバス（設置基準）
- 3つのポリシーの設定と公表（学校教育法施行規則）
- アセスメントポリシー（設置基準）
- 単位の美質化（設置基準）
- ナンバリング
- 履修系統図
- CAP制
- 学修ポートフォリオ
- 学修行動調査
- 学習成果の把握と可視化
- ディプロマサブリメント
- カリキュラムコーディネーター

教学マネジメントが求められる理由

1. 教育機関として本質的に重要だから
2. 国が推進しているから
3. 変化する市場に対応するため
4. 学習者中心主義の学習観に対応するため
5. 学習成果が問われるようになったため
6. 大学にカリキュラム編成の裁量があるから
7. 大学内の組織的特徴が妨げるから
8. 大学内外の資源を有効活用するため
9. その他

教学マネジメント

- 教学マネジメント
 - ・ 「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営」（中央教育審議会2018）
- カリキュラムマネジメント
 - ・ 中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
 - ・ 「各学校が、学校の教育目標をよりよく達成するために、組織としてカリキュラムを創り、動かし、変えていく、継続的かつ発展的な、課題解決の営み」（田村2011）
 - ・ 「大学のカリキュラムマネジメント」（中留2012）

カリキュラムマネジメント

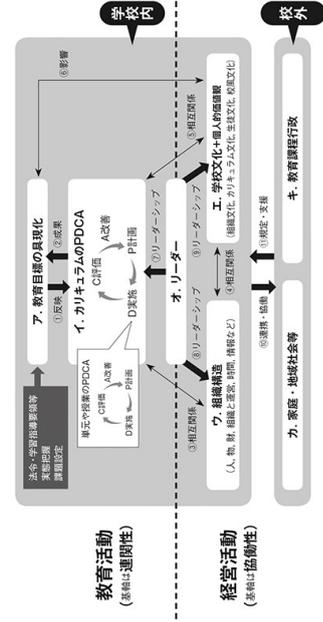


図 田村によるカリキュラムマネジメント・モデル
 (田村繁子・村川隆弘・高野孝正・期間別名義編纂『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい、2016年)

3つの側面

- **カリキュラムの体系化**
 - ・ 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等構造的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- **P D C A の確立**
 - ・ 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のP D C A サイクルを確立すること。
- **資源の活用**
 - ・ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。
中央教育審議会（2016）

設計者と実施者

<ul style="list-style-type: none"> ■ 日曜大工 設計 本人 実施 同一人物 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 東京スカイツリー 設計 日建設計 実施 大林組
<ul style="list-style-type: none"> ■ 通常の授業 設計 教員 実施 同一人物 	<ul style="list-style-type: none"> ■ カリキュラム 設計 カリキュラム委員 実施 多くの教職員

基盤となる3つのポリシー

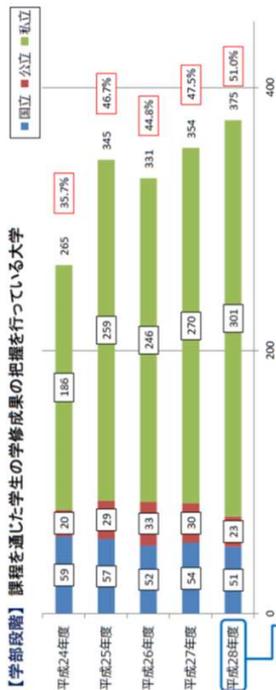
- **ディプロマ・ポリシー**
 - ・ 各大学がその教育理念を踏まえ、どのような力を身につければ学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの。
- **カリキュラム・ポリシー**
 - ・ ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施するのかを定める基本的な方針。
- **アドミッション・ポリシー**
 - ・ 各大学が、当該大学・学部等の教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容を踏まえ、入学を受け入れるための基本的な方針であり、受け入れる学生に求める学習成果（学力の3要素※）を示すもの。
 - ・ ※ (1) 知識・技能、(2) 思考力・判断力、表現力等の能力、(3) 主体性を持った多様な人々と協働して学ぶ態度

P D C A の確立

- **編成**
 - ・ D P や C P に沿ったカリキュラム編成
- **実施**
 - ・ カリキュラムに沿った授業と学習の実施
- **評価**
 - ・ 学習成果などに基づくカリキュラムの評価
- **改善**
 - ・ 評価結果をカリキュラムや F D ・ S D に反映

カリキュラムの評価の現状

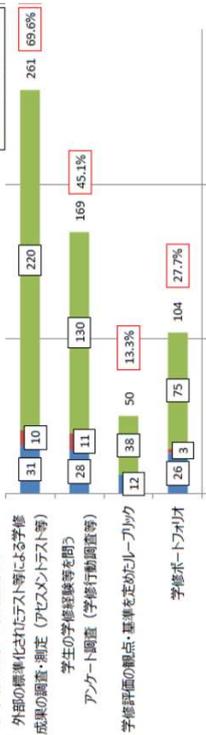
【学部段階】 課程を通じた学生の学修成果の把握を行っている大学



文部科学省 (2019)

学習成果の評価方法の現状

○学修成果の把握方法



文部科学省 (2019)

評価指標の例

	入学前・入学直後	在学中	卒業時・卒業後
大学全体	<ul style="list-style-type: none"> 入学試験 学生調査 調査書等の記載内容 入学時調査 	<ul style="list-style-type: none"> 休学率 進学率 学生調査 満足度調査 学修行動調査 課外活動状況 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業率 就職率 進学率 学位授与数 アンケート調査
学部毎	<ul style="list-style-type: none"> 入学試験 入学時調査 面接、志望理由書等 	<ul style="list-style-type: none"> GPA 進級率 休学率 修得単位数 満足度調査 学修行動調査 課外活動状況 	<ul style="list-style-type: none"> GPA 国家試験合格率 単位修得状況 卒業時満足度調査 アンケート調査 就職率 学位授与数 就職先の卒業生の評価
科目毎	<ul style="list-style-type: none"> 入学試験 ブレイスメントテスト 	<ul style="list-style-type: none"> 成績評価 学修ポートフォリオ 	

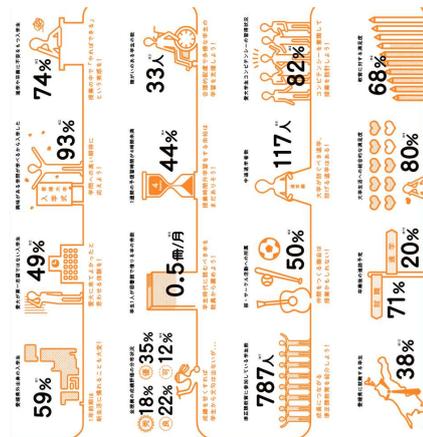
さまざまな評価の視点と方法

- 評価の主体
 - ・ 教員、学生、学外者
- 進級・卒業と学習成果
 - ・ 標準年限で卒業できたか
 - ・ 期待される学習成果は身についたか
- プロセスと成果
 - ・ 解釈や改善のためにはプロセスの情報が必要
- 直接評価と間接評価
 - ・ 「何ができると考えているか」
 - ・ 量的評価と質的評価
- 教育目標を達成したと考える学生が9.5%
 - ・ 「2年次に留学できる時間割にしてほしい」という意見

直接評価と間接評価

- 授業レベルにおいて直接評価は基本だが、カリキュラムレベルにおいて直接評価は難しい
- カリキュラムレベルでも直接評価をすべきという主張もある
- さまざまな直接評価の試み
 - ・ 卒業論文のルーブリック評価
 - ・ ポートフォリオによる評価
 - ・ 実習での習得度の評価
 - ・ 重要科目でのパフォーマンス評価
 - ・ 外部の業者による標準テストの実施
 - ・ 資格試験の合格率や得点

評価結果の共有の例



ルーブリックの例

領域	評価項目	A	B	C	D
トータル	知識	基礎知識がほぼ正確に理解できている。	基礎知識が正確に理解できている。	基礎知識が正確に理解できている。	基礎知識が正確に理解できている。
	技能	基礎技能がほぼ正確に理解できている。	基礎技能が正確に理解できている。	基礎技能が正確に理解できている。	基礎技能が正確に理解できている。
トータル	知識	基礎知識がほぼ正確に理解できている。	基礎知識が正確に理解できている。	基礎知識が正確に理解できている。	基礎知識が正確に理解できている。
	技能	基礎技能がほぼ正確に理解できている。	基礎技能が正確に理解できている。	基礎技能が正確に理解できている。	基礎技能が正確に理解できている。

<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/~rubric/index.html>

教学マネジメントの組織体制

- 組織構造
 - ・ カリキュラム編成、評価、改善の制度
- 経営資源
 - ・ カリキュラム編成に必要な人員や予算の整備
- リーダーシップ
 - ・ 教学マネジメントを推進するリーダーシップ
- 組織文化
 - ・ 教育理念を共有し組織的に教育するという意識
 - ・ 学外との連携と協働
- 学外の協力者との連携の推進

まとめ

- **大学教育の質保証の特徴**
 - 学生を育てる教育と評価を基本方針とした質保証の仕組みの構築
- **大学のカリキュラムの編成原理**
 - 委ねられた裁量を活用して特色ある体系的なカリキュラムの構築
- **教学マネジメントの体制の整備**
 - 編成、実施、評価、改善のサイクルの確立とハード面とソフト面の体制の強化

主な参考文献

- 愛媛大学教育企画室 (2015) 『データから考える愛媛大学授業改善 Vol.01』
- 金子元久 (2013) 『大学教育の再構築』玉川は学出版部。
- 京都大学高等教育研究開発推進センター編 (2012) 『生成する大学教育学』ナカニシヤ出版。
- ハートン・フランク (1994) 『高等教育システム-大学組織の比較社会学』東信堂。
- 佐藤浩章、中井俊樹、小嶋拓郎子、城崎祥子、杉谷祐美子編 (2016) 『大学のPD Q&A』玉川大学出版部。
- 田中耕治編 (2018) 『よくわかる教育課程 第2版』ミネルヴァ書房。
- 田中耕治、三石初雄、水原亨敏、西岡川名穂 (2005) 『新しい時代の教育課程』有斐閣。
- 田村知子編 (2011) 『実践・カリキュラムマネジメント』きょうせい。
- 田村知子、村川雅弘、吉高芳正、西岡川名穂編 (2016) 『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』きょうせい。
- 中央教育審議会 (2016) 『実践・カリキュラムマネジメント』きょうせい。
- 中央教育審議会大学分科会 (2016) 『「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ、ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学選抜の方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン』。
- 中央教育審議会 (2018) 『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (審申)』。
- 中井俊樹編 (2015) 『アクティブラーニング』玉川大学出版部。
- 中井俊樹編 (2019) 『大学SD講座1 大学の組織と運営』玉川大学出版部。
- 中井俊樹、馬酒朋子、藤井都呂 (2013) 『大学のIR Q & A』玉川大学出版部。
- 中留武昭 (2012) 『大学のカリキュラムマネジメント-理論と実践』東信堂。
- 前田康裕 (2018) 『まんがで知る教師の学び3』さくら社。
- 松下佳代 (2016) 『アクティブラーニングをどう評価するか』松下佳代・石井英真 (編) 『アクティブラーニングの評価』東信堂。
- 文部科学省 (2019) 『平成28年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)』

連絡先

- 中井俊樹 (愛媛大学)
- メール
nakai.toshiki.us@ehime-u.ac.jp
- ウェブサイト
<https://sites.google.com/site/nakaitoshiki/>



「教学マネジメント指針」の検討状況について



文部科学省

令和元年11月29日(金) 高知大学・大阪工業大学AP事業シンポジウム
 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長補佐
 高橋 浩太郎

2040年頃の社会の姿①

2040年という時代 … 昨年(2018年)に生まれた子供たちが、大学(学部)を卒業するタイミング

→今から22年後の未来→

我が国は課題先進国として、世界の国々が今後直面する課題にいち早く対応していく必要

成熟社会を迎える中で、直面する課題を解決することができるのは
 「知識」とそれを組み合わせで生み出す「新しい知」

その基礎となり得るのが教育

特に **高等教育** については、我が国の社会や経済を支えることのみならず、
 世界が直面する課題への解決にいかに関与できるかという観点が重要

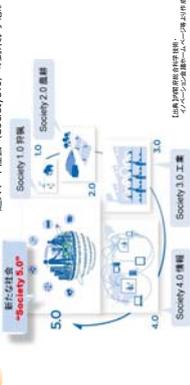
2040年頃の社会変化の方向

- SDGs(持続可能な開発のための目標) → 全ての人が必要な教育を受け、その能力を最大限に発揮でき、平和と豊かさを享受できる社会へ
- Society5.0: 第4次産業革命 → 現時点では想像もつかない仕事に従事、幅広い知識をもとに、新しいアイデアや構想を生み出せる力が強みに
- 人生100年時代 → 生涯を通じて切れ目なく学び、すべての人が活躍し続けられる社会へ
- グローバル化 → 独自の社会の在り方や文化を踏まえ、多様性を受け入れる社会システムの構築へ
- 地方創生 → 知識集約型経済を活かした地方拠点の創出と、個人の価値観を尊重する生活環境を提供できる社会へ

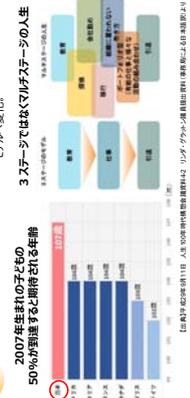
1. 2040年に向けた高等教育の グラントデザイン

2040年頃の社会の姿②

Society5.0
 AI、ビッグデータ、IoT、ロボティクス等の先端技術が
 高度化してあらゆる産業の生産性向上に導入され、
 超スマート社会(Society5.0)の到来が予想。



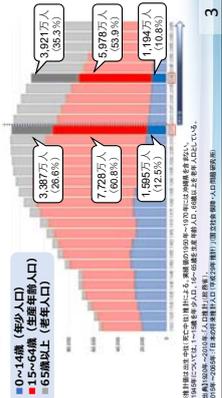
人生100年時代
 2007年生まれた子供の
 50%が到達すると思われる年齢



グローバル化
 在留外国人数 247万人
 海外在住日本人数推移



人口減少
 0-14歳(若年人口)
 15-64歳(生産年齢人口)
 65歳以上(老年人口)



IV 学修成果・教育成果を最大化する方針に沿った学修者本位の教育を確保するための必要不可欠な望ましい教職員像を定義した上で、対象者の役割や経験に応じた適切なFD・SDを組織的かつ体系的に実施していく必要がある。加えて、FD・SDは、学修成果・教育成果の把握・可視化により得られた情報の共有、課題の分析、改善策の立案等、実際に教育を改善する活動として位置付け、実施する必要がある。

また、教学IRは、教学マネジメントの基礎となる情報を収集する上での基礎であり、学長をはじめとする学内の理解を促進するとともに、教学IRを実施する上で必要となる制度の整備や人材の育成を進めていく必要がある。

- 「卒業認定・学位授与の方針」に定められた資質・能力を身に付けた学生を育成する上では、同方針に基づく体系的なカリキュラムの組織的な編成のみならず、これを学修者本位の教育という観点から適切に実施するために必要な能力や資質を備えた教職員の存在が不可欠となる。その前提として、各大学は大学全体としての教育理念や「卒業認定・学位授与の方針」を踏まえ、自身が目指す教育を提供するために教職員に必要な能力や資質を特定して望ましい教職員像を定義する必要がある。
- FD・SDは、学修成果・教育成果の把握・可視化により得られた情報を基にし、明らかに必要となった課題を分析し、これに対応するための改善方法を立てると、多くの教職員の参画を得ながら、実際に教育を改善する重要な活動と位置付けられる。この認識のもとで、組織的かつ体系的に実施することが必要。
- 教学IRは、教学改革の万全策にのみならず、教学IRの実施が改革そのものであると認識される傾向があるが、教学IRの主たる役割は大学全体の関係者、とりわけマネジメント層が教学改革について正しい判断を行うために必要なデータを収集・分析し、一定の目標達成に資する情報として提供することにある。各大学は、こうした理解を運ぶとともに、学内で教学IR活動を行う上で必要な体制、仕組み、情報連携等を、自大学にとって最適な形で整える必要がある。様々な部署から円滑にデータを収集し、適切な分析を行うために教学IR部門に必要な権限を付与する等の環境整備、データの適切な取扱いに関する学内規定等の整備、それらに基づいた運用の確立が重要である。 等

V 情報公表

各大学が、学生や学費負担者、入学希望者等の直接の関係者に加え、幅広く社会に対して積極的に説明責任を果たしていくことが必要である。また、大学教育の質の向上という観点からも、情報公表には重要な意義がある。

今後、各大学がその有する強みと特色を活かして学修者本位の観点からその教育を充実していくためにも、学生の学修成果や大学全体の教育成果に関する情報をより自発的・積極的に公表していくことが必要となる。また、社会との関係の深化に伴い、地域社会や産業界、大学進学者等の大学の外部からの声や期待を意識し、社会からの信頼と支援を得るという好循環を形成するため、さらに、社会からの評価を通じた大学教育の質の向上を進めるためにも、情報の公表を積極的に進めることが必要である。

- 大学が教育活動に関する情報を積極的に公表する意義としては、「直接の関係者に対し、学生はどのような学位プログラムにおいて、どのような能力を身に付けることができるのか等を具体的に提示する」、「広がり形態の様々な支援を得ている大学に対し、教育という公共的使命を担う社会的存在として、大学教育に関する情報を積極的に公表する」という説明責任の観点から強調されてきた。
- 若し、大学が積極的に大学教育に関する質の維持・向上を図っていることを、認証評価だけでなく、大学自身が社会に列して公表するという行為そのものが、各大学の教育の質の維持・向上に向けた動機となり、取組を促す側面があるとも考えられる。
- 地域社会や産業界などの社会との関係が深化していく変化が予想される中、社会から見えづらいと書かれた大学内部でのどのような取組が行われているかが理解されることが必要となる。大学が積極的に情報公表を行うことで、大学外部からの声や期待に応えていることを示し、社会からの評価と支援を得るという好循環を形成することが求められる。
- 大学の活動は他面でも相互に関係を有することから、情報公表においても様々な情報を組み合わせて大学全体の姿をできるだけ包括的に描き出す必要がある(例えば、厳格な成績評価を行うことは、修業年限内卒業率や中退率等に影響する。研究所の専用に係る教職員数の運いがある、など)。個々の情報が単独で示すことのできる内面には限界があり、数字の意味や組み合わせ方等、大学における分析や解説を合わせて公表することは、大学教育の質を判断する情報として活用できると考えられる。
- 逆に、ごく特定の指標のみを用いて大学教育の質を判断しようとすることや、一面的な序列化につながる利用は、大学の自発性を損ない、理解と信頼を醸成した行為であると言わざるを得ない。 等

日本福祉大学
2019年11月29日 高知大学・大塚工業大学AP事業シンポジウム

AP事業テーマV幹事校挨拶

日本福祉大学 中村信次
AP事業推進委員長 全学教育センター長



日本福祉大学

テーマV取り組み状況

- ◆ テーマV卒業時における質保証の取組の強化
- ◆ 正課内外の取り組みをポートフォリオに蓄積し、アセスメントポリシーに基づきそれを評価、ディプロマ・サブプリメント等を通じて可視化
- ◆ 採択19校が、それぞれの状況に合わせた取り組みを展開



日本福祉大学

ディプロマ・サブプリメントの活用

- ◆ 個々の科目の成績を超えた、学生の学修活動の総合的評価
- ◆ ポートフォリオに蓄積された学修成果のサマリー
- ◆ 学生と社会、学生と大学、大学と社会の間のコミュニケーションツール



日本福祉大学

幹事校の役割

- 1) テーマV採択校を「つなぐ」:
情報共有・課題共有 ⇒ 地域別研究会
- 2) テーマ間を「つなぐ」:
「チームAP」の実現 ⇒ テーマ共催報告会
- 3) APと社会を「つなぐ」:
情報発信 ⇒ ポータルサイト



2019年度地域別研究会

第1回：8月29日 東京薬科大学

第2回：11月9日 千歳科学技術大学

○質保証の取り組みを、AP助成終了以降も継続させるための課題は何か？いかにそれを解決するか？



地域別研究会で提出された課題

- 学修の質向上と社会へのアプローチの方法
- 卒業時の学生の資質能力の可視化と提示
- 評価の方法とその妥当性・信頼性の担保
- 可視化された能力・成果などの利活用



今後の予定

○12月22日 日本福祉大学東海キャンパス

APテーマV採択校共催全国シンポジウム

○3月5, 6日 武蔵野大学有明キャンパス

AP最終年度全体報告会

○3月2日 日本福祉大学東海キャンパス 日本福祉大学公開FDシンポジウム





高知大学
Kochi University

大学教育振興国際プログラム
令和元年度高知大学・大塚工業大学AP事業シンポジウム
2019年11月29日 常翔ホール (大塚工業大学福田キャンパス)

高知大学における質保証の取り組み

高知大学 副学長 (教育担当)
大学教育創造センター長
小島 郷子

高知大学の概要

- 高知県内唯一の国立総合大学 1949年設立
6学部 (人文社会科、教育、理工、医、農林海洋科、地域協働) + 土佐さきがけプログラム
- 学部学生数 4,977名、大学院生数 (1研究科) 503名
- 教職員数 1,862名 (令和元年5月1日現在)
- 基本目標【教育】
総合的教養教育を基盤とし、「地域協働」による教育の深化を通して課題解決能力のある専門職業人を養成する。



○ Super Regional University

本日の話題

- 1 学生の能力を客観的に評価する仕組み
- 2 学修成果を可視化するための手法
- 3 教育改革に向けた教員の意識改革
- 4 AP事業終了後の取り組み

1 学生の能力を客観的に評価する仕組み

- 1 学生が身に付ける「10 + 1 の能力」

10の能力を統合

4) 大生登録簿からポートの結果を確認する

(1) トップページより「履歴・開封」を選択します。

(2) 「大生登録簿からポートの結果」を選択します。

(3) 下部のようにポータップ画面が表示され、結果の確認が可能です。

ポータップ画面

2016年度
2017年度

2018年度
2019年度

8) セルリアースメントの結果を確認する

(1) トップページより「履歴・開封」を選択します。

(2) 「セルリアースメントの結果」を選択します。

(3) 下部のようにポータップ画面が表示され、結果の確認が可能です。

ポータップ画面

2016年度
2017年度

2018年度
2019年度

2. 教員による「新合・働きかけハォーマンス評価」の結果を確認する

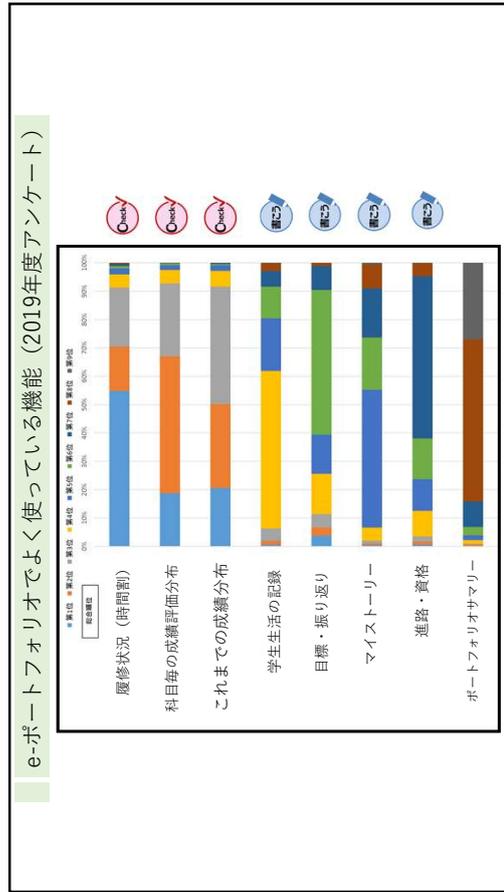
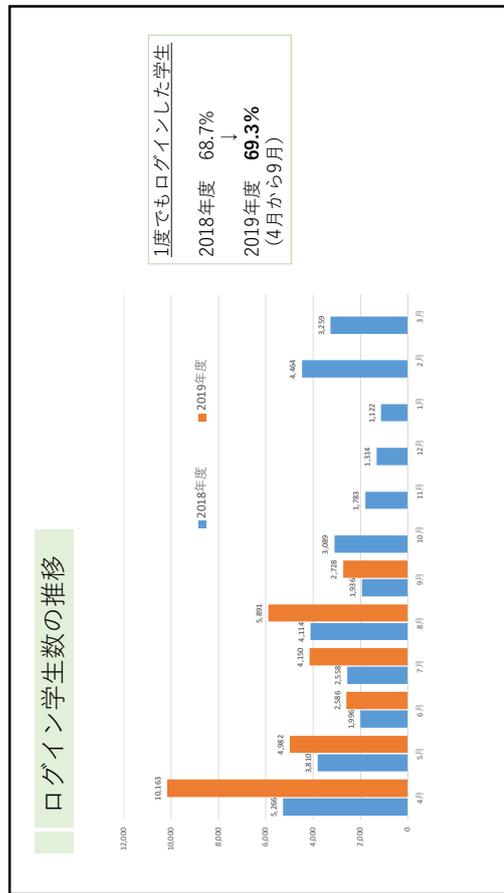
P.1-(2)の当該学生の「評価結果」ボタンを選択すると下図のように、10+1の能力に関する到達度評価の結果の閲覧が可能です。

ポータップ画面

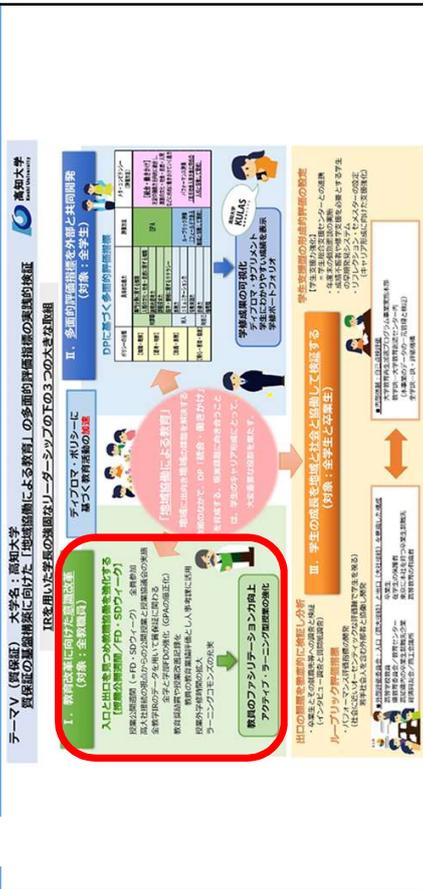
2016年度
2017年度

2018年度
2019年度

総合・働きかけの学生自己評価と教員評価の結果



3 教育改革に向けた教員の意識改革



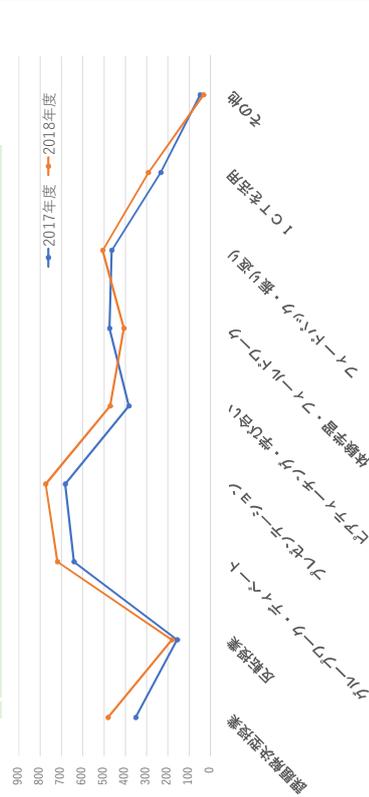
3 教育改革に向けた教員の意識改革

- 1 FD・SDワークの実施 (相互授業参観期間) 2016~2019年度実施
 - ① 授業公開者の授業改善を行う。
 - ② 授業参観を通じて参観する側の教員が授業についての内省を通じた教育改善を図る
 - ③ 職員は授業参観を通じて、大学の授業について理解する第一歩とし、業務への反映を図る。
- 2 アクティブ・ラーニング科目の実施状況 2017・2018年度実施
本学において、どの程度アクティブ・ラーニングが実施されているかについて、全学部を対象に、文部科学省の定義を基に調査を実施
- 3 教員へのアンケート調査 2019年10月～ 実施中

アクティブ・ラーニング科目開講状況 (2017年度・2018年度)

開講科目数	科目数		割合			
	2017年度	2018年度	2017年度	2018年度		
共通教育	526	537	254	245	48.3%	45.6%
人文社会科学部	550	578	117	238	21.3%	41.2%
教育学部	801	685	153	141	19.1%	20.6%
理工学部	359	357	145	129	46.0%	36.1%
医学部	244	272	180	180	73.8%	66.2%
農林海洋科学部	459	519	245	211	53.4%	40.7%
地域協働学部	77	81	74	78	96.1%	96.3%
土佐さきがけプログラム	73	84	53	28	72.6%	33.3%
合計	3,089	3,113	1,221	1,250	39.5%	40.1%

アクティブ・ラーニング授業で取り入れた活動

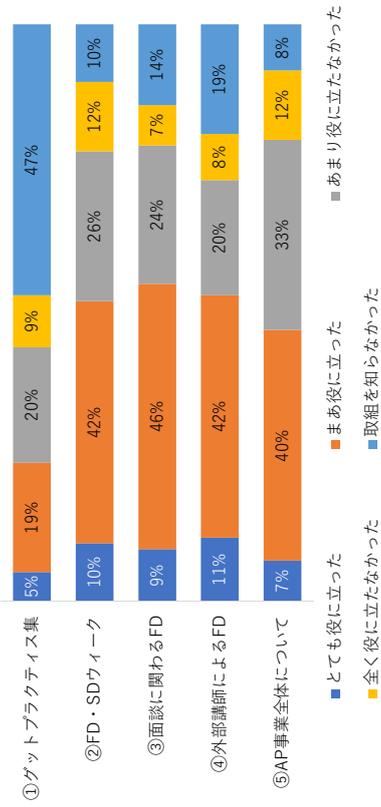


教員を対象としたアンケート 2019年10月～

学部等	回答数	アトバイザー経験		専任担当者数
		あり	なし	
人文社会科学部	39	33	1	63
教育学部	26	19	5	60
理工学部	62	56	4	80
医学部	45	38	3	243
農林海洋科学部	34	32	1	73
地域協働学部	20	14	4	24
土佐きかけプログラム	3	3	0	36
計	229	195	18	546

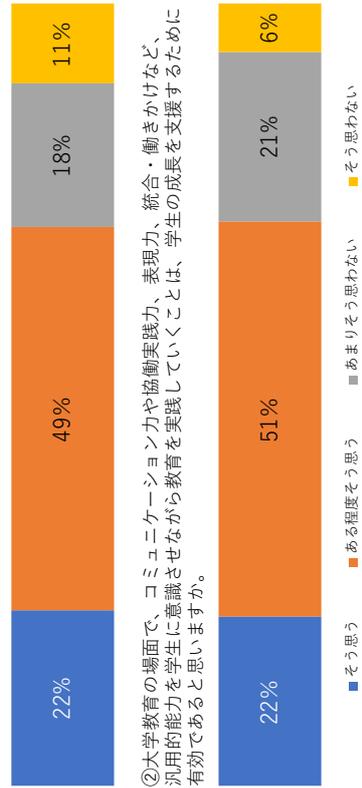
※医学部のアンケート対象者は教授52名

教育改善に役に立ったか

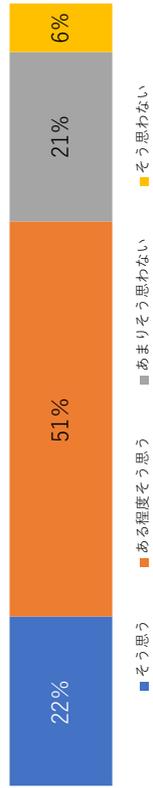


学生面談等について

①学生面談は学生の成長を支援するために有効であると思いますか。



②大学教育の場面で、コミュニケーションや協働実践力、表現力、働きかけなど、汎用的能力を学生に意識させながら教育を実践していくことは、学生の成長を支援するために有効であると思いますか。



ゼミや実験・実習、卒論研究の指導について

①学生に専門領域の知見を深める機会を与えていて、教育効果が高い。



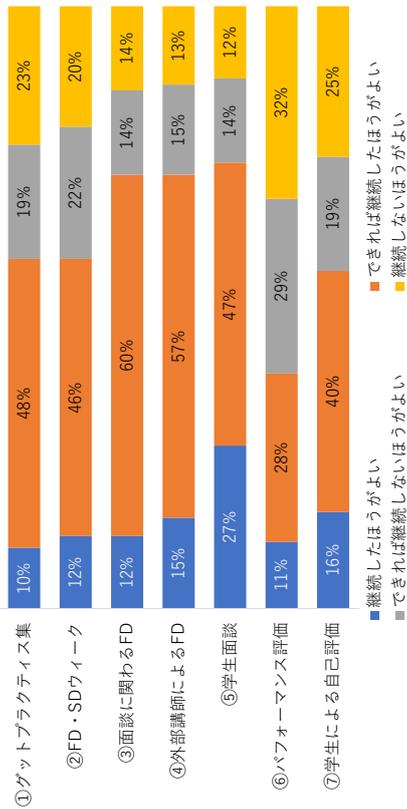
②学生に一定期間、同じ課題に向き合い試行錯誤を繰り返す機会を与えていて教育効果が高い。



③教員の負担に見合った教育効果を上げている。



高知大学が全学的に取り組んできた事業について



4 AP事業終了後の取り組み

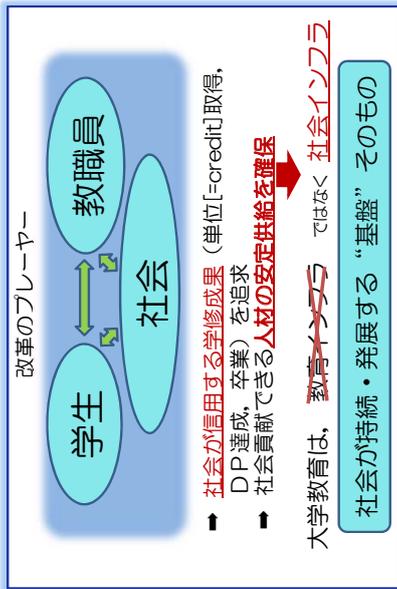
- 1 システムの有効活用と教育改善
- 2 意識改革と業務の適切な見直し
- 3 AP事業から教育活動へ

高知大学のAP事業の取組報告を
ホームページに掲載しています。



高知大学AP事業ホームページ: <https://fd.s.kochi-u.ac.jp/kuap/>

2-1 現在の教育改革：抱負



2-2 現在の教育改革：方向性



2-3 現在の教育改革：学長方針

- ◆学長方針（2016年3月10日）
 『大阪工業大学「教育の質保証」
 一達成度管理に向けた取り組みについてー』
- 「（前略）まず達成度の基準となる「**ミニマム・リクワイアメント**」設定を適正化し、その達成に応じた厳正な成績評価を行うことで、学生の意識の中に学修活動への積極性をこれまで以上に醸成するとともに、基礎知識の定着や学力伸長を促進する施策につなげたいと考えます。
- この取り組みには、本学における成績評価の現状や学生による「学修成果」の美態把握や厳正な評価適用後の学生へのケアなど、各段階でさまざまな作業や対応が求められます。そのため、各学部独自の検討だけでなく、教務部や教育センター・IRセンターなど、学内関連部署との連携を図りながら、全学の総力を挙げて取り組む必要があります。（後略）」

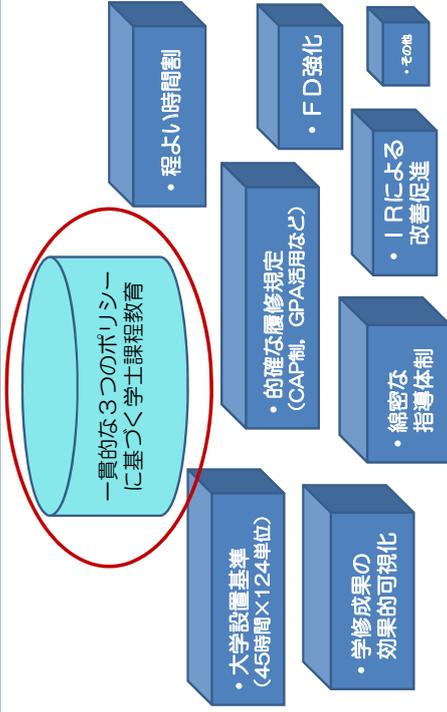
2-4 現在の教育改革：取組①

- ◆AP関連の各種取組
- ・**デュプロマ・サブリエント (DS) システム**
 - ・デュプロマ・サブリエント（学修成果補助証明書）導入
 - ・**ミニマム・リクワイアメント**と分野別達成目標の整備
 - ・カリキュラム・マトリックスの整備
 - ・「**累計GPI**」の活用（GPAだけでなく）
 - ・達成度確認テストの導入
 - ・卒業研究書手要件の見直し
 - ・キャリア形成支援手帳導入
 - ・PROGテストによるメタ認知・自己学修の促進
 - ・4年間一貫した自己点検・指導のステップ整備
 - ・各種アンケート（学生/卒業生/企業）拡充
 - ・取組全体の検証と改善作業の推進（IR）
- その他
- ⇒すべて**DP達成度向上**に向けた**志向性**と**連動性**

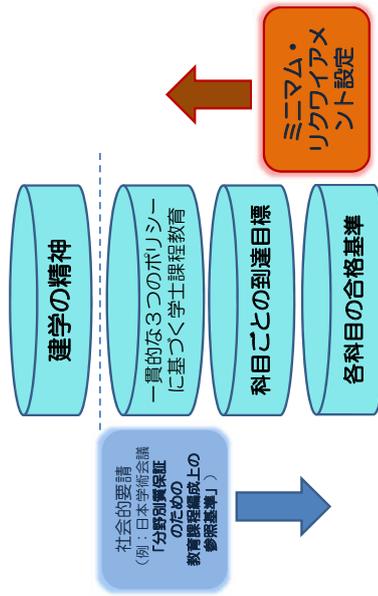
2-5 現在の教育改革：取組②

- ◆他の教育環境改革（例）
運動性強化に向け、細部に至るまで制度改善・取組実施
- カリキュラム改革（スリム化）
 - CAP制上限見直し
 - 卒研の合否科目化
 - 科目間の学修内容連携向上
 - PBL（その他アクティビ化）推進
 - 講義科目とPBL科目の学修内容連携促進
 - 国際連携プログラムの多様化と拡充
 - 授業100分14週化
 - FD・SD推進による学修指導力向上
 - 大学院強化
（研究推進、環境整備強化、奨学金制度拡充） その他
- ⇒「建学の精神」と「質保証」のバクトルを改めて融合

2-6 現在の教育改革：質保証の方策

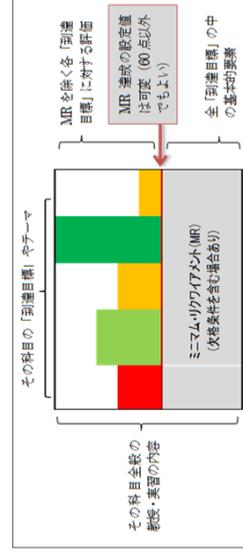


2-7 現在の教育改革：質保証のバクトル



3 ミニマム・リクワイアメント (MR)

- ◆必ず修得しなければその科目の単位取得に至らない最低限の「知識・技能」「思考力・判断力」「態度・姿勢」など（必要条件）



4 AP 基盤システム

◆学内データ集積により

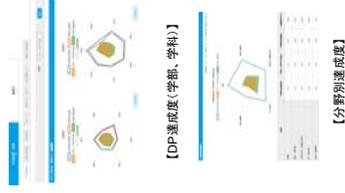
- 1) 自己学修促進, 修学指導強化, 就職支援
→ ディプロマ・サブリエメント (DS) システム
- 2) IR分析に基づく検証・課題抽出・改善
→ IR年報, IRシステム



5-1 ディプロマ・サブリエメントシステム

◆可視化項目

- ① ディプロマ・ポリシー (DP) 達成度
- ② 専門科目分野別達成度
- ③ 卒業要件別取得単位数
- ④ TOEIC
- ⑤ グレード・ポイント (GP) およびGPA
- ⑥ 入学時学力確認テスト
- ⑦ 授業外学修時間
- ⑧ 汎用的能力 (PROGテスト結果に基づくリテラシー/コンピテンシー)



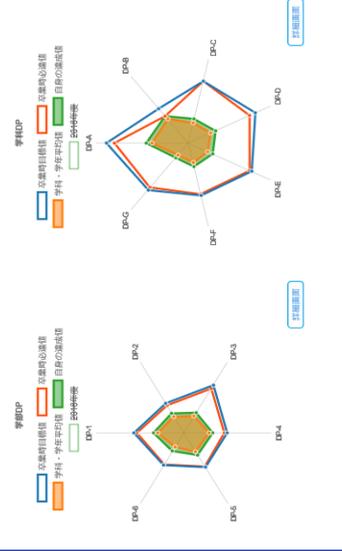
5-2 DSシステム：表示情報の特徴

- ◆基本情報
 - ・ 学生自身の達成値、獲得スコア
 - ・ 学生自身の経年(期)伸長
- ◆比較対象情報 (表示/非表示は指標によって異なる)
 - ・ 学科平均値
 - ・ 卒業時の必達値 (全卒業生に達成してほしい“近い”目標)
 - ・ 卒業時の目標値 (可能ならば到達してほしい“遠い”目標)

5-3 DSシステム：表示情報①

◆ディプロマ・ポリシー達成度

- ・ 学部DPと学科DPそれぞれの達成度を表示



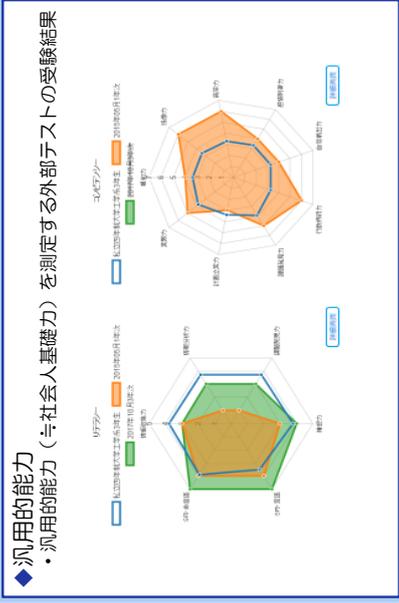
5-4 DSシステム：達成度の算出基盤

◆カリキュラム・マトリックス

- ・DP達成度測定のための基礎データ
- ・DP各項目伸長に向けての各授業科目内容の貢献度を段階化

領域	分野別目標	履修科目	達成度															
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
基礎センター	基礎センター 新幹線システム工学	基礎センター	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		新幹線システム工学	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		システム工学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		システム工学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
基礎センター	基礎センター 新幹線システム工学	基礎センター	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		新幹線システム工学	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		システム工学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		システム工学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
基礎センター	基礎センター 新幹線システム工学	基礎センター	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		新幹線システム工学	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		システム工学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		システム工学	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

5-5 DSシステム：表示情報⑧



5-6 DSシステム：活用方法

◆キャリア形成支援手帳

- ・内容：DSシステム活用マニュアル
在学中のキャリア形成ガイド
外部での学びの結果の活用方法
メモ欄 等
- ・使用場面：学生個々の振り返り
キャリア教育科目
基礎ゼミ
カイダンス
各種指導 等

5-7 DSシステム：指導計画

◆在学4年間の計画

- ・DSシステム活用による一連の指導機会をあらかじめ計画
⇒ 学生・教員で共有

5-8 DSシステム：修学指導（自己点検）記録票 大阪工業大学

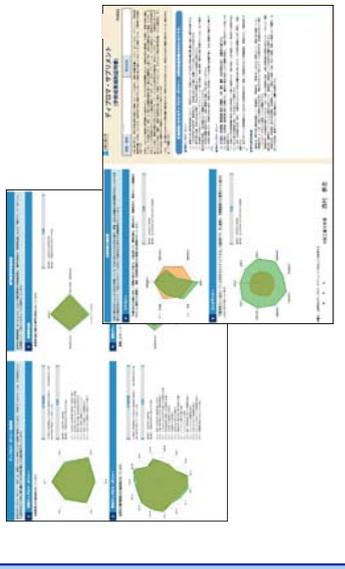
◆「修学指導記録票」の運用

- DSシステム活用による学生の自己点検の記録を残す ⇒ その点検内容の学生本人への定着（メタ認知強化）を図る
- 年2回以上を原則
- 学科から学部へ記録票回収数を報告

5-9 DSシステム：ディプロマ・サブリメント 大阪工業大学

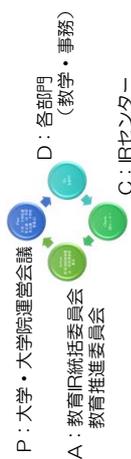
◆ディプロマ・サブリメント（学業成績補助証明書）

・就活時に志望企業に提出して活用



6-1 IR：内部質保証に向けて 大阪工業大学

◆学内諸部門との有機的連携



- ◆ IR対象
 - 4つの観点で、個別および横断的に
 - ・アドミッション・レベル
 - ・カリキュラム・レベル
 - ・ディプロマ・レベル
 - ・リサーチ・レベル

↑
「IR年報」の作成

6-2 IR：年報収録項目 大阪工業大学

◆目次

- 1. アドミッション・レベル
 - 1.1 「学生確保」に関するKPI
 - 1.1.1 備基礎
 - 1.1.2 一般入試志願者数
 - 1.1.3 専攻上位校への訴求力
 - 1.2 アドミッション・ポリシーの認知
 - 1.3 本学の「学生確保」における競争力
- 2. カリキュラム・ディプロマレベル
 - 2.1 「教育」に関するKPI
 - 2.1.1 ディプロマ・ポリシー達成度
 - 2.1.2 成長実感
 - 2.1.3 授業外学習時間
 - 2.2 「進路」に関するKPI
 - 2.2.1 就職率
 - 2.2.2 大学院進学率
 - 2.2.3 中堅・大企業就職率
 - 2.2.4 フラント企業就職率
- 3. IRセンター・レベル
 - 3.1 「研究」に関するKPI
 - 3.1.1 公設研究資金
 - 3.1.2 産業界からの研究資金
 - 3.1.3 主要ジャーナルの論文掲載数
 - 3.2 大学院生の進路
 - 3.3 研究ブランディング
- 4. エ大サミットにおけるIRの活動
 - その他

◆ディプロマサブリメントの項目

- 2.3 ディプロマサブリメントの項目
 - 2.3.1 分野別達成度
 - 2.3.1.1 達成感確認シート
 - 2.3.2 PROGテスト
 - 2.4 TOEICスコア

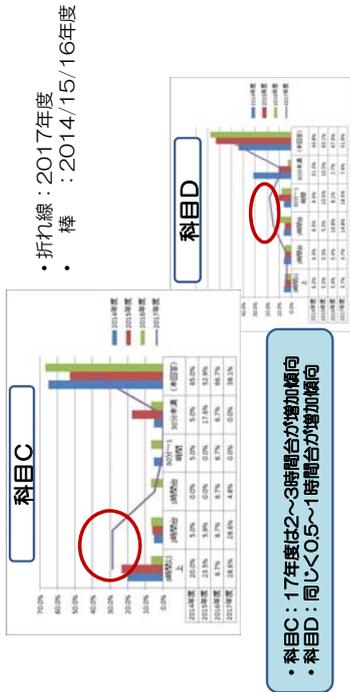
6-3 IR：年報データサンプル①

◆可視化サンプル①：成績分布（MR導入前後）の年度推移



6-4 IR：年報データサンプル②

◆可視化サンプル②：授業外学修時間の年度推移

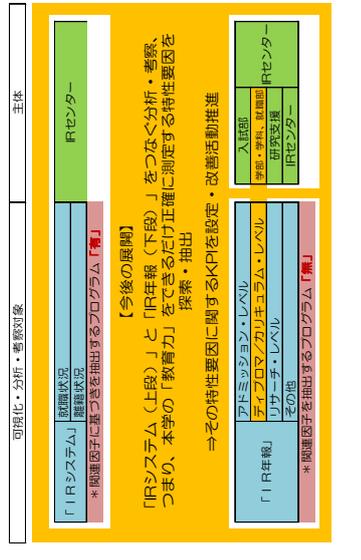


6-5 IR：分析データ

- ◆**離学者対策**
2015~2017年度入学学生を対象とし、離学状況（除籍・退学）と各種学生データとの相関分析を実施。
離学に関連のある（有意）変数をもとに離学可能性の高い学生を抽出して学科に共有し、学生支援に活用。
 - ◆**就職支援**
2015年度入学学生を対象とし、本学で定める中堅大手企業やブランド企業への就職状況や進路決定有無と各種学生データとの相関分析を実施。
就職に関連のある（有意）変数をもとに各学生の就職可能性を判定し、就職支援に活用。
 - ◆**院進学支援**
2015年度入学学生を対象とし、院進学と各種学生データとの相関分析を実施。
相関のある（有意）変数をもとに各学生の院進学可能性を判定し、学生支援に活用。
- DSシステムは、主に成績評価後の指導に活用、IR年報（IR集計データ）は、教育・授業改善などFD活動を主目的として活用する。
本データは、成績結果が出る前段階で学生の学修状況や傾向から、具体的な学修サポートを行う目的で活用する。

6-6 IR：今後の展開

◆全学で統合的なIR気運の醸成へ



文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）
テーマⅤ「卒業時における質保証の取組の強化」事業報告書（令和元年度）

発行：2020年9月
発行：高知大学 大学教育創造センター
印刷：有限会社 三宮印刷

<本報告書に関する問い合わせ先>

高知大学学務部学務課教育支援室教育企画係
〒780-8520 高知県高知市曙町二丁目5番1号
TEL：088-844-8143, 088-888-8018
Mail：kochiap@kochi-u.ac.jp
URL：https://fdas.kochi-u.ac.jp/kuap/
